

獄炎爺がシバいてくる

矢マン元

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

！
最古にして最強。業火を纏ったジジイが俺を殺しに来やがる……

勘違いが発生している様なのでここで補足を一つ

当サイトでは他作品の能力を小説内に持ち込む場合、クロスオーバータグが必要になります。これが無いと運営の方から非表示にされてしまいますので

ですので、今の所BLEACH要素は主人公の能力その他のみとなります。この辺りは悪しからず

目次

プロローグ

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

160 152 144 131 123 117 111 105 100 86 81 74 69 62 55 48 43 37 31 26 18 12 5 1

プロローグ

やまもとかんじ
山本寛治には人には言えない秘密があった。

それは、夜眠る時に行われる、とある事。

「ぬわあああああああつ?!?!止めろ、ジジイ!!殺す気か?!?!」

必死の形相で全力疾走しながら、寛治は叫ぶ。

彼の今の格好は、黒の上下。着物と袴に素足と言った格好で、その左腰には一振りの刀が差されていた。

その格好で寛治が駆けるのは、整えられた木目の床。だが、その周囲はまるで先も見通せず白い靄のように朧気だ。

何より、寛治がここまで必死に逃げているのは、その背後に追うものが居るからで。

「死にたくなければ、構えよ小童」

必死に逃げる彼の背に掛けられるしわがれた声。

それは、言ってしまったえば小柄な老人だ。

年齢をそのままに感じさせる深く刻まれた皺に真っ白の纏められた長い髭と眉毛。その一方で頭は剃り上げたようにツルリとしており、何よりその額には皺と同時に大きなバツ印の傷痕。

寛治と同じような黒の上下の着物袴に身を包みながら、上半身だけをあらわにしたその格好で右手に握るのは一振りの刀。

「何度も言うておろう。貴様が稚児の折より、その刀を手にした時から戦いの運命からは逃れられぬとな」

「だからって、その爆炎ぶちかましながら迫って来るな!!!」

寛治が叫ぶ。

というのも、老人の刀。その刀身からは猛って余りあるほどの業火が吹き上がっていた。

この老人の刀と、寛治の腰にある刀は同じものだ。だがしかし、同じものであるからと言って出力までが同じではない。

「とろ火であろうと、火を灯せ。何時まで逃げ回っても、埒が明かんどぞ」

「~~~~~ツ!くっそがつ!!!」

何度目かの髪を掠めた業火に顔を歪めて、寛治は抜刀、無理矢理にでも向き直った。

構えた刀は、その一点の曇りもない白刃に炎を反射させて怪しく輝く。

霞の構えをとりながら、寛治は息を一つ吐き出した。

「万象一切 灰燼と為せ—— 『流刃若火』 ツ!!」

解号が響き、彼の刀、その刀身から一気に火炎が吹き上がる。

だが、見た目は似ていてもその熱、規模、破壊力。あらゆる面で対峙した老人には、劣る現状で、しかし寛治は逃げる訳にはいかなかった。

逃げても、焼かれるし、斬られるだろう。それも相当無惨に。であるのなら、立ち向かうしかない。

—— 山本寛治の戦いは、これからだ！

*

「いや死んでねえわ」

誰に突っ込んだのか、しかしその言葉はむなしく虚空に溶けて消えていく。

うんざりとしたため息を吐きながら、寝た気のしない重い体を無理矢理起こして、山本寛治は右手で目元を押さえて項垂れる。

物心つくかつかないかの年齢の頃から、山本寛治は夢を見た。

それが、あの老人との鍛錬だ。

最初は、素手だった。それも、護身術や合気道のような、極力打撃を用いないもの。

それから暫く経って打撃、更に刀を用いた剣術やら、特殊な術やら。ともかくにも只管に、老人は寛治をしばいて、扱いて、苛め抜いてくる。

眠れば、何処だろうと鍛錬の始まり。夜もそうだが、昼寝や居眠りであろうとも、眠るだけで理不尽が襲い掛かってくる。

特筆すべきは、彼の精神面の強さだろう。心臓に毛が生えているどころか、そのメンタルは特殊超合金のように折れず、曲がらず。夢の中でも、只管に愚痴ろうとも、最終的には挑んでいける。

何より、十五年生きてきて廃人になつていないのだからその凄さも分かる事だろう。

もう一つだけため息を吐いて、寛治は布団から立ち上がる。

手際よく敷布団や掛け布団を畳んで押し入れの中に放り込み、ついでに寝間着であるジャージから用意していた制服へと着替えておく。

立ち上がって大きく伸びを一つ挟んで寛治は自室を後にする。

広い家だった。平屋であるが、和式の建築。歩く廊下は黒檀のように黒く艶がある板材で出来ており、壁は漆喰。

この家の住人は、寛治ただ一人。だが、別段暗い過去があるとかそんな事ではない。彼の両親は海外で今頃ラブラブ（）している事だろうから。

リフォームしたキッチンでパンを焼き、付け合わせのヨーグルトなんかを用意した味気ない朝食。

適当に腹の中にものを溜めて、洗面台で歯磨きをした上で身嗜みを整える。使った食器も洗って水切り籠の中へ。

いつも通りの朝。向かうのは、今年から通う事になった高校だ。進路として選んだ理由は、近かったから。幸いな事に、金銭面では困窮していないお陰で彼は選択肢を広く持つ事が出来た。

未だに着慣れない制服の首元を若干緩めながら、寛治は通学路を行う。余談ではあるが、彼は夢で精神的に疲れる事はあっても肉体的には疲労が抜けているという不思議体験を昔からずっとしてきた。

まあ、それでも眠いものは、眠い。

「くああああ……」

大きな欠伸がこぼれて、眦に涙がにじむ。精神的な疲労というのは、自然と肉体にも影響を齎す最たる例だ。

肩を回して、道中で眠気覚ましのハツカ飴かミントガムでも買おう

かと考えていれば、不意に背後に気配を感じ取った。

「——おはようございます、山本さん」

「よお、おはよう、塔城」

小さいともとれる声に振り返れば、そこに居たのは白い髪の小柄な少女。

塔城小猫。今年度から同じクラスになった少女。

男子の平均身長である寛治であるが、それよりも更に小さな小猫は小さい。それこそ、横に並べば頭一つは確実に。

そんな二人であるのだが、出会いは教室の席だ。適当に腰掛けた場所が、偶々隣同士でそこから交流が出来た、そんな関係。

「寝不足ですか。あまり、褒められた事じゃありませんけど」

「まあ、な……いや、寝てるんだぞ？ただ、まあ……ちつと疲れているだけさ」

「それは、寝た事になるんでしょうか？」

おっしやる通りで、と内心で寛治は同意する。だが、この疲れも慣れてしまえば順応できる。欠伸が零れても実際その場に倒れるようなハマもしない為、特段問題なし。

和やかに会話を挟みながら道を行く二人。

だがしかし、その実二人の間柄は偶々同じクラスとなった級友——
——というだけには収まらなかつたりする。

山本寛治は知っている。傍らの少女が、人ではない事を。

塔城小猫は気付いている。傍らの少年が、溢れんばかりの霊力を備え、戦える人間であるという事を。

和やかさの裏側にある、互いを観察する目。互いが互いに、己を探っている事に気付きながらも、しかし何もしない。

そんな歪さの中で、学園生活は始まった。

駒王学園。幼稚園から大学までの一貫校で、元々は女子高であったのが共学になった、という過去がある。

何故このような話をするのかと言えば、この進学校通常の共学の高校と比べても男女比率に偏りがあった。

具体的には、女子が多い。それも世間一般的に見目麗しいと言えるような、容姿の整った少女たちが多数在籍しているのだ。

そんな学園であるからか、不埒な事を考える輩というものは大なり小なり現れる。それを阻む学力の壁というものがあるのだが、時にエロ根性はあらゆる障害を薙ぎ倒す。

「よくやるな……」

窓枠に肘を乗せて、外を眺める寛治は呆れた様な雰囲気で見下ろして呟いた。

彼が見る先では、三人の男子生徒が女子剣道部やらを含めて目を三角にした少女たちに追い回されている所。

この三人、二年生であるが、既に一年生の面々にも周知されている問題児であったりする。

具体的には、覗きだとか、校内へのわいせつ物持ち込みだとか、大声で猥談だとか。とにかくにもスケベにスケベを重ねた、ド変態として知られていた。

寛治としても、そういう事に興味が無い訳ではない。それでも、TPOは弁えるべきだろう、と思ったり。

それはそれとして、

「眠い……」

ポカポカとした日差しに、自然と瞼が下りてくる。

チラリと時計を見れば、休み時間が終わる迄5分ほどある。寝るには足りず、かといってこのまま眠気を引っ張って授業を受ければ間違はなく居眠りしてしまうだろう。

どうした物か、と考えている内に瞼が下りてくる。

時間にすれば、1分も無いだろう。それでも、確かに彼の意識はそ

ここで途切れたのだ。

「——弛んでおるな」

それが失策。気付けば、寛治は夢の中の鍛錬場へと落ちていた。

「ゲツ、爺……」

「午睡に耽るなど、言語道断。弛んでおる」

「いや、でもな……」

「じゃが、ちょうど良い。お主はまだまだ半人前。ひよっこを扱く時間など、どれだけあっても足りぬからな」

老人が手に持った杖で床を突けば、その突いた忽ちの内に解けて一振りの刀が露となる。

ここまですると、寛治がどれだけ言い募っても意味がない。

渋々、意識を集中すると、彼の左腰に老人と同じ刀が現れた。

「万象一切灰燼と為せ——流刃若火」

同時に刀が鞘より引き抜かれ、響く解号。業火がそれぞれの刀身から勢いよく吹き上がった。

文字通りの火力と、出力に劣る寛治。彼が抗うには、どうすれば良いのか。

その答えの一つを、彼はこの10年で編み出していた。

「ふうふうふううーっ」

大きく息を吹き出しながら、右手に握った刀へと意識を集中。

猛り暴れ狂うように燃え上がる炎が、まるで巻き取られるようにして刀身、並びに右手一本へと渦を巻いて集中していく。

規模や破壊力、火力で勝てないのならば、どうするか。寛治が出した答えは、一点集中による火力の底上げ。

一点集中させるのだから、当然ながら攻撃範囲は格段に狭くなる。なるがしかし、その分破壊力は増す。

もつとも、

「——まだまだ、温いわッ!!」

目の前の老人には、猿の浅知恵同然。

炎を収束しようとも、老人の炎は広げた状態で同等以上の破壊力を発揮する事が出来た。

瞬く間に業火の中へと飲み込まれ、フツリと意識は弾け飛ぶ。

「……」

完全に寛治の姿が燃え尽き消し飛んだことを確認して、老人は刀を鞘へと収めた。

年の頃としては、山本寛治という少年はかなり強いのかもしれぬ。事実、生半可な相手には傷一つ付けられることは無いだろう。

だが、ソレはソレ、コレはコレ。老人にしてみれば、半人前という評価もかなり甘めにつけているつもりだ。

足りないのは、圧倒的実戦経験。格上相手にも物怖じせず、気後れせず、怖気づく事無く戦う事が出来るが、しかしその逆に命懸けで向かってくるような相手と戦ったことは無い。

窮鼠猫を噛む、とも言ふ。その後のネズミがどうなるかは想像に難くないが、しかし乾坤一擲で向かってくる相手は、格下であっても軽んじる事は出来ないもの。

幸いと言うべきか、相手には事欠かない。寛治の試練は、まだまだ続く。

*

(ひでー目にあつた……)

内心でぼやきながら、寛治が思い出すのは昼間の事。

結局、老人に吹っ飛ばされて、意識が浮上したのは寝落ちして1分も経っていない時間だった。胡蝶の夢をリアルに体験したようなものの。

それからも、少し意識が落ちればその都度焼き殺される事13回。

寛治の寝過ぎを指摘するべきか、それとも夢の中の老人の鬼のようなしごきを指摘すべきか。

とにかく、今は放課後。別段部活動などにも参加していない寛治は、今日の夕飯の献立を考えながら帰路についていた。

(冷蔵庫には何があったか……もう、牛丼とかで良いか? いや、牛肉あったか? んじゃ、肉丼でいいや)

一般男子高校生よりは料理のできる寛治ではあるが、しかしだからといって自分の食にそれほど深い関心や拘りがある訳ではなかった。そも、暴飲暴食をしても太った事も病気になった事も無いのだから、食に気を配れと言われても、土台無理な話。

因みに、彼の作ろうと思っている肉丼は、玉ねぎを炒めてしんなりさせてから、甘辛い醤油ダレで煮込み、更にそこに肉を投入して煮込む超簡単なもの。それから、味噌汁と漬物。味に関してはずゆの出来上がり次第。

夕飯の当ても出来て軽やかに帰路を進む寛治の足。

だが、それは不意に止められた。

面倒くさそうに、彼は頭を掻き、そして徐に視線を空へ。

「……俺に、何か用事か? オッサン」

「——ほう、気が付いたか」

数枚の黒い羽根が舞い、彼は寛治の前へと降り立った。

青年、と言うには歳のいったトレンチコートにハット姿の男。パツと見では落ち着きのある渋い大人と言った姿だろう。

だが、その背中に背負った黒い翼が、彼が人外であると声高に主張していた。

「その力、上手く隠しているようだが俺達の目を誤魔化す事は出来ん。
セイクリッド・ギア
神器であろうと無かろうと、レイナーレ様の計画の障害となる可能性があるのなら、排除する」

「レ……? とりあえず、やるってのか?」

「抵抗する事を、止めはせん。貴様が何をしようと、俺とお前には大きな力の差があるのだからな」

言うなり、男はその右手に光を圧縮させ、一振りの槍を携える。

男は、墮天使だ。天使が欲によって墮ちた姿。光を操る能力を基本としており、背には黒い翼を持ち、逆に天使の際に持っていた頭の輪

を失っている種族だ。

その強みと言えば、やはり聖と魔の両方に適性を持つ点。

悪魔のように、光を弱点としない。天使のように、欲望などの誘惑を弱点としない。弱点の少なさは、そのまま自分の身の安全にもつながり、同時に採れる戦略の幅の広さにも繋がる。

墮天使ドーナシークが目の前少年に目を付けたのは、本当に偶々の事だった。

彼らとはある計画の為に神器使いを手に掛けること数度。その数度の中に、寛治が引つ掛かってしまったのだ。

墮天使のみならず、人外と言うのは大なり小なり、人間という種族を下に見る節がある。今回もその例に漏れず、ドーナシークは目の前の少年を単なる少し特殊な力を持ち合わせた塵芥程度にしか認識していない。

その手に握る槍で貫いて、終わり。

一方で、寛治もまた相手が自分を舐め腐っている事には気が付いていた。

夢の中の老人は、彼の戦闘経験が浅い点を危惧していたが、だからといって相手の情報を読み取るような能力を持ち合わせていない訳ではない。

(危ないのは、あの槍か。ま、俺は人間だしな。腕なんて飛んだら、カニとかみたいに生えては来ねえわな)

小さく息を吐きながら、寛治は得物と呼び出そうと意識を集中して

「——待て」

世界が止まる。

夕焼け空であった筈の空は灰色に変わり、世界から色が失われていき、寛治の目の前には見覚えのある姿が現れた。

「この程度の輩に、刀を抜く事は許さぬ」

「爺!?!いや、ちよ——」

「素手で打倒せよ。鬼道ならば、三十番台までの使用を許そう」

反論は許さない。老人のそんな気迫に、寛治の頬が引き攣った。

その姿が掻き消えると同時に、世界は色を取り戻し、時計の針は動き出す。

「やいらばだ」

同時に突き出された穂先。反射的に上体を倒す事で寛治はこれを躲す。

空を切る一発に、頬が歪む。そのまま後ろへとバク転の要領で下がって、膝を落として一つ息を吐き出した。

得物が使えない以上、相手の攻撃を受け止める事が難しい。いや、出来るのかもしれないが、彼はそんな博打をする気はなかった。

握るのは、拳。そして、その姿をドーナシークは嘲う。

「ふんっ、所詮は人間か。力の使い方も知らず、そんな物拳が俺に通じると本気で思うのか？」

「さあて、な」

「……気に入らん、その目」

苛立つドーナシーク。その度合いを示すように、光の槍を握った右手に力が込められて若干の軋む音がする。

寛治は、只管に真つすぐ前を見ていた。ドーナシークの一挙手一投足を見逃さない、そんな観の目をもって観察し続けていた。

人間が自分に勝てるつもりでいる。その事実が、ドーナシークを大いに苛立たせる。

「——消えろッ！」

人外特有の馬力を用いた踏み込み、からの一点突き。狙うのは、その気に入らない瞳のある顔面だ。

だが、山本寛治はこの瞬間を待っていた。

空を切る穂先。砕ける程に踏み締められたアスファルトの地面。踏み込みの力を余すことなく関節による加速を加えて伝えられた右の縦拳。

その拳打は、単なる体術ではない。

鋼鉄のように硬い外皮を破壊し、その下の肉を吹き飛ばし、宛ら人体で放てる砲弾その物。

その名を、

「——『一骨』」

「ぶっ……!?」

ドーナシークは、呻き声の一つも漏らす事が出来ず、口から血を吐き白目を剥いた。

元より、槍が躲されるなど思いもしない。そして、人間の打撃一発の破壊力がここまで発揮されるなど躲される以上に考えた事も無かった。

トレンチコートの上から左脇腹へと深々と突き刺さる拳。その衝撃がドーナシークの体を突き抜け、勢いよく後方の空へと吹き飛ばされていた。

その飛んでいく体に向けられるのは、左手の平。

「——『破道の三十一 赤火炮』 ツ!!」

人の上半身ほどもあろうかという大きな火の玉が掌の前に現れ、そして発射。吹き飛ぶドーナシークへと空中で追いつき、その内側に込められた力が大きく爆発した。

夕暮れ空にもう一つの太陽が現れたかのような光景を前に、しかし寛治はと言うと背負っていたカバンを改めて背負い直して、脱兎のごとくその場を後にしていた。

その内心はというと、

(やつべえ、やり過ぎた！とりあえず、逃げっ！)

何とも格好の付かない事である。

しかし、この一件が後に尾を引き、彼の首を絞める事になるので、この予感当たっていたり、居なかつたり。

かくして、格下との初戦はこうして幕を下ろした。

そして、彼の平穩は終わりを告げる事になる。

一時のテンションに身を任せると、人と言うのは黒歴史を量産しやすい。

「ぬあああああああゝゝゝっ！」

ゴロゴロと誰も居ない居間で一人頭を抱えて、山本寛治は転がりまくっていた。

思い出すのは、数時間前の事。実戦の空気の中てられたとはいえ、何とか思い返すと恥ずかしいというか、首筋が痒くなってしまう。

ここが、彼の歪さだ。戦闘に対するシビアさと、そして命を奪う事への抵抗感の低さ。

コート越しに肉を打つ感触を忘れた訳ではない。放った術に関しても、殺せるだけの破壊力を込めて撃った。

偏に、幼少期からの教育の賜物。当人は気付いていないが。

暫くの間転がっていた寛治だが、やがて仰向けになるとその動きをぴたりと止めた。

考えるのは、これからの事だ。

（十中八九、気付かれただろ。いや、泳がされてた、のか？まあ、どっちでも良いや。問題は、俺が介入して良いのか、悪いのか）

寛治は、フリーだ。無所属で、自由ではあるが、裏を返せば後ろ盾がない。

個人で組織を相手取れるものは、何かしらの圧倒的な力と言うものを有している。それは権力であったり、財力であったり、知力であったり、統率力であったり、そして戦闘能力であったり。

現状の彼は、特別極まっではない。強いて挙げれば戦闘能力だが、当人が底を知らない為に極めるには至らない。

だからこそ、実戦の場が必要だった。

「——何を迷うておる」

「爺……」

悶々としていれば、気付けば周囲は灰色に。そして、彼の枕元には

老人が立っていた。

「力を持つ者は、戦う事こそが宿命。お主もその一人。何を悩む」

「爺と一緒にするんじゃないやねえよ。俺は別に、戦うのが好きだとか言う戦闘狂の気はねえんだから……戦わなくて済むのなら、そっちが良いだろ」

「じゃが、世界はお主を放つてはおかん。『今日』という時間が先になるか、後になるか。その違いでしかない」

「そりや……そうかもしねえけどさ」

老人の言い分が分からない訳ではない。鍛錬の夢を見るようになってから、現実でも寛治は夢の中の刀を、体術を、術をそれぞれ扱えるようになった。

同時に、世界にはそういう存在が居る事も知った。

例えば、クラスメイトの白い少女。

例えば、入学式で挨拶をしていた生徒会長。

例えば、学園で二大お姉さまと呼ばれている先輩たち。

それらは一例。街を出歩けば、その手の輩とすれ違う事など珍しくなかった。

敵対するのならば、容赦しない。だが、そうでないのならば関わりたくない。それが寛治として保ちたかったスタンス。

もつとも、それは元より土台無理な話だったのだが。

「——強く在れ、小童。弱ければ、何も選ぶことは出来ぬ」

しわがれた、そして今までも何度となく言われてきた言葉が、寛治の鼓膜を揺らす。

弱者に選択肢は無い。何時だって、彼らの生殺与奪の権利は強者が握っているのだから。

何も言い返せず、寛治は黙り、老人の姿は掻き消え世界には色と時間が返ってくる。

「……腹減った」

悶々としていてもしようがない。寛治は、泣きわめく腹の虫に従って身を起こすと、夜食の当てを求めて、台所へと向かうのだった。

*

時計の針は進み、草木も眠る丑三つ時。

人間たちは床に就き、その一方で人外たちは夜陰に蠢く。

「朱乃。夕方の件は、どうなってるのかしら？」

「一応、資料は纏めていますわ。しかし……」

歯切れの悪い腹心に、紅髪の悪魔はその端正な顔立ちに僅かに皺を寄せる。

彼女らが話すのは、今日の夕方に起きたとある出来事について。

駒王学園、ひいては学園が存在する駒王町は、悪魔が管理している土地だ。因みに政府公認とか、その辺りは別。ただ、ある意味では政治的な側面が大きく在り、この辺りは正直複雑。

そして、この土地の管理を任されたのが、若き上級悪魔、リアス・グレモリーだった。

リアスの頭を悩ませる問題。それは、今日の夕方に起きた事。

まるで、太陽がもう一つ現れたかのような火球が空に突然出現したのだから。

時間にすれば、一分も無い。しかし、その光景は人、人外問わずに多くの人々に目撃された。

問題なのは、このレベルの現象を起こせるであろう人物をリアスが把握していなかった点。

「神器の持ち主の暴走、って訳でもないでしょうし。それなら、今頃もっと大きな被害が出ているはずだわ」

「現場から少し離れた場所に、争った形跡もありましたわ。ちようど、二人分、といった所でしようか」

「そこよね……仲間割れか、それとも敵対してからのいざこざか」

楽観は、出来ない。夕方の火の玉が、全力であれ何であれ、街中でポンポン撃たれば、まず間違いなく壊滅的被害を被る事になる。

とにかく、地道に調べる他ない。

そう決めて、腹心である姫島朱乃へと指示を出そう———といたところ、横合いから別な情報が飛び込んでくる。

「あの……」

「どうかしたの？小猫」

「いえ……もしかすると、私の知っている人かもしれないです」

おずおずとそう言うのは小柄な少女、塔城小猫。

実を言うと、小猫もまた空に火の玉が上がった瞬間を見ていた。同時に、その火の玉より馴染みのある靈力を感じ取ってもいた。

ただ、同時に彼女の知る彼は、自ら率先して力をひけらかすような人間でもない。

「部長。この件、私に任せてもらえませんか？」

「……大丈夫なの？」

「私が考えてる相手で間違いないのなら」

事が荒立つことは、ほぼ無いだろう。それが小猫の見解だった。

だが、それは目を丸くしているリアスには伝わらない。

彼女としては、普段物静かな方の小猫がこうして積極的に動いている事に驚くと同時に、成長も感じられる庇護者の感情が浮かぶというもの。

しかし、ソレはソレ。

「……分かったわ。ただし、監視だけはつけさせて頂戴。もしもの時には、こちらにも直ぐに動くから。そのつもりでいて」

「分かりました」

頷く小猫に、リアスは一つ息を吐き出した。

思わぬ解決の糸口だが、同時に新たな問題も浮上してきてしまった。

とにかく、監視用の使い魔を選ぶことから準備を始める。そう意識を切り替える。

*

月が沈んで日が昇る。

「くあ……」

堪えきれなかった欠伸のついでに、涙がにじむ。

良くないと分かっているながらも目を擦った寛治は、カバンを掛けたのとは逆の腕を空に挙げて大きく伸びをする。

例に漏れず、厳しい夢の中の訓練。夕方の体術に関して粗を見咎められたのか、百本組手のようなありさまとなって、延々と老人との拳闘し続けていたのだ。

焼き尽されたり斬殺されたりするよりも血腥くは無いが、その分内臓に響くような衝撃が何度となく襲い掛かってくる。特に“骨”を冠した一撃は、打撃詐欺。砲撃にも勝る破壊力を有している。

まあ、どれだけ嘆いたとしてもどうしようもない。なる様になる、と内心で折り合いをつけるしか寛治には取れる選択肢が無かった。

何度目かの欠伸が口から零れた頃、背後から足音がした。

「……おはようございませす」

「おう、おはよう塔城」

いつものやり取りだ。追いついてきた小猫に合わせるようにして、その歩調は若干緩む。

「いつも通りの寝不足ですか」

「いや、寝てない訳じゃないんだが……まあ……」

「では、睡眠の質が悪いんですね」

「……………かもな」

小猫の言葉に、自分の睡眠の質は極悪も良いところだろうと内心で、寛治は嘯いてみたり。ついでに、枕とか生活習慣とかで改善できるようなものではないのだから、質が悪いと付け足した。

それから、幾つか他愛の無い会話を挟んで、学園への通学路が三分の二は過ぎた頃。

「——ところで、山本さん」

「あん？」

「昨日の夕方の火の玉について何か知ってますか」

「んぐふっ!？」

変な声が出た。というか、咽た。

「……知ってるんですね」

「んんっ……仮に、知ってたとして、どうするんだ？」

「特に、どうとも……ただ、あまり派手に動き過ぎると目を付けられま
すからね」

「警告、か」

足を止めずに、空を見上げる。

遅かれ早かれ、こうなる事は明らかだった。寛治は戦闘技能こそ多
く身に付けているが、結界などの補助系統は総じて苦手、或いは未収
得。その癖、一度戦えば、その規模は数十メートルに収まらない事も
珍しくない。

少しの間を置いて、寛治は視線を空から前へと戻した。

「……まあ、渡りに舟か。別に、事を構えよう、なんて話じゃないんだ
ろ？」

「そうですね……警戒はされてましたけど、山本さんがそういう意思
を示さないのなら、話し合い位は出来るはずです」

「そう、か……腹芸は苦手だしな。ここはいっちょ、腹を割って話し
合ってみようか」

「会うのなら、今日の放課後に私が案内します……本当に、良いんです
か？」

「ん？おう。変にバチバチするのは好きじゃねえし。顔合わせして、
相手がどういう奴なのか最低限知ってたらぶつかる事も減るだろう？」

寛治としては、これに尽きる。

性格上、彼は謀略を巡らせて掌で相手を転がす、何て事が出来ない
タイプだ。寧ろ、そんな策を練るぐらいなら、真正面から叩き潰す方
が性に合っているまでである。

かくして、本格的な接触は放課後にセッティングされる事になる。
この出会いが何を齎すのかは、まだまだ誰にも分からない。

放課後。生徒たちは部活であれ、勉強であれ、習い事であれ、各々の時間に打ち込むことになるそんな頃合。

「行きましようか、山本さん」

「おう……つっても、何処まで行くんだ？」

並び立って教室を出た小猫と寛治の二人。クラスでは、すわ二人が出来ているのではないかと言う、要らぬ邪推が飛び交って。女子は黄色い歓声を、男子は歯を食いしばって血涙を流していたり。

そんなクラスの事など知らない二人はというと、

「こつちです」

「なあ、そういえばこれから会うのって誰なんだ？」

「……多分、山本さんも知ってる人ですよ」

「知ってる……と言ってもよ。この学園、というかこの町って人外多いだろ？目星付けるには、母数が多すぎる」

「……とにかく、知ってると思いますから」

雑談の一部ではあるが、小猫は新しい情報に内心で寛治に対する評価を変更していく。

人外、というか悪魔や堕天使、天使含めて人間社会に溶け込んでいる人外と言うのは、基本的に人間と変わらない見た目をしている。少なくとも、傍から見ても普通は分からない。特殊な力を感知したりできるのならば話は別だが。

適当な雑談を間に挟みながら、気付けば二人は校舎を出て、少しおどろおどろしい雰囲気のある木製の校舎へ。

「旧校舎じゃねえか。いかにもって感じだな」

「人避けがしてありますから。ついてきてください。逸れないで」

先に行く小さな背中を追って、寛治は旧校舎の中へと足を踏み入れた。

軋む廊下。人が居ない場所独特の、空気の冷たさとも言うべき微かな湿り気のあるそこを真っ直ぐに進んでやがて辿り着いたのは一つの扉の前。

「部長、連れてきました」

「失礼します、と」

扉を開いた小猫に続いて部屋へと足を踏み入れた寛治は、そして僅かに眉を上げた。

部屋の中に居たのは、この学園でも有名人揃い。三人だけだが。

「山本さん。オカルト研究部にようこそ」

「オカルト研究部、ねえ……」

お前らの存在がオカルトじゃね？と言う訳にもいかず、寛治は無理矢理喉の奥からせり上がってきた言葉を飲み込んだ。

現状、部屋には五人居る。その内訳は、人外4に対して人間1。加えて、揃いも揃って美形揃いなのだから、目に眩しい。

その一人、重厚な机について優美に微笑む紅髪の悪魔が口を開く。「まずは、初めまして、ね。私は、リアス・グレモリー。このオカルト研究部の部長を務めているわ」

「あ、うつつ。一年、山本寛治です、初めまして」

「ええ。それじゃあ貴方の話……の前に、後の二人も紹介させて頂戴」

「姫島朱乃です」

「木場祐斗。二年生だよ、よろしくね山本君」

「うつつ」

頭を下げる寛治だが、妙な据わりの悪さを感じてしまうのは三つの視線を真っ直ぐに受け続けているからだろう。

早くも来たことを後悔しそうになる寛治。そんな彼の服の袖が引かれた。

そちらを見れば、レモンイエローの瞳が見上げてくる。

「塔城小猫です」

「え……あ、うん、知ってる」

「よろしくお願いします」

「お、おう……」

突然の自己紹介。目を白黒させる寛治だが、小猫は満足そうに前へと向き直っている為に問いたです事も憚られ、渋々彼も前を見るしかない。ついでに、目があったリアスが少し驚いた顔をしていた。

「……随分と、仲が良いのね」

「まあ、クラスメイトなんで」

「……とりあえず、そのソファに座って頂戴。朱乃、お茶の準備をしてくれるかしら」

「畏まりましたわ」

いそいそと準備にとりかかる朱乃を尻目に、リアスは席を移る。

足の短いテーブルを挟むようにして置かれたソファ。

寛治、小猫、祐斗の並びで座り、その対面にリアスと朱乃が腰を下ろした。

「さてと、それじゃあ単刀直入に行きましようか。山本君」

「はい？」

「昨日の夕方空に火の玉が現れた事は、知ってるかしら？」

「うつつ、知ってます」

「アレは、貴方の仕業？」

「……ええ、まあ」

「理由を聞かせてもらえる？」

「襲われたから反撃しただけですよ……まあ、ド派手な事になったのは申し訳ないと思いますけど」

サファイアのような色合いの瞳に真つすぐ見つめられて、若干の気まずさを覚えながら寛治は事実だけを伝える。

ここで嘘を吐いたり、変にはぐらかしても、後々のしこりになる事は目に見えて明らかなのだから。彼としてもそうポンポンと事を構えるような事はしたくない。

話を聞いたリアスとしても、襲われて反撃できるのにしない、という選択肢を採る事は難しいと一定の理解を示す。とはいえ、それだけで済ませる訳には、彼女の立場的にも許される事ではないのだが。

「それじゃあ、襲ってきた相手に心当たりはあるかしら？」

「あー……黒い羽を生やしたオッサンでしたよ。何だっけな……セ何とかがどうかとか、レー何とか？の計画だとか。まあ、殺すって言われて変な槍に刺されそうになりましたね」

「随分とあやふやね。けど、その羽って言うのは、こういうものかしら

？」

そう言ったりアスの背に、突然黒い蝙蝠のような翼が現れた。

突然であり、同時に衝撃的すぎる光景だろう。事実、予め伝えられていなかった三人は大なり小なり、驚いた様子を見せていたのだから。

驚かなかったのは、紅茶の入ったカップを啜る彼。

「ちよつと違います。あのオツサンの羽は、カラスみたいな鳥系の羽でしたし」

「そう……それにしても、山本君。貴方は、私が人間じゃないと知っていたのかしら？」

「え？……まあ、そつすね」

「調べたの？」

「ンな訳。単純に、俺は相手が人間か人間じゃないか分かるだけつすよ」

事も無げに言い切った寛治。

何故分かるのか、と問われても彼は明確な答えを示す事は出来ないだろう。これは、感覚的な話であり、彼の中に理論立てて成立した技能ではないのだから。

強いて挙げれば、雰囲気の違いだろうか。

「だから、驚かなかったつて事？」

「まあ。この町って、人じゃない奴多いつすよね。この学園もそうですけど」

「そうね……この駒王町は、悪魔の領地の一つだもの。治めているのは、私よ」

「グレモリー先輩が？」

「ええ。と言つても、行政に口を出している訳じゃないわ。ただ、悪魔としての管理をしている、と言つた方が正しいかしらね」

「はえー……大変つすね」

「……軽いわね。もう少し、色々聞かれると思ったのだけど」

「まあ、あんまり興味ないです。知つた所で、俺がどうこう出来る問題でもないのなら突つつくのも野暮つてもんでは？……この紅茶、美

味しいな」

これは、彼の結論でもある。

山本寛治は確かに強いのだろう。しかし、それだけだ。

権力者ではないし、財力に秀でている訳でもない。どこかの集団にも所属していないし、仮に所属しても上り詰めようとする気力もやる気も、無い。

だから、藪をつついて蛇を出す気はない。巻き込まれれば、その解決のために尽力するのも吝かではないが、出来る事なら対岸の火事でいたい。それが、寛治の結論。

悩む主の傍らで、姫島朱乃はそんな後輩の観察を続けながら、紅茶のお代わりをカップへと注いでいた。

決定権や裁量権は、リアスにある。腹心としてある程度の裁量が認められようとも、リアスが「主」であり朱乃は「従」であるのだから。

だからこそ、彼女は別の部分に注目した。

(珍しい子……)

朱乃の感想である。

彼女含めて、このオカルト研究部に所属するメンバーは揃って美形揃い。特に女子に関してはかなりハイレベルだ。

特に、リアスと朱乃は男好きのする魅惑の肢体をしている。

豊かなバストと、キュツと絞られたウエスト。丸みを帯びるヒップ。それこそそういう目で見られることは珍しくない。

にもかかわらず、山本寛治は一度として二人の揺れる胸へと視線を送る様子はなかった。

紅茶のお代わりを注ごうと朱乃が前屈みになって、大きくその胸が揺れた時すらも、だ。

興味が無いのか、或いはそういう趣味なのか。邪推と言われようとも、一度考えてしまえば気になるのは人の性というもの。

幸いと言うべきか、この部屋には小猫と祐斗が居る。

腹心がそんな事を考えているなど知る由もないリアスはというと、別の話題を切り出そうとしている所だった。

「ふう……この町に良くないものが入ってきてる件は、後で調査を進めましょう。それはそうと、山本君」

「なんです?」

「貴方は、悪魔になる事に興味はないかしら?」

「悪魔?……そういえば、先輩は悪魔でしたね。他のメンバーもですかね?」

「ええ、そうよ。もう一人メンバーは居るのだけど、その子は少し不安定だから……因みに、貴方を襲ったのは恐らく墮天使よ」

「へえ……で、悪魔でしたっけ。なろうと思つて成れるもんなんですかね」

「勿論よ。それで、どうかしら?」

問われ、少しの沈黙。

急な勧誘だが、リアスにも目的あつての事だ。

短い会話を交わしたただけだが、彼女から見てこの後輩は悪い人間じゃない。ないが、しかし不確定要素が多すぎた。

力の根底は何なのか。神器を持っているのか、いないのか。持っているかないならば、その実力は如何ほどなのか。

不確定要素を野放しにする事ほど恐ろしいことは無い。ならば、主従契約による束縛を以つて管理下に置く方が幾分かマシ。そう考えるの提案。

一方の寛治はというと、暢気に茶をシバイていた。

そも、彼の返事など最初から決まっているのだから。

「——お断りします」

「……理由を聞いても良いかしら?」

「まあ、俺は人間で良いんすわ。人間として生まれて、生きて、死んで。それ位で良いんです」

「そう……無理強いをする気は私にも無いわ。ああ、でもオカルト研究部には入つてもらおうかしら」

「その心は?」

「一つは、監視ね。貴方が何かをしでかすとは思っていないわ。でも、領地運営をする立場からすれば、力ある人材を野放しにしておけない

の。二つ目は、貴方自身を守る事にも繋がると思うわよ?」

「俺を?」

「ええ。オカルト研究部に所属しているのなら、私の庇護下に入るといふ事にもなるもの。もしもの時、後ろ盾があった方が、貴方としても都合が良いでしょう?」

「それは、まあ……因みに、活動内容はどうなんです?」

「雑事を任せる事にはなると思うわ。それから、なるべくこの部室に顔を出してもらおうかしらね。幽霊部員じゃ、監督しているっていう言い分が通り難くなるもの」

「ふむ……」

悪くはない、少なくとも寛治にはそう思えた。

後ろ盾が欲しいことは事実であるし、何より自分の知らない人外事情に関してもオカルト研究部に籍を置いておけば手に入るかもしれない。

放課後も基本は暇している。夕飯を作らなければいけないが、寛治自身凝ったものを作る気は無いため遅くなっても特に問題は無いだろう。

頭の良い人間ならもつといろいろ突っ込むんだろうな、なんて頭の隅で考えながら寛治は頷く。

「部活の参加位なら良いっすよ。俺としても、いつまでも知らないのは色々と困りましたし。あ、でもあんまり遅くなるようなら無理っすよ?」

「その辺りは、ちゃんと考慮しておくわよ。けれど、理由を聞かせてもらえるかしら?」

「単純に、家に人が居ないんすよ。両親は海外出張で、夕飯とかは自分で用意する必要があるから、あんまり遅いと作るの面倒になるんですよね」

「あら、一人暮らしなの?」

「一時的ですけどね。という訳で、その辺りはお願いします」

「ええ、事情があるのなら仕方ないもの。入部届はこっちで申請しておくわね」

「うっす」

トントン拍子に話は進んだ。とはいえ、そこまで深く話したわけではない。

理由としては、寛治がタイムセールに向かいたいと申告したから。一人暮らしであるという前情報がある手前、相手の生活事情に直結した理由を無理矢理カットできるほど、リアスも鬼ではなかった。

かくして少年は、裏の世界へと足を一步踏み入れる。遅かれ早かれ訪れていた未来は、今この瞬間に歯車となって当て嵌められた。

人は強くなければ選べない。しかし、強ければ強いほどにその背に負った荷物は重くなる。

潰れるか、潰れないか。それは誰にも分からない。

日常に新たな風が吹き込んでも、寛治の毎日是不変わらない。

「おげっ!？」

胴体に走った衝撃と共に空気が吐き出され、せり上がってくる体液が口より溢れ、零れ落ちる。

崩れ落ちた寛治を見下ろす老人は、その年齢に合致しない鍛え、練り上げられた上半身を惜しげも無く晒して残心。

今日の夢の中は、体術鍛錬。刀や術を用いるものと違い、長い時間だ。

そのせいかな、間が開く時間というのが結構ある。

「ぜえ……ぜえ……なあ、爺」

「なんじゃ」

「流刃若火って神器なのか？」

「それを聞いてどうする」

「いや、気になったただけなんだが……」

起き上がって胡坐をかいた寛治を、老人は真つすぐに見下ろす。

「魂に縁るものではある。が、神器ではない」

「違うのか？」

「斬魄刀と呼ばれるものじゃからな。とはいえ、今の小童には関係のない事。問答は終わりじゃ、早う構えんか」

「ちえー……」

唇を尖らせて不平をあらわにしながらも、寛治は立ち上がって構えなおす。

手刀や貫手、掌底や張り手など様々な手業というものが存在するが、寛治が老人に叩き込まれたのは愚直なまでの拳による、殴打。それも、当てる為の技術が一切ない、愚直一辺倒の只管破壊力のみを突き詰めた剛拳だ。

だからだろうか、その破壊力と遊びの無さに反して、両者の打撃における戦闘スタイルは完全な「待ち」。突っ込んできた相手に、最大級のカウンターとして一撃を叩き込む。

「……」

腰を軽く落として左足を後ろに下げ、対して右足を半歩前へ。右拳を体の前へと持ち上げて、左拳は後方へ。

そして始まるのは、間の攻防。互いが互いにじりじりと摺り足によつて前へと進んでいき、やがて制空圏、ようは両者の間合いがぶつかる部分が発生する。

まるで火花を散らすような緊張感が高まっていく。

寛治の頬を一筋の汗が流れ、顎を伝って滴り落ち、そして木目の床で弾けた。

「——ッ！」

その刹那、時間は限りなく圧縮される。

稼働する関節が、筋肉が、その筋の一本まで意識が通ったかのような全能感と同時に、空気の壁を貫いていく拳。

カウンターを主にするからといって、仕掛けられない訳ではない。先手必勝という言葉もある様に、相手よりも先んじれば、それだけ有利に働く場合があった。

もつとも、

「——まだまだ、甘いわ」

「ぶっ……!?!」

悠々と突き出した拳は躲され、代わりに寛治の顔面に老人の拳が突き刺さる。

そのまま殴り飛ばす、のではなく拳の軌道は前から下へとそのベクトルを変え、その行き先は床。

衝撃と粉塵が勢いよく弾ける。

*

塔城小猫にとって、山本寛治という男は、正直なところよく分からないというのが表現としては正しいかもしれない。

実際に顔を合わせたのは、駒王学園の高等部入学の折に同じクラスになった事から。

だが、その前から、小猫は彼の存在を知ってはいた。

少々特殊な出自である彼女は、霊力などを感じ取る事が出来る。本格的な修行を受けている訳ではないため、種族的な本能の部分に依るのだが、とにかく感じ取れた。

感じ取ったのは、「熱」。当人は欠片も力を発揮していないというのに、漏れ出すソレは彼がその身に宿した力の強さというものを表しているかのようだった。

遠目から見た時の感想。そして、実際に顔を合わせれば、また印象が変わった。

「くああー……眠い」

朝から隠そうともしない大欠伸。通学路の関係で朝から出会う事が増えた為か、ほぼ毎朝小猫は寛治の眠たさの愚痴を聞いているような気がする。いや、気がするというか事実、ほぼ毎朝彼女は彼の朝の愚痴を聞いていた。

しかし、小猫は知っている。

眠い眠いと愚痴りながらも、存外寛治はその眠気に対してそれほど困っていないという事を。

いや、授業中に居眠りをしてしまったり、その居眠りから起きた直後の彼の表情は人でも殺しそうなほどに険しいものであるのだが、それでもやっぱり言葉ほど、そして表情程怒っていない。

「今日も、寝不足ですか山本さん」

「いや、寝てるって……まあ、いつも通りさ」

「……お疲れのようなら、甘いものはどうです?」

「甘いもの?」

「はい。お勧めの和菓子屋さんがあるんです」

「和菓子か……良いな。何かお勧めとかあるのか?」

「餡子が美味しいので、その系統ならどれも……裏漉しを確りしたカボチャ餡や栗餡もお勧めです」

「へえ……」

「良ければ、案内しましょうか？今日の放課後にでも」

気付けば、そんな事を口にしていた。驚いたように見下ろしてくる鳶色の目を見返しながら、この頃妙だと内心で小猫は首を傾げていた。

別に、ついていく必要はない。店の場所を書いた住所か、もしくは地図でも渡せばいいのだから。商品に関しても自分のおすすめの品、店のお勧めの品をそれぞれ書いて、後は店を直接訪れた寛治自身に選ばせればいい。

にもかかわらず、自然と彼女の口はその提案を呟いていた。

しかし、小猫はどちらかという物静かなタイプ。内心が表にポロツと出る事はあまり無い為に、彼女の内心が寛治に流れることは無い。彼自身もそれほど深く考える質ではないため、相手の心を読み取れと言われても首を傾げていた事だろう。

「良いのか？部活あるだろ」

「……正直なところ、オカルト研究部は表向きですから。本質は、部長の眷属たちの拠点で依頼を受けて簡単なお願いを叶える、そんな場所なんです」

「んじや、呼ばれなきや、実質行く必要はあんまりない訳だ」

「はい。でも、ある程度は顔出ししておかないと、心配されますよ？」

「……何というか、母性的だな。ただの部員つっただけなのによ」

「それでも、でしょう。それとも、山本さんは嫌ですか？」

「んー、今の所ノーコメントで。そもそも、入部して二日目。加えて、顔合わせたのなんて一時間前後だぞ？それで為人が大部分かるほど、俺は人間観察得意じゃねえし。あ、でも、姫島先輩のお茶は旨かったな。俺、紅茶とかあんまり飲まねえけどアレなら飲めるし」

「……緑茶も美味しいですよ？」

「そりや、場合によりけりだろ。洒落たマカロンとかフルーツタルトを食べるときに湯呑と急須を用意したりしないだろ？」

「むう……」

そういう事ではない。無いのだが、小猫自身何故噛み付いてしまったのか分からない。

やっぱり内心で首を傾げ、しかし今はお勧めのお菓子を幾つかピツクアップする時、と思考を切り替える。

「山本さんは、甘いもの好きですか？」

「おう。アメリカのショッキングピンクとかパステルカラーの砂糖の塊まんまのカップケーキとか、インドのグラブジャムみたいなものじゃなけりや、美味しく食うさ」

「でしたら、餡子はどうです？粒あん、こしあん。黒餡、白あん、ずんだ、味噌餡、芋餡、栗餡、胡麻餡等々。色々ありますけど」

「無難に、黒、だな。こしあんが良い。前に粒あん食った時に、喉に小豆の皮が張り付くみたいなことになって面倒だったからな」

肩を竦める寛治はその時の事を思い出しているのか、自分の喉の仏辺りを左手で撫でていた。味には言及しない辺り、単純にその記憶があるから粒あんを避けただけらしい。

餡子談義をしながら、話は徐々に和菓子全般に広がり、垣根を超えて洋菓子にまで手が伸びた頃、二人の足は学園へと辿り着いていた。穏やかな時間だった。学生とはかくあるべき、と例の一つとして示せそうなほどに。

しかして、荒事は目の前に迫っている。既に、未覚醒の紅い龍へと一人の墮天使が接触を図り、同時に仇討ちをせんとその目を光らせているのだから。

もつとも、高々一羽のカラスが、太陽の化身と呼んでも差し支えないような存在に突っかった所でその身を炭化させられる、いや炭化どころか灰の一つも残らずに焼き尽されるだけなのだ。

当の彼は、のほほんと放課後の甘味処に現を抜かして、教師からの睡眠呪文に落ちて夢の中でシバかれて起きるといふ嫌なルーティンに顔を顰めるのだった。

山本寛治がオカルト研究部に籍を置くようになって暫く経った。

とはいえ、彼が部に貢献するような活躍をしたかと問われれば、否だ。ぶつちやけ、部室に行ってお茶飲んで、お菓子食べて、適当に駄弁って、そしてお先に失礼、を繰り返すだけの日々。

そも、オカルト研究部というのは、リアスが眷属揃っての拠点として表向き復活させただけの隠れ蓑に過ぎない。その活動内容にしても、悪魔としての勢力基盤づくりばかりで、ハッキリ言えば人間である寛治に出来る事は特にない。

もつとも、両者どちらもそれを是としたのだからこの話が拗れることは無いだろう。

そんなオカルト研究部の日々。変化とさえいえば、もう一人の新入部員が当て嵌まるだろうか。

「何やってんです、兵藤先輩」

「イツテテ……あ、山本。いや、その……ロマンの探求？」

頬に紅葉を引っ付けた茶髪の男子。学年で言えば一つ上の先輩。

兵藤一誠。オカルト研究部の新たな一員であると同時に、リアスの“兵士”。とある経緯、というか墮天使に襲われて命を落とした後、リアスによって転生悪魔として再び蘇った。

素行に少々問題はあるものの、根っからの悪人ではない。少なくとも、寛治からの一誠に対する評価は良くも悪くも、普通。戦う人間としては、『もつと頑張りましょう』だろうか。

夕暮れ時の校舎を並び歩く二人。向かうのは、旧校舎。

「そういうえば、山本は悪魔じゃないんだよな」

「そつすね。俺も断りましたし」

「……理由聞いても良いか？」

「いっすよ。と言っても、単純に悪魔に成るメリットが無かったですし。なる理由も無かったんで」

「メリット？」

「俺は、先輩と違って選択肢がありましたからね。で、悪魔に成ったと

して俺にどんな恩恵があるのか。言っちゃえば、それが無かったからつすね。人間に生まれたのなら、百年ぼっちの寿命で良いんです。態々グダグダダラダラ生きていたくないんで」

アツサリと言いつつ寛治だったが、これは彼の本心でもあった。長生きしたいとも特に思っていないし、不老不死になりたいだとか、そんな狂気的な思想も持ち合わせていない。

一方で、一誠もまたそんな後輩の言葉に考えさせられてもいた。彼が悪魔に転生する時、選択肢は無かった。生へとしがみ付くために、宛ら夢の中に居るような現実感の無い状況での転生。そのせいで、少々自分の体の変化に戸惑ったりもした。

しかし、考えもしなかつた寿命の観点。

悪魔の寿命は一万年以上とも言われる。それこそ、高々百年ほどこしか生きる事のない人間と比べれば、いや比べる必要もないほどに差がある。

長い寿命というのは、そのまま置いて行かれる立場という事に他ならない。少なくとも、現状の学友や、親含めた肉親は自分を置いて先に逝つてしまう事だろう。

他種族悪魔に転生するという事は、つまり上記のような事。

黙つてしまつた一誠に、寛治は緩く手を振る。まるで、この場の空気を流すように。

「まあ、所詮は個人の意見つすよ。先輩がハーレムに邁進して、女の乳とケツ追いかけて回そうが、俺は別に止めないんで」

「ちよつと待つて？さつきまでだいぶシリアスな雰囲気だつたんだけど？急に俺の株下げするようなこというじゃん!？」

「いや、事実じゃないっすか。先輩、部室に居る時、大抵グレモリー先輩か姫島先輩の胸ばかり見てますし」

「し、仕方ねえだろ！寧ろ、男なら見ちゃうだろ!?!夢と希望が詰まってるんだから!」

「胸に詰まってるのは、脂肪っすよ」

「そういう生物的な事じゃない!……はあ、山本って枯れてるのか？それとも、オツパイじゃなくてお尻の方が好きだったりするのか？」

「いや、どうでも良いんですけど。というか、大声でそういう事言わない方が良さすよ。ただでさえ、先輩って女性陣に睨まれてるのに」「うっ……ま、まあ、そうだけどな……でも！オツパイは良いぞ！男の夢が詰まってる！」

声を大にして胸を張る一誠に、寛治は一つ息を吐き出す。

悪い人ではないのだが、こういう所が尊敬できないのだ、と。

余談ではあるが、この後旧校舎について、部室の扉を潜る迄後輩へとエロの伝道が続けていたせいで、白髪ロリツ子にドロップキックを食らわせられることになるのだが、上機嫌に口を回す彼は知る由もない事。

*

充実するリアル。課題と部活に加えての、一人暮らし。金銭的には、寧ろ多すぎて貯蓄に回しても余りある生活費が毎月送金されている為特段困窮はしていない。

では、何に困るのか。

「ほれ、もう一度じゃ小童。向かって来ぬか」

「ぜえ……ぜえ……」

ボタボタと滝のような汗を流しながら、膝を折って倒れ、どうにかこうにか左前腕で体を支える寛治へと掛けられる厳しい言葉。

彼の前で、老人は筋骨逞しい上半身を晒して、その背後には日輪の如し炎の輪を背負って見下ろしていた。

“万象一切灰燼と為せ”

正にこの言葉に偽りのない力を、その刀は確かに有している。

老人の刃と同じく、寛治が右手で握る刀もまた業火を纏い、吐き出している。しかし、届かない、足りない。

「く、っそ……！」

汗を拭って、刀を杖に寛治は立ち上がる。

どうにも、老人からのシゴキが厳しくなっている気がしないでもないが、既にその辺りの感性は彼の中ではほとんど死んでいる為反応しない。

只管に夢の中とはいえ体に叩き込まれ続けてきた、『折れない心』のままに立ち上がり、そして構え、力を込める。

自分の体すらも焼き焦がさんとする圧倒的なまでの火力。流れていた汗は一瞬の内に気化し、同時に肌の水分すらも一気に攫ってひび割れそうなほどに乾燥していく。

だが、

(もつと……！)

度重なる鍛錬の結果、今の寛治は端的に言って頭のネジが外れていた。

刀の柄を握る手からプスプスと黒い煙が上がり、肉の焼ける音と二オイが周囲に漂い始める。それでも、完全に目がイってしまっている寛治は力を緩めない。

そして、その力に呼応するように刀は流刃若火その火力を増していく。

両掌が爛れるを通り越して、もはや炭化し始めているにも関わらず寛治は刀を上段に掲げて前を見る。

吹き上がる炎は、まるで活火山の噴火のよう。

相對する老人はと言えば、その切れ長の細い目を僅かに開き、同時に凄まじい、それこそ地面が揺れる程の膨大な圧力を発し始めているではないか。

「行くぞ、小童。見事踏破してみせいッ！」

寛治が活火山ならば、老人は太陽か。

両者の炎が猛り、床を嘗め、そしてぶつかる。

*

「~~~~~ッ！」

朝、山本寛治は激痛と共に跳ね起きた。

いつもの自室、いつもの布団。しかし、いつもと違うものがある。

「イツテエ……！」

脂汗を滲ませて見るのは、両手。というのも、何と彼の両掌は真っ赤に焼け爛れていたのだ。具体的には掌の皮が剥げて赤みを通り越して白く細胞が死んでしまっている始末。ついでに、両腕の前腕も赤くなっており、軽度の火傷が見て取れた。

明らかに、夢の中の無茶が原因だろう。しかし、今に至るまでここまで明確に影響が出た事が無かった為に、寛治は動揺していた。

両手がこの様では、布団を片付けるどころか、寝間着から着替えることも出来ない。当然、食事の用意など以ての外だ。というか、両手が使えない時点で人間生活の大半は不可能になる。

どうしたものかと考えて、不意に世界が止まる。

「——意識を集中せよ」

「爺……!?!」

「お主は、新たな領域へと足を踏み入れた。じゃが、未だに未熟者である小童では修練の前に体が壊れてしまう。故に、新たな技の習得を行ってもらう」

「……何すんだよ」

「名を、回道。技術体系では鬼道に分類されるものじゃ」

「どうすんだよ。集中って、それだけか?」

「この技能には、当人の才覚が多分に含まれておる。その骨子を掴めなければ、お主の手はそのままとなるじやろうて」

「ごんの、スパルタ爺が……！」

滅茶苦茶だ！と内心で叫びながらも、寛治は必死に両手に集中する。

体術も剣術も斬術も鬼道も斬魄刀の解放も。ありとあらゆる老人からの教えは、文字通り体に刻まれてきたという経験が彼の行動の速さを物語っている。

意識を両手に向ける事で、より一層火傷の痛みが増したような気になるが、同時に彼の体の中に渦巻いている霊力もまた両手に集まってい

く。
回道は、鬼道の中に分類される。そして鬼道は、言い方を変えるならば魔法に近い。

詠唱と霊力、そして術そのものに込める霊力のバランス。しかもそれら一切合切が鍛錬よりも、術者本人の才覚がモノを言うのだから中々に理不尽だ。

（ツ……い傷つてのは、言い換えれば欠損！その欠けてる部分を霊力で補う）

傷の修復には様々な方法があるが、ポピュラーなのは細胞分裂の速度を速めて傷を治すというもの。デメリットとすれば、生物の細胞分裂の回数は決まっている為自然と寿命を削る点だろうか。

一方で寛治の方法は、傷を別の力で埋めるといふもの。極めれば、戦闘中であろうともゾンビのように傷を回復しながら戦い続ける事が出来るだろう。それこそ、霊力が尽きるその時まで。

「ぐっ……いこんな所、か？」

皮膚が突っ張ったような、独特の火傷痕の感覚を残しながらも、少なくとも掌は皮膚がだらりとはがれた様子だけは無くなった。爛れた痕も無いが、その代わりに真っ赤。

痛みはすれども、それでも朝目覚めて直ぐの時に比べれば幾分かまし。後は軟膏でも塗って包帯を巻けば良いだろう、と決めて息を吐き出した。

「まだまだ、じゃのう。精進を、忘れるでないぞ」

それだけを言い残して、老人は消えた。同時に、世界に色が戻って時間は進み始める。

シンと静まり返った部屋で、寛治は息を一つ吐き出した。

その溜息には多分なまでの疲労の色が見て取れたのは、恐らく気のせいではないのだろう。

最近変わった。塔城小猫は、その変化を独特なニオイと同時に気が付いた。

「火傷でもしたんですか？」

「あー……まあ、な」

歯切れの悪い寛治に、小猫の眉間に寄った皺がますます深くなってしまう。

変化は数日前から。彼が急に指先から前腕の中ほどまでぎつちり包み込む包帯を巻いてきたことに始まる。

中二病の発症か、なんて言われたりもするがその包帯に滲む赤が、そんな噂を掻き消していた。

「薬のニオイがします。それもかなり強い。教えて、もらえませんか？」

「いや、あー……確かに怪我はしてるが、別にそこまで騒ぐようなもんじゃないさ」

「包帯でグルグル巻きにしているの？」

「保護の為さ。ほら、擦り傷にも絆創膏を貼るだろ？それと同じようなもんだって」

「……」

ジツと見上げれば、バツが悪いのか逸らされる目と顔。

付き合いの時間から考えても、小猫と寛治の相性は悪くは無いだろう。少なくとも、どちらも邪険にする様な様子はない。

だからといって、一から十まで情報共有をしているかと問われれば、否だ。表面的な情報、例えば好きな味覚であったり、苦手な教科であったり位なら知っているが、互いの家庭事情や持ち合わせる力等に関してはノータッチ。

目に見える変化であろうとも、小猫にはそれ以上踏み込む事が出来ない線引きがそこにはあった。

「……処置はしてるんですよね？」

「その辺りは、抜かりない。自然由来の軟膏塗ってる」

「お風呂とか、どうしてるんですか？」

「ゴム手袋とラップ使ってる」

本当の所は、夜の風呂に入る前にどうにかこうにか水やお湯に触れても問題ないレベルで傷を回復させてから入浴するという七面倒な手順を踏んでいるのだが、その辺りの説明を彼女にする気が、寛治にはない。

いったん会話が途切れた所で、そういえば、と寛治は口を開いた。

「なあ、俺が言うのもアレだけど、ここ最近何かあったか？」

「なにか？」

「いや、夜にごたごたしてるみたいだからな。そつちの悪魔側仕事で何かやってるのかと思って」

悪魔ではないため、寛治は夜間に行われているオカルト研究部の悪魔仕事に関してはノータッチだ。リアスもその辺には配慮しているらしく、彼が六時を過ぎて帰る事を咎めるような事はしない。

だがしかし、関わらないと言っても感覚の網と言っても良い感知範囲内でバタバタ動かれれば、気にするなど言う方が無理な話。少なくとも、寛治としては気になって仕方がない、とまではならないが、それでも少なからず神経に障る。

一方で、小猫としても思い当たる節がある。

厄介事を運んできたのは、新しく眷属入りをした先輩変態。

少々、いやかなり辛辣ではあるが、これは小猫からの印象が悪い彼に問題があるという訳で。

そんな彼が出会った教会の聖女。そして、彼が悪魔へと転生するにあたってその根本的な原因を創り出した墮天使。

特に後者に関しては、自己防衛のためとはいえ寛治とも接触があった。情報共有はすべきだっただろう。

しかし、今日にいたるまで寛治が居る中で、その手の話題が上がったことは無かった。これは、彼があくまでも監視の為に部に身を置いている事。そして、彼自身が本格的に裏事情に足を突っ込んではいない事に起因していた。

因みに、そんな足を突っ込まない後輩が、部活はおろか現状この町

に居る異能持ちや人外含めて最も強いのは皮肉というべきだろう。

「……兵藤先輩が、少し」

「セクハラで訴えられたか？」

「違います。悪魔と教会勢力の仲が険悪な事は……」

「前に、ちよつと説明受けたな。よくある話だ。表向きは友好的でも、裏側ではバツチバチにやり合ってる、なんてな」

「ただ、今回は少し違う様なんです。出張って来たのは、天使ではなく、墮天使なんです。それから、はぐれのエクソシスト」

「ほお？墮天使って言うのと、俺を襲ってきた奴らって事だよな？」

「恐らく、そうです。山本さんも気を付けてくださいいね」

「気を付けろって言われてもな」

後頭部を搔く寛治は、チリリと痛む包帯の下の皮膚に眉根を寄せ
る。

彼が思い出すのは少し前に消し飛ばした羽の生えた男の姿。そしてその実力。

アレを基準に据えるのはかなり危険な行為であるのだが、現状寛治が命の危機を感じたことは一度としてない。寧ろ、夢の中の老人の強さが際立ちすぎて揃って団栗の背比べだ。

だから、寛治はこの件にはこれ以上触れることは無い。彼にはもつと厳しく、そして激しく、何より苛烈な試練が目の前に転がっているのだから。

そして、時は流れる。

*

赤き龍がその力の片鱗を見せつけたその日、火を継ぐ少年もまた獄炎に揉まれてその身を焦がしながら必死に前へ藻掻き、進んでいた。

(津波だな……！)

荒れる息と肉の焼ける二オイを共にして、寛治は目の前の光景をそ

う評した。

正面だけではない。彼の周囲は、炎に飲み込まれてしまっている。宛ら、炎による檻の中に閉じ込められているような物。

この炎の檻から少し離れた場所にて、事の成り行きを見ているのは常に寛治に試練を課し続ける夢の中の老人。

流刃若火には幾つかの技が存在する。寧ろ、その古い歴史に反してその数は少ない、とすらも称せるかもしれない。

これは、流刃若火自体に「技」という括りを与えずとも必殺、ないしは相手に痛烈な痛手を与える事が出来る為だろう。

そんな流刃若火による、「技」。その脅威度は、推して知るべし。「ふう……いー」

寛治は息を吐き出す。

炎の壁は迫っては来ない。しかし同時に、勝手に消える事も無い。脱出するには、正面突破。これに限る。というか、老人も時間耐久で終わらせる事を許さないだろう。

(感覚は覚えた。自分も焼き尽くすように、火加減は無しだ！)

霞の構えにて、切っ先が狙うのは炎の壁。

刀身より吹き上がる炎。その炎に呼応するように彼が握る柄も高温、どころか茎なかいからも炎が滲んでいる。

当然、そんな物を握れば手は焼け爛れる事になる。そこで活躍するのが、ここ数日で見れる程度にはなった回道。

焼け爛れた側から、皮膚を、肉を、骨を、神経を、修復していく。いや、焼けているのだから痛みが無い訳ではない、が既に腹を括った寛治には蚊に刺されるほどに頓着しない。

精神が肉体を凌駕する。脳が痛みを感じる前に、そも痛みという信号を受信する前に、握り潰す。

山本寛治の異常。頭のネジが数本外れていると言っても良いかもしれない。

汗が頬を伝い、顎先へと辿り着く前に蒸発する。霞の構えという刀身が顔の真横にあるような体勢であるためか、眼球が急速に乾き、それどころか顔の皮膚から一気に水分が抜けていくような感覚を覚え

る。

同時に、巻き上がる炎が急速に刀身へと集束していく。いつぞややった、炎を操作した上での圧縮。しかし、あの時とは規模も火力も破壊力も、全てが桁違い。

焼けた指先から、微かに黒煙が上がる。皮膚が若干ひび割れ、血が滲む。

しかし、成った。

「……ほう」

炎の壁の向こう側で、老人は常にほとんど閉じられたような目を開ける。

老人は、寛治に対して技の伝授というものをほとんどしていない。いや、後々仕込んでいくつもりではある。

これは寛治自身の発想力を限定しない為。

発想力は、当人の進化に繋がる。進歩にも直結し、成長へと至る。

「………集焰・」

噴き出す炎が渦を巻くようにして集まり、刀身、鐔、柄、そしてその刀を握る腕すらも包んでいく。

そして、前に出ていた左足が強く踏み締められ、体は前へ。

体の中心である正中線をブレさせる事無く捻り、左足から発生した力をそのまま腕へ移動。掌でねじり込みながら狙いは真つすぐ。

「………焰突ッ!!!」

体と手によって発生した捻りをそのまま回転へと変えつつ、突きと同時に収束した炎が回転しながら円柱状に前へと勢いよく伸びていく。

寝かせた炎の竜巻、或いは熱線。少なくとも、コレを生身で食らう事になれば並大抵の輩など一瞬で塵と化すことだろう。

同時に、技の完成は寛治の課題の一つが達成された事に他ならない。

炎に巻かれた腕も、焼けた掌も、水分不足でひび割れた肌も、その全てが今では完治、とまではいかずとも戦闘に支障がない範囲で回復済み。同時に、自分の体すらも焼き焦がさんとする炎の出し方と操り

方もようやつと体得した、と言えるレベルに到達した。

「良くぞここまで練り上げた。褒美をやろう」

炎の檻を突破して突き抜けてくる寛治の一撃に対して、老人は鞘へと納めた刀を腰の左側へと添えて鯉口を切る。

「――流刃若火、一ツ目」

瞬間、音が消える。

「――なでぎり撫斬」

それは、業火を湛えた刃を振るうには、あまりにも静かな納刀。鯉口が噛み合い、小さな金属音と共に、その場は縦に断ち切れる。

「マ、ジか……」

乾坤一擲でもまだまだ届かない。自分の未熟さを突きつけられながら、寛治の意識はそこで途切れた。

果てしない。何度目かのため息を、山本寛治は抑える事が出来なかった。

今日も今日とて学校へ。朝の変わる事のない通学路を進む足も自然と重くなるというもの。

「はあ……」

眉間を揉んで右肩を回せば、バキバキと嫌な音が鳴った。

原因は言わずもがな、夢の中の老人だ。

寛治が『己の技』を一つ確立したあの日から、鍛錬の領域は二段も三段も一気に跳ね上がった。

斬魄刀の解放を用いた斬術の鍛錬。加えて体術のみならず鬼道も交えた戦闘となり、更に更に空中戦や炎の消えない水中での鍛錬等々。

加速度的に、強くなっている実感はある。事実、彼の内包している霊力の総量は格段に増えている。今はまだ抑えが利いているが、早晚更なる訓練を積んで抑えるようにしなければ溢れる事になりかねない。

そして、当然ながらそこまで激しい夢の中ではフィードバックのように気疲れが発生していた。具体的には、欠伸と溜息の二重奏。

そんな何度目かの欠伸を零して、滲んだ涙を拭って前を見れば見覚えのある綺麗な紅の髪が視界に飛び込んでくる。

「おはようございます、グレモリー先輩」

「あら、おはよう山本君。随分と眠そうね」

「まあ、色々あったんで」

肩を竦める寛治に、リアスはその綺麗な青い瞳を少し細める。

監視という名目で入部させた新入生。しかし、その後に入ってきた新しい眷属がかなり手が掛かるためにどうしても目を掛ける事が出来ていない相手。

「手の怪我は、もう良いのかしら？」

「え？ああ、これっすか？大丈夫っすよ」

ひらひらと振られる右手には、真新しい包帯が隙間なく巻かれている。そしてそれは、左手も同じくだ。

小猫が気が付いていたように、リアスも、いやオカルト研究部の面々も寛治が突然包帯を巻き始めた事には気が付いていた。

気が付いていたが、しかしその当人が何も言わない上に、彼らには別の問題が眼前にあった。当然ながら意識や精力を割くのは眼前の問題対処だろう。

「あんまり酷い様なら、アーシアに治してもらおう事も出来るわよ?」

「その時は、俺の方から頼みますよ。つつても、本当にそこまで酷くないんですって。いや、心配してもらえないのは有り難いんですけどね?」

「……貴方がそう言うなら、もう言わないわ。けど、眷属じゃなくても貴方は私の後輩だもの。困った時は力になるわ」

「ま、その時はお願いします」

情愛のグレモリー。リアスの家は、家系その物が身内愛に溢れており、逆にその身内に手を出した者には烈火のごとく報復を行う、そんな特性がある。

しかし、その深い愛は、同時に周囲に弱さを見せられない柵にもなる。

「……何かあったんですかね」

「ッ、急にどうしたの?」

「いや……あー、まあ、言いたくないっつーか、言い難い事なら無理には聞きませんよ」

前を見たまま若干猫背になりながらそんな事を言う寛治だが、その一方でリアスと言えば内心がほんの少しだけ激しく鼓動していた。

確かに、悩みはある。しかし、その中身を誰かに語ったことは無かったのだ。

踏ん切りがつかなかったというのものもある、が個人的に言いたくなかった事でもあるからこそ、その口は重かった。

しかし、寛治は気が付いた。まだまだ相互理解が足りなくても、いや互いに盲目となるほど近くはないからこそ気付いたのかもしれない。

「……………はあ……………そう、ね。確かに、悩んではいるかしら」

「無理には聞かないっすよ?」

「いえ……………貴方、口は堅い方?」

「言うなつて事なら、誰にも言いませんよ。何なら、壁にでも話してる感覚でいてもらつても良いっす」

「ふふっ……………私が、悪魔の貴族つて事は知ってるわよね?」

「んな話も聞きましたね」

「貴族には、貴族の柵があるのよ……………私、婚約者が居るの」

「婚約者……………つまり、先輩はその家が決めた婚約者が気に入らない、と?」

「纏めれば、そうね。悪魔は長寿ではあるけど、その一方で子供が出来難いわ。兄妹であつても数十、百年以上も歳が離れる場合もあるもの。だから——」

「早い内から、そういう事をして世継ぎでも作れつて事ですか。何と
いうか……………古いつすね」

「寿命が長い分、人間社会とは圧倒的に中身の入れ替わりが遅いから、
かしらね」

寿命というのは、組織や社会に新風を通す一種のカンフル剤。無駄に長く続くものは伝統と貴ばれるが、中身が腐れば単なる廃棄物にも劣る代物となるだろう。

この手の組織腐敗話というのは、人間であろうと人外であろうと、
何処にだつてついて回る問題だ。

寛治自身は、そういう話とは無縁の立場ではある。とはいえ、その
手の知識が無い訳ではない。

「……………で、先輩はその婚約者と別れたいつて事ですかね?」

「……………そう、なかしらね。でも、少なくとも学生の間は自由であ
りたいと思うわ」

カバンを手に空を見上げるリアス。思いの外、この後輩は聞き上手
だ、何て頭の隅で考えながら同時に自分の現状にも思い至る。

悪魔の貴族の子女として、その手の政治に巻き込まれる事は取り分
け珍しいことではない。彼女の友人も同じく婚約者が居ると耳に挟

んでいたから。

これからの悪魔社会を担っていく一人として、先の事を見据える事も必要だとは理解している。しかし、それをまた納得できることかと問われれば、心情的にソレは否だった。

彼女だつて、まだまだ華の女子高生。やりたいことだつて山ほどあるし、恋愛だつて自分の自由でしてみたい。

我儘だと揶揄されるかもしれないが、リアス・グレモリー彼女もまだまだ子供なのだ。

「にしても、先輩。そんなに婚約者が嫌なら、先輩自身の好みとかはどうなんです?」

「私の?」

「別に、婚約者だから嫌、なんて理由じゃないんだ。決められたから嫌なんじゃないんですか」

「……………確かに、最初の反発心は勝手に決められたから、かもしれないわね。でも、私が彼を嫌いなのは良い噂を聞かない事と、その態度よ。私のもつと、可愛げのある子が良いの」

「先輩なら、〃犬〃になりたがるような奴も多いんじゃないですか」

「私は、ペットが欲しい訳じゃないんだけど?」

ジト目で隣を見るリアスだが、しかし当の後輩はどこ吹く風とニヒルに片方の口角を緩く上げて肩を竦めるばかり。余談だが、彼は一度としてリアスをそういう目で見る事が無い。隣を歩く今であっても。

男子垂涎もののプロポーシオンが、効果なし。

「どうかしら、山本君。私と踊ってみる?」

「悪魔の相手は悪魔にお願いします」

「あら、そう?その割には、小猫を気に掛けてると思うけど?」

「塔城は……………まあ、友達なんで」

種族を理由にノーセンキューかと思えば思わぬ返事に、リアスは改めて隣の後輩を見た。

どこかバツが悪そうにうなじを右手で撫でる寛治は、自分でも何で間が開いたのか分かっていないらしく少しばかり眉根を寄せて首を傾げている所。

その時リアスに電流走る。これは、中々面白いことになるかもしれない、と。

そこから、自分の悩みそっちのけで根掘り葉掘り。

他人のゴシップほど面白いものはない、という典型かもしれない。

因みに、

「朝、部長と何を話していたんですか？」

「あ？あー……世間話だ。別に大したことは話してねえよ」

「世間話で、あそこまで近づく必要がありますか？」

「いや、俺から近付いてねえし。先輩がぐいぐい来てただけだったの」

「……………私だって頑張ればあれぐらい……………」

少々むくれた小猫に詰め寄られる寛治の姿があったとか。ついでに、週末に甘味巡りを約束するのは、本当に余談である。

あると寛治は何となく察してもいた。

頭を搔き、脳内で言葉を組み立てて、寛治は口を開く。

「……先輩の愚痴を聞いただけさ。まあ、あの人も立場やらなんやら色々あるからな。吐き出せないことだって腹の内に溜まっててもおかしくは無いだろう?」

「愚痴……私たちの事ですか?」

「それだけは、絶対に無い」

変な方向へと流れそうだった小猫の思考は、しかし思ったよりも強い言葉に止められる。

「あの人は、お前ら全員を等しく大切に思ってる。まあ、確かに頭の痛くなるような事を起こす事もあるだろうさ。でも、そんな事である人の親愛の情が薄れる事はねえだろうさ」

リアスの身内という立場にありながらも、人間であるという点から周りよりも一歩引いてみている寛治からの感想はこれに尽きる。

血筋を抜きにしても、彼女は甘い。いや、非情になれない訳ではないだろうが、しかしこと身内に関しては甘すぎるほどに。

「まあ、早晚直面する問題だ。ひよつとすると週明けにでも事が起きるかもしれない。それまで、大人しく待ってるよ」

「……それじゃあどうして、部長は山本さんにはお話を?」

「俺が世間話的に聞き出したつてのが一つ。後は、庇護下ではあつても微妙に距離があつたからこそ自分の弱みを出しても良いと、無意識に思ったのかもしれないねえな」

「むう……」

「何だよ」

「別に……なんでもありません」

そっぽ向く小猫に、寛治は首を傾げるしかない。

彼女の内心は、モヤモヤしていた。

それは目の前の少年に対してなのか、それとも自分の主に対してのものなのか。或いは、その両方なのか。小猫自身にも分からない。

分からないが、しかし何か嫌だった。

姉と慕う主の事も、そして目の前の少年の事も確かに好きであるの

に、その二人が一緒に居る姿を思い出すと胸の奥がチクリとする。
少女はまだ、その感情に気付かない。

*

気分の乗らない休み明け。それは学生であろうと、社会人であろうと変わらない。

しかし、今の寛治は別の意味で落ち着かない気分を味わっていた。

「こちらをどうぞ、山本様」

「あ、うっ……ど、どうも」

ソファに座る寛治の前に置かれるソーサーとカップ。中身は、薫り高い一杯の紅茶だ。

問題なのは、その紅茶を用意した相手。

この日、寛治は何となく部屋へと一足早くやってきていた。

小猫はクラスの方で用事があり、二年生の先輩方も姿は見えず。その代わりというべきか、カバンが一つだけ置かれ、そして見覚えのない“銀”がそこに居た。

三つ編みが特徴的な藍のメイド服を身に纏った女性。リアスや朱乃とはまた違った、大人の女性としての色香のような物を感じさせながらも凜とした雰囲気。

一応、部屋に入る前に知らない誰かが居る事を察知はしていた寛治だったが、しかし思わぬ様相の相手に目を点にしたのは無理からぬこと。

グレイファイア・ルキフグスと名乗った女性は、グレモリー家のメイドなのだとか。名乗られてもしどろもどろになってしまったのは、お客様の扱いに慣れていなかったせいかな。

出された紅茶に口を付ければ、芳醇な香りと後を引く僅かな渋み、味わいが口の中一杯に広がった。

「旨っ……」

「お気に召したようで、何よりです」

自然と零れた独り言に、妖艶ともいえる艶のある笑みが返ってくる。

紅茶は美味しいが座りの悪さは増した。しかし、ここで逃げ出す選択肢を採るには余りにも目の前の一杯は魅力的すぎた。

「……」

(めっちゃ見てくる)

カップに視線を送りながら、突き刺さるとも言えそうな視線を受け止める寛治。

侮蔑や下に見るような感じではない。どちらかというところ、観察、一挙手一投足を見落とさないように集中しているような、そんな雰囲気。

居心地の悪さを感じている寛治の一方で、グレイフィアもまた目の前の少年を測りかねていた。

仕えている家の令嬢であると同時に、義妹でもあるリアスから話は聞いていた。その上で自分の目で見て判断を下す。

(人間、という話でしたが……異常なほどに鍛えこまれた体をしていますね。それに、この無理矢理蓋をしているような霊力)

魔力専門である悪魔な為、後者に関しては何となくしか分からない。それでもその経験値の高さ故か、グレイフィアはかなり正確に目の前の少年の観察を行っていた。

尤も、底知れないという事位しか、ハッキリとは分からないのだが。力を持つ者というのは、総じて一定の自負というものを有しているもの。力は自信であり、鍛錬はその裏付け。

それが、寛治には無いのだ。自負も無く、自信も無く。傲慢でなく、プライドが無い訳では無い、のかもしれないが、しかしそれらをひけらかさそうともしない。

言うなれば、チグハグ。

では、その為人はどうなのか。

「……あの、何すか？」

「いえ、お気になさらず」

(いや、視線の矢印が刺さってるんですけど?)

グレイフィアに見られているせいか、気まずそうに視線を逸らしてカップを傾けるその様子は、普通の一男子高校生にしか見えない。

この辺りは、どうしようもない。ネジは外れていても、彼自身はまだまだ成長盛り。そもそも人生経験が足りない。人としての厚みが増すのはこれからのだから。

良くも悪くも普通。少なくとも、表面上は、グレイフィアにはそう見えた。

観察をするメイド。当然というべきか、彼女もまた観察される側でもある。

(強い、のは分かる。多分、先輩の誰よりも、現状は)

寛治は大雑把にはあるが、グレイフィアの強さを察していた。

強さとは、魔力などの内在する力だけに左右されるものではない。立ち振る舞いであるとか、こうした日常における隙の無さ等も考慮に入る。

長々と連ねてはみたが、現状両者は静観を決め込む。戦ってもいいし、戦う姿も見えていないのだから。

沈黙。この気まずい間を破つたのはこの場における第三者。

「あら、山本君。貴方も来てたのね」

「どうもっす、先輩」

髪を湿らせたリアスがシャワー室の方から戻ってきた。そも、彼女が居たからこそ、グレイフィアもここに居たのだから、居て当然なのだ。

「グレイフィアとも顔合わせできたのね」

「あ、はい。紅茶旨いっす」

「ふふっ、あんまり浮気が過ぎると朱乃に突かれるわよ?」

「人間きの悪い事言わないでください……」

げんなりと眉を顰める寛治だが、リアスはクスクスと笑う。年相応の笑みだ。どうやらお嬢様は小悪魔的な嗜虐をお気に召したらしい。

無論、彼女は寛治の事を朱乃へと告げ口するような真似をする気は

ない。揶揄いは、楽しみのちよつとしたスパイス。過ぎればソレは余分となつて苛んでくるだろう。

軽快なやり取りをする二人。そんな会話を眺め、グレイフィアはその目を細めていた。

血筋とその容姿、それから優れた魔力を持つリアスは、当然ながら大なり小なり周囲からの期待であつたり、羨望、やつかみ、嫉妬等々。様々な矢印を向けられてきた。

だからだろうか、壁がある。それこそ自覚していかない壁が。

グレイフィアが更に観察を続ける中でも、二人の間の会話はポツポツ続く。

「そういえば、先輩」

「何かしら」

「何で、ルキフグスさんが居るんです？」

「あら、グレイフィアには聞かなかつたの？」

「メイドって自分で言つてましたし、悪魔のメイドさんなら関係者として真つ先に候補に挙がつたのが先輩だつたんで。先輩関係の事、この人がペラペラしゃべると思いませんか？」

それは、寛治の配慮。単純に初対面の相手にぐんぐん行けなかつたというのもあるかもしれないが、先の発言も決して虚言ではなかつた。

「そう、ね……山本君には、話したわよね。婚約者の話。それで……少し、皆にも聞いてもらおうと思つて」

「休みの間に、何かあつたんすかね。いや、無理には聞かねえつすよ。それに、先輩が決めたんなら俺からは言う事ねえですし」

聞いた本人であるというのに、寛治は手を振つた。

遅かれ早かれ、リアスが己の婚約者の事を眷属たちに伝える事にはなつていただろう。

その場に、事情を知る家の人間が必要かどうかは別として。

拗れているのだろう。カップを置いて、寛治は内心で考える。

そもそも、リアスは婚約に乗り気ではない。これに関しては、話を少し聞いただけの彼でも分かつた。それでも強行しようとする辺り、

古臭い貴族の柵か、なんて思ったりもした。

面倒事になる。コレも、余程の馬鹿じゃなければ察する事が出来る。

しかしまあ、寛治は思うのだ。一部員として、そして後輩として。やれることはやろう、と。

彼の覚悟が試されるのは、これから数時間と経たない直ぐ後だったりする。

厄介なお客の来訪が迫っていた。

人外というのは、種族問わず人間という種族を大なり小なり、下に
見ている節がある。

これは、傲慢であるとかそういう面も確かにあるだろう。
だがしかし、純然たる事実というものもあるのだ。

例えば、純粹な人間は、腕力やらあらゆる身体能力に於いて下級に
類する人外が相手であろうとも勝る事は殆ど無い。それこそ、特別な
力や、技能を体得していたりしなければ不可能な事。

他にも、肉体強度や魔力などの有無。

色々と連ねてはみたが、成程と納得できる理由もまたあるというも
の。

*

寛治自身、悪魔や墮天使などの人外に対する嫌悪感のような物は特
にない。後者に関しては襲われたにもかかわらず、だ。

彼の中に箱推しならぬ、箱はこ悪あし、のような物は無いから。加えて、彼
自身が命の危機を感じていなかったというのもある。というか、墮天
使なんかよりも、よっぽど夢の中の老人の方が恐ろしい。

つまり何を言いたいのかといえば、突然現れた先輩焼き鳥野郎の婚約者に関し
ても特に思うことは無いという事。

オカルト研究部の面々が揃って、さあリアスが今回の要件を話そ
う、としたところで横やりがやって来た。

件の彼女の婚約者、ライザー・フェニックスである。

中々派手な登場だった。フェニックスの名の通り、炎を巻き上げ現
れたその姿は、成程上級悪魔として自負を持って然るべきの実力が垣
間見える。

一応、後輩として部員として、ある程度は役に立とうと考えていた

寛治だったが、ライザーを見てその目を細めるとカップとソーサーを手に端の方へと移ってしまっていた。

自然と、グレイフィアと並ぶような格好となる。因みに、彼女の手には紅茶の入ったポットが。

血の気も多く、猪突猛進の気があり、まだまだ自分と相手の力量差というものをハッキリとは認識できない一誠が噛み付き、そしてライザーの小柄な眷属の少女に転がされた。

単純な実力差、ではなく一方的な一誠の油断のせいだ。相手が女性で尚且つ、幼げであったことから妙な加減をしてしまっていた。

「あー。ありや、ダメだ。あの辺りは、治していかないと」

「貴方は落ち着いていますね、山本様」

「まあ」

注がれたお代わりの紅茶を啜りながら、寛治には緊張の欠片も見受けられなかった。

少なくとも、彼から見て今回の来訪者は脅威足りえない。

先の一誠の実力差、ではない。いや、それもあかもしれないが、もつと根本的な部分だ。

即ち、純粋な能力の相性。

「――あれ位の火力なら、怖くないっすね」

もつと強く、激しく、それでいて一切の容赦がない炎を、彼はよく知っていた。これは、傲慢とかそういう事ではなく、純然たる事実。

だがその一方で、彼の発言は微妙に響いてしまっていた。というか、運悪く会話の途切れ目であったからか余計に。

「ほう、言ってくれるじゃないか」

当然というべきか、ライザーが噛み付いてくる。その目にたつぷりと侮蔑を湛えて。

「人間風情が。場違いだとは思わないのか？」

「そういう貴方は、随分と余裕が無いみたいですけどね」

「なに？」

カップとソーサーを持ったまま、寛治は背を預けていた壁から離れ、真つすぐにライザーを見返す。

「そうやって、相手を下に見ないと安心できないのでは？今日来たのだから、先輩が自分に振り向かないからでしょう？」

「ふんっ、リアスは婚約者だ。であるなら、こうして足を運んでも——」

「その婚約者に好かれちゃいねえ、と言ってるですよ」

バツサリ。それこそ、室内の空気が完全に死ぬレベルで、容赦の無い一言がライザーへと突き刺さる。

面食らったように顔をしたライザー。だが、彼の言葉が耳を介して脳へと至り、そしてその中身を理解した瞬間、ゆっくりと座っていたソファより立ち上がった。いた。

一つ補足をする、寛治は別にリアスに対して、恋愛感情を抱いている訳では無い。

しかしそれが、個人の、女性としての幸せを願わない事には繋がらない。自分が幸せにする、だとかの感情は別として。

そして、現状彼の目から見て、リアスがライザーの下へと嫁げば、幸せになれない。

寛治としては、喧嘩を売る意図はない。元より、そんなつもりもない。ただ、思った事をそのまま言っているだけ。

だからこそ、質が悪いのだが。

「随分な口の利き方だなあ？人間風情が。よくもまあ、この俺をそこまで虚仮にできるもんだ」

「虚仮？別段、アンタを馬鹿にしてる訳じゃねえっすよ。ただ、事実を言ってるだけじゃないっすか」

真正面から睨み合う、というよりは一方的にライザーが寛治を睨みつける構図。強いて挙げれば、寛治の手に未だにカップとソーサーは置かれている事がシユールな位で、かなり緊迫している。

ライザーの魔力が渦巻き、ソレは炎となつてチリチリと辺りを焦がしているような、そんな気分させる。

一方で相対する寛治といえば、無意識のうちにその身に宿った霊力が漏れ出して圧となり始めていた。

一定水準以上の霊力を持つ者が発する圧力、霊圧。それが今、寛治

より発せられている。

ズシリ、と腹の底に響くような重い威圧感。無意識的な物の為、指向性を持たせられなかったからか、ライザーだけでなく部室中にその威圧感が振り撒かれてしまっているのはご愛敬。

『ツ……い』

大なり小なり、部室に居る者は総じて息を呑む。それは当然ながら、ライザーもだ。

高々、人間。度の過ぎた不調法者に灸を据えるような、そんな感覚だった。勿論、寛治の発言にプライドを逆撫でされたからというものもある。

だからこそ、驚く。一端の矜持のお陰で引き下がる事こそ無かったが、しかしまるで底の見えない井戸でも覗いたかのような、そんな底知れなさを味わい自然と頬に汗が伝う。

緊張感が高まっていく中、しかし例外は何処にでもある。

「——そこまでです、お二人とも。お戯れが過ぎますよ」

手刀を切つて二人の間に割り込むグレイフィア。

彼女は例外だ。その実力と経験から、そういう相手は体験済み。

そもそも、指向性の一つを持たせるどころか、半ば無意識に発している威圧だ。その程度に揺らぐほど彼女は脆くも弱くも無かった。

気が逸れたからか、寛治の威圧が消える。無論、先程までの威圧の余韻は残っているし、事実が消える事も無い。

しかし、小休止だ。

恨みがましそうに睨みつけてくるライザーだが、今回は喧嘩をしに来たわけではない。得体のしれない人間に加えて、グレイフィアまでいるこの場で暴れるような愚は犯さない。

離れるライザー。その背中から目を離さない寛治だが、不意にその袖口が引かれる。

「ん？塔城」

「……」

一緒に居る事がここ最近はいつも通りな、白い少女。その黄金の瞳が見上げてきていた。

「どうしたよ」

「……」

「おーい？」

背の違ひもあり、覗き込む寛治だがしかし小猫は何もしやべらな
い。

それどころか、人目を憚る事無く彼の胸元に縋りつくように抱き着
いてくる。

これには流石に、寛治も面食らう。目を見開いて持ち上げた両手は
行き場を失つて固まり、にっちもさっちもいなくなる。

小猫の見た事が無い、寛治。

甘いものを食べている時とも、勉強している時とも、朝挨拶する時
とも、違う。

別人。少なくとも威圧感を発する寛治は、小猫の知る寛治ではな
かった。

その姿が、過去の記憶とダブってしまった。

忌まわしい、半ばトラウマとなっている記憶だ。

もちろん、それは既に過去の出来事。寛治が、小猫の記憶にある誰
かと同じ末路を辿る可能性が無い訳ではない、がしかし取り越し苦勞
である可能性も決して捨てきれない。

それでも、小猫は嫌だった。その不安が取り越し苦勞でも何であつ
ても。

一方で、リアスとライザーの間に流れる空気は、今まで以上に冷め
きっていた。

「得体のしれないものを、傍に置くのはどうかと思うが？」

「それは、貴方が突つかかったからでしょう、ライザー。山本君を爆弾
みたいな言い方しないほしいわね」

「事実だろうか？俺は君を心配して——」

「貴方の箔付けに必要だから、かしら」

席を立ったリアスの目が、真っすぐにライザーへと向けられる。

「貴方が私を見ていないのは、初対面から知ってたわ。胸ばかり見て
たものね？女性はそういう視線に敏感なのよ？覚えて置く事ね」

「悪魔社会の未来の為だ。貴族として当然の責務だろう?」

「だからといって、私は愛の無い結婚をしたいとは思わないわ」

「はあ……少しは大人になったらどうなんだ、リアス」

「自分を押し殺す事が大人なら、私はまだまだ子供で良いわ。とにかく、婚約の件は一度白紙に戻しましょう?今度は、当人が居る場所で決めれば良いわ」

常ならば、もう少し感情的な話をしそうなリアスだが、ついさつき寛治からの流れ威圧を受けたせい、その頭はかなり冷静だった。

その上で、我儘を押し通す。

貴族の子女としては間違っているのかもしれない。だが、その古い考えがのさばっているのが今の悪魔陣営の惨状の根幹の一因でもあるのかもしれない。

何より、この場にはリアスの味方が居る。

眷属たちだけでなく、ライザーに真正面から喧嘩を売った後輩。メイドであると同時に、義姉でもあるグレイフィア。

少なくとも、この場での力関係は、彼女に分がある。

一方で、ライザーはといえば、激昂する……事も無くその目を細めて真つすぐにリアスを見返していた。

悪魔の男として、欲望に忠実な節のある彼は男の夢と野望と欲望をこれでもかと詰め込んだハーレムを眷属で築いている。

そして、今回の婚約。箔付けの他にも、周りにいるハーレムとはまた違ったタイプが欲しかったからこそ了承した節がある。

グレモリー家のリアス。箔付けの為の婚約。

だが、

「—————イイ女になったじゃないか、リアス」

不敵に笑みを浮かべたライザーは、その目に欲の炎を灯らせた。

それは、純愛でもなければ、そもそも「愛」と形容する事すらも憚られるようなドロリとした黒い代物。

綺麗な物を、汚したい。言い表すのならば、汚辱だろうか。

とんでもねえ変態である。先程まで、威圧してきた人間と正面切つて睨み合いを演じていたとは思えない性癖の拗らせっぷり。

とはいえ、この場では手を出せない。現状のライザーではグレイ
ファイアに勝てないだろうし、不確定要素^{寛治}も居るからだ。

一先ずこの場では、矛を収めた。ついでに、どんな手を使ったのか、
改めて二人の婚約に関しての話し合いが両家当主並びにその奥方。
それから当人らを交えて行われる事になる。

それがまた別の問題を運んで来るのだが、彼ら彼女らは、まだ知ら
ない。

自分がどれだけ強いのか。その把握というのは、非常に大切だ。特に、戦闘というシビアな局面に立たねばならない者ならば、自身の実力を正確に把握する事は相手を知ると同じく、或いはそれ以上に大切な事かもしれない。

何故こんな事を連ねるのかといえば、

「——まあ、こんなもんか」

彼のようなタイプが居るから。

拳を握った寛治の前には、粉々に砕け散って瓦礫の山と化して粉塵を舞わせる巨岩の残骸が積み重なっている。

そして、その光景を見た者たちは揃って驚きの表情を浮かべていた。

場所は山中。何故こんな流れとなったのか。

発端はしばらく前へと遡る。

*

その日もいつもと同じような日だった。少し前に、リアスの婚約者がややって来たりしてごたごたしていたが後を引く事は無かったから。

強いて挙げれば、小猫がちよろちよろと寛治の後について回る頻度が増えた位か。

どうにもあの日、彼の姿が過去の記憶とダブってしまったからか

特筆すべきことは、それ位。

「ねっむ……」

ソファに腰掛けた寛治は大きく伸びをした。

いつも通り夢の中でシバかれて、4、5回は燃やされて塵にされたところで目が覚めた。最悪の目覚めなのはいつも通り。

違うのは、

「眠りますか？」

「……いや、大丈夫だ。ありがとな」

隣に座る小猫が、ポンポンと自分の太もも辺りを叩いてくる事か。寛治としても別に、好意を無碍にしたい訳ではない。無いのだが、彼の夢の中の鍛錬は現実世界にも大なり小なりの影響を齎している場合があるのだ。その最たる例は、包帯をグルグル巻きにした両手。

回道をある程度ものにしたとはいえ、それでも火傷の絶えない皮膚は見た目が悪い。戦闘続行に支障が無い程度にしか治さない事も一因ではあるだろう。

そんな怪我を負うのだ。しかも、寝ている時に。そして彼は、自分が寝ている時に現実世界でどんなことが起きているのかを知らない。

小猫の申し出を断るのも、彼女を慮つての事。仮に火傷などさせてしまった暁には、首を括りたくなってしまいかもしれない。

そんな傍から見れば、非リアは吐血してしまいそうな光景。某変態先輩など血涙流しそうなほどに唇を噛み、それから二大お姉さま見てその鼻の下をだらしなく伸ばし、そして最近加入した聖女が自身の胸元を気にするまでがワンセットだったりする。

新入りの聖女、アーシア・アルジエント。揺れる金糸に翡翠のような瞳を持つ、心優しい元魔女。無論、最後に関しては優しい彼女を傷つける事になるために言及する者はこの場に居ない。

アーシアは、優しい。それはもう、寛治の包帯に巻かれた両手を見て悲壮な顔をする程度には。

「山本君、両手は大丈夫ですか？痛かったら直ぐに言ってくださいね？」

「大丈夫っすよ、アルジエント先輩。まあ、有りがたいっすけどね。俺の手に負えなくなったら、その時はお願いします」

彼女は神器を保有している。珍しい回復系の神器であり、これを狙った墮天使に捕らえられていたのだが、紆余曲折を経て一誠に救わ

れた。

因みに、この怪我のやり取りは数度目。どうしても彼女は、後輩である彼や小猫が気になってしまいうらしい。

いつも通りだ。いつも通り、終わる筈だった。

「……みんな、少し話を聞いてもらえるかしら」

切り出したのは、リアス。この日の彼女は、どうにも暗かったのだが、周りがおいそれと突っ込むわけにもいかず、本人が踏み込んでくるまで待つというのが話し合う事なく決まった事だったりする。

「その……私の婚約の件よ」

「そういえば、リアスはこの前冥界に戻っていましたものね」

「ええ、その時に両家の当主と私たち、当事者含めて話し合いの場が設けられたの。そこで、ね」

ため息を吐いたりリアスの前に紅茶のカップが置かれた。それで一度唇を湿らせて、再度彼女は口を開く。

「私の兄は、恋愛結婚なの。もう子供、私から見ても甥も居るわ。つまり跡継ぎ問題は一応解決策があるのよね。でも、悪魔社会には別の問題もあるのよ」

「悪魔の出生率の低さ、ですわね。だからこそ、悪魔の駒ですし」

「ええ。悪魔は子供が出来難いわ。その長い寿命に反して、ね。だからこそ、早い段階で婚約者を付ける事は貴族の家としては珍しくないの。そして、婚約者として名の上があったライザーは、フェニックス家の三男。この家は、貴族の家柄の中でも珍しく多産なの。だからこそ、選ばれた、というのもあるかもしれないわね」

下世話な話ではあるが、現状の悪魔勢力に於いて、多産でもあるフェニックス家の血は結構魅力的な物だったりする。あわよくば、その恩恵にあずかろうと考える。

決して、良縁とは言えない。言えないが、しかし子がなせるのならば、その部分にも目を瞑る。

それほどまでに、彼らは困窮していた。因みに、悪魔の他の陣営もまた同じく勢力の疲弊が酷く、その数を減らしている為、補充は急務であったり。ついでに、悪魔陣営が老害の処理が出来ない一因でもあ

る。

「本題よ。私は、この婚約を無しにしたかった。少なくとも、成人をす
るまでは自由で居たかったから。問題は、私にその我儘を通せるだけ
の功績が無い点ね」

「功績？」

「私の兄は、先の大戦でもその力で大きな活躍をしたと聞いているわ。
それこそ、他勢力にも名を知られるぐらい。だからこそ、我を通せた
の。悪魔社会は実力主義。強さを重視するからこそ、ね」

「それじゃあ、どうするんですか。部長はその話をしに行つたんじゃ
？」

「ええ、行つたわ。そこで、一度だけチャンスを貰ったの」

その過程もかなり四苦八苦、言い方を変えるなら面倒な道があつた
のだが、割愛。リアスも、その道すがらを語つて同情が欲しい訳では
無いから。

「チャンス？」

「非公式のレーティングゲームよ。勝手に決められたとはいえ、貴族
としての婚約の破棄は簡単じゃないの。メンツや柵があるもの。私
がどれだけ声高に嫌だと駄々をこねても変わらないわ。ただ、今回の
ゲームに関しては両家で話し合つて決めた事。非公式なのは、この勝
敗が婚約の中身に直結しているからよ」

淡々と語りながらも、リアスは内心の苦みを堪えていた。

グレモリーの家に生まれ、特殊な魔力を宿した彼女だが、しかしそ
の発言力は決して大きくはない。寧ろ小さい方だろう。

どちらかというと直情型で、綿密な策を弄して詰将棋のように盤面
を操作するよりも、恵まれた魔力などを利用した力押しの方が得意。

当然ながら、政治を長年生きてきた当主を相手に、話術でどうこう
出来るようなスキルも無かつた。

故に、最後の手段に縋るほかない。冷静に見て、勝ち目は五分も無
いとしても。

「ゲームは凡そ二週間後。お願い、貴方達の力を貸してちょうだい」
頼み込むリアスに、否を唱える眷属は居ない。彼ら彼女らは大なり

小なり、リアスを慕っているし、その辺りは彼女の徳徳といった所だろう。

問題は、

「山本君」

「はい？」

「ライザーが打診してきたのよ。貴方はゲームに出ないのか、って。勿論、断ってくれても大丈夫よ」

「レーティングゲームって、悪魔の駒のゲームつすよね？人間が出ても良いんですか？」

「私の眷属には、まだ空きがあるの。その空いている駒を貴方に当てはめる形になるわね。勿論、悪魔への転生は無しよ。私も、無理矢理貴方を悪魔にしようなんて思わないもの」

リアスとしては、手札が多い方が良い為、是非とも寛治には参戦してほしいところだろう。だが、そんな気持ちをグツと抑えて、彼女は選択肢を提示する。

悪魔の問題だ。オカルト研究部に所属はすれども、寛治は人間。無理に悪魔の事情に介入する必要も無い。

一方で彼女の内心など知る由も無い寛治は、考える。

損得勘定で言えば、微妙なところ。悪魔の名門であるグレモリーにリアスを介して繋がりを持てる可能性もあるが、一人間がそんなパイプを持つと持ち余すのが落ち。

では、感情面で言えばどうだろうか。

寛治は、オカルト研究部の面々が嫌いではない。寧ろ、一緒に居る分は揉め事も多そうだが面白いというのが正直なところ。

リアスに関しても、一個人として、そして先輩として敬愛の感情はある。ついでに、彼女の現状に同情もある。

要するに、

「良いっすよ」

彼は至極あっさりと言った。

政治的な面とか、そういう事は考えない。ただ、戦闘の経験値にはなるし、同時に自分の今の実力を測る試金石になるかもしれない、と

いう下心もあつたり。
そして、場面は冒頭へ。

*

凡そ二週間。この期間でのパワーアップを求められ、オカルト研究部の面々はグレモリーの所有する山中へとやって来ていた。

因みに、寛治が出席日数などを気にしたのだが、その辺りはリアスが手を回してくれた。ちゃんと一筆添えても居るので、留年などは今の所問題は無いだろう。

そうして、この合宿最初に行われたのが寛治の実力把握。

パンチ一発で巨岩を粉碎。この際に、彼は技を使っていない。

単純な膂力もさることながら、無意識下で流れる霊力が自然と体の保護に動くためにその破壊力に反して、寛治自身が拳を傷めるような事は先ずあり得なかったりする。

「……凄まじいわね」

「そつすかね？まあ、護身程度は出来るつもりなんで」

肩を疎める寛治だが、リアスは彼の評価を改めなければ、と内心で考え直していた。

明らかに余力がある。巨岩を粉碎する程度、まるで埃を払うように簡単だ、とでも言わんばかり。

そこで彼女が思い出したのは、寛治がオカルト研究部に籍を置く事になった時の事。

ここまでの力があるのなら、下級墮天使程度歯牙にもかけないだろう、と。

その一方で、寛治としては岩が豆腐でも殴り抜いたかのように粉碎された事に、少し感慨を抱いていたりする。

というのも、夢の中の老人は岩なんて目じやないレベルで堅牢。頭

は完全なお爺ちゃんであるというのに、その肉体は宛ら鍛え上げられた鋼にも勝る。前に殴らせてもらった時など、宇宙を背負ったものだ。

かくして始まる突貫工事のパワーアップ（仮）。実を結ぶかどうかは彼ら次第。

そして、本格的に山本寛治イレギュラーが裏の世界へと足を踏み入れる第一歩となる。

僅か二週間。たったそれだけの期間で、いったい何処まで行けるだろうか。

「基礎も大事つすけど、俺としては只管戦い方を整える方が良いと思いますけど」

「小猫や祐斗はそれでも良いかもしれないけど、一誠は素人よ？体が出来上がってないわ」

「まあ、そうなんすけど。ここにはうってつけの人材がいるじゃないっすか」

寛治が親指で指し示したのは、頭に？を浮かべるアジア。

「筋繊維がぶつちぶちに切れるのは、損傷。怪我の一種つて事で、兵藤先輩が筋肉痛で倒れる毎にアルジェント先輩の神器で治療します」

「あ、あのー私の神器は、体力の回復までは……」

「んなの知らねえつすよ。スタミナ切れだからつて、攻撃の手を敵が緩めてくれるわけじゃないっすか」

あつけらかんと言いつ切る彼だが、周りは若干引いている。

そも、彼の鍛錬自体が普通ではない。それは、夢の中の事が現実についてバックしているとかそういう事ではなく、単純にその内容が。

得たのは、高純度の戦闘能力。失ったのは、慈悲の心とブレーキ。

「無謀じゃない？」

「無茶でも無謀でも、やってかねえと。二週間程度しかないなら、基礎固めでも発揮できると思えねえつすよ。正直なところ、基礎と発展の同時進行でも足りないっす」

「……」

「気乗りしねえのは、分かりますよ。貴方は、優しい先輩だ。でも、状況は待っちゃくれねえ。俺が一から十まで蹂躪しちゃ意味が無い。手を貸すとは言いましたけど、その辺りは自覚してほしいっすね」

厳しい物言いだが、これは当然の事。

今回のレーティングゲームは、あくまでもリアスの婚約破棄の為に

行われるもの。寛治は彼女が部長を務める部活の部員ではあるが、しかし眷属ではない。

身内ではあるが、この件に関しては同時に第三者でもあるのだ。

力は貸す、鍛錬は手伝う、しかしだからといっておんぶにだっこは許さない。

かくして始まる鍛錬。後に、一誠は語る。あれほどの地獄の日々は早々無い、と。彼自身も暫く後に元竜王の一人に鍛えられるのだが、その時すらも超えるシゴキを受けた、と。

*

「慢心は、しておらぬようじゃな」

「できる訳、ねえだろ……！」

炎を吹き出す刀を杖にどうにか立っている寛治は、息を切らせて睨み上げる。

合宿だろうと、夢の中の鍛錬には一切の手心は存在しない。それどころか、いつもよりも苛烈な雰囲気すらもある。

伸びる鼻っ柱など、伸びる前に叩き折られてきた。増長する心など、その前に叩き潰されてきた。

どれだけ強くなろうとも、山本寛治には、慢心も増長も無い。抱くのは油断ではなく、余裕。

「ふうー……集焰しゅうえん」

震える膝を叩いて立ち上がり、巻き起こる火炎を刀身含めた右腕に渦を巻いて集めていく。

この技能。すなわち、炎の操作能力に関してだけならば彼の牙は、老人にも届きうるのだ。

炎の集束。それは、ある種のゴールでもある。

自身の右腕すらも薪として業火を更に滾らせるその姿を見ながら、老人はその目を細めていた。

決して口に出すことは無いが、向かってくる少年は随分と強くなった。それを声に出して褒めた事は、殆ど無いが。あつたとしても褒めたの？と褒められた側が首を傾げるようなもの。

それでも確かに認めていた。歳など関係ない。強い者は、強い。それだけが事実だ。

「——焰刃ッ!!」

まあ、負けるつもりはさらさら無いのだが。

寛治の斬撃は、斬ると同時に集めた炎が大きく炸裂する。更に、炎に指向性を一部持たせる事で疑似的なブースターとして斬撃としての破壊力の上昇も可能。こと、攻める事に関してはかなり凶悪な特性を有する技となっていた。

そんないつも通り、地獄のような夢の時間を抜け、いつものように焼かれて目を覚ました寛治。

いつもと違うのは、寝慣れないベッドである点。肩を回せばバキバキと良い音が鳴ったが、これを無視して、ベッドから立ち上がった。

まず最初にやる事は、両腕の処置だ。今回は、特に右腕が酷い。

「さて、集中集中。じゃねえと痛いまんまだからな」

神経が麻痺している訳でも、ましてや痛覚が無い訳でもないのだから腕や体に刻まれた火傷は、当然痛い。顔の右側も酷い日焼けをしてしまった時のように風に当たるだけでも痛い時もある。

それでも弱音を吐かないのは、それだけ心が強いのか。

或いは吐いても意味が無いと知っているからか。

ある程度の火傷が癒えて、素手で触れてもそこまで傷まない程度になつた所でカバンから軟膏と、それから包帯を取り出して指先から簡単な手当てをしてから巻いていく。

この動作も既に慣れたものだ。

本当ならば、完全に治してしまう方が良いのかもしれない。寛治の回道の腕前は、お世辞にも良いとは言えないが、それでも時間さえかければ治しきる事は理論上不可能ではない。

それでもしないのは、時間の無駄であるという事と、それから彼自身痛みを忘れない為でもある。

自分がどれだけ危険な力を持ち合わせているのか。言うなれば、その戒めの為にこの火傷の痛みを常に抱え続けていた。

一切合切を背負っていつも通りだ。おくびにも出すことは無い。

そうして、軽い朝食をとり、鍛錬地獄が始まる。

「ごえつ!？」

「兵藤先輩、踏み込みを躊躇ってる時点でダメつすよ。もつと勢いよく突っ込まねえと」

呆れた様な後輩の言葉を聞きながら、一誠は殴られた腹を押さえて地面を転がるしかない。

その左腕にはごてごてとした紅蓮のガントレット、神滅具『赤龍帝の籠手』があるのだが、如何せん今の一誠の実力は下の下。如何に神すらも滅ぼす力を得ていようとも、現状宝の持ち腐れでしかなかった。

慌てて一誠に駆け寄るアーシアから視線を外して、寛治は向かってくる二人を捌いていく。

「木場先輩も塔城も、一発が軽すぎる。手数勝負の先輩は兎も角、塔城はもう少し震脚意識しろ」

迫りくる拳を受け止め、魔剣を靈力を纏わせた手刀で折り砕きながら、寛治は気付いた事を指摘していく。

祐斗も小猫も、年の割には強いだろう。転生に用いた悪魔の駒の特性に加えて、祐斗は神器『魔剣創造』を有しており、小猫にしても我流ながらも体術を扱う。

しかし足りない。同格、ないしは若干上程度までならば対応できても、格上やもしくは相性の悪い相手には手が届かない。

この事実を、二人は今この瞬間も痛烈に感じていた。

ものの一分とかからずに伸された二人。そして、一誠は歯噛みする。

もう少し、何か出来るつもりだった。悪魔へと転生し、神器を発現させ、そして中級墮天使にも勝った。

事実だ。宿した赤龍帝の籠手にしても、十秒ごとに所有者の力を倍加し続けるという破格な物。理論上時間はかかるが、時間が経てば経

つほどに強くなる。

現状の一誠は体が出来上がっていない為、数倍程度に収まっているが、それでも悪魔としての元々の地力も合わされば人間程度は歯牙にもかけることは無いだろう。

だが、現実はコレだ。倍加させて寛治に挑み、十秒とかからずに殴り飛ばされて地面を転がる。その繰り返し。

経験の差。コレも確かにあるだろう。

何せ寛治は、十年以上格上と毎日戦ってきたようなものなのだから。この辺りは仕方がない部分もある。

次いでいうならば、一誠には才能は無い。

陣を使った転移も出来ない程度の魔力しかなく、格闘技に秀でていく訳でもない。悪魔と言えども、その体は鍛えられたものでもなく、神器の倍化を殆ど受け止める事が出来ない。

弱者。その事実が、一誠に重く押し掛かる。

「く、っそ……い！」

それでも、彼は立ち上がった。

唯一の取り柄。前に進むもと苦境からも立ち上げられる根性は、目を見張るものがある。

確かに兵藤一誠は、天才ではない。しかし、一步一步前に進もうとする気概は確かにあった。

不撓不屈は、強者に通ずる。

「俺の技？それを見たいって？」

「はい」

昼休憩的一幕。おにぎりを食べる寛治の隣で、同じくおにぎりを食べる小猫は話題提供のついでにそんな事を切り出していた。

人間だろうと悪魔だろうと、朝から晩まで飲まず食わず眠らずのぶつ通しで動き続けるなど不可能。こうして余暇の時間が無ければ、初日でぶつ壊れるのが関の山。

話を戻して、寛治はもう一齧りおにぎりを削って考える。

別に技を見せる事に抵抗はない。問題なのは、流刃若火刀を使ったもの。

超が付くほどの広範囲攻撃が可能なうえに、自分の体すらも容易に焼き焦がす炎の攻撃だ。こんな山の中で使えば、山火事どころか、こちら一帯全てが灰になりかねない。

諸々考えて、寛治の答えは、

「……ま、素手の分ぐらいなら良いぞ」

小猫も素手だしちょうど良いだろう。そんな発想で軽く決めた。

そんな会話があった昼休憩も終わり、向かったのは初日に寛治が岩を粉碎した場所。

「こいつで良いか」

ポンポンと寛治が叩いたのは、初日より更に二回りは大きな岩だった。

その上へと飛び上がって、岩の後ろ数百メートルに道や建造物などの有無も確認して、降りた寛治は改めて小猫へと向き直る。

「まず、塔城。俺は別に素手が専門じゃない。その辺りは予め理解しといてくれ」

「……あそこまで、私たちがボコボコにできるのに、ですか？」

「そりゃ、専門じゃなくとも戦える程度には鍛えてるからな。まあ、この辺りはどうでも良いだろ。本題は、俺の技ってのが、突き詰めれば単なる拳骨って事だな」

「拳骨？」

「要は、ぶん殴るって事だ。流麗な技だとか、相手に当てる為の技術だとか、そんなものは持ち合わせちゃいねえ」

「見てろ、と寛治は岩の前に立つ。」

「脱力した、立ち姿だ。ただ立つことには力が要らない。その言葉を、そのまま人の形に整えたかのような、そんな立ち姿。」

「そこから踏み込まれる右足。まるで、局地的な地震が起きたのは、と錯覚するほどの震脚。そこから発生した力を限りなく削る事無く、腰を経て、肩を経て、突き出される右の縦拳。」

「——『一骨』」

その光景を前に、小猫はその目を大きく見開いた。同時に、初日の一発と、それからこれまでの手合わせはかなり手加減されていたのだと理解させられる。

岩が消えた。跡形も無く、木っ端みじん。更に岩を粉碎して余りあった破壊力が、そのまま見えない砲撃のように岩があった場所から更に向こう側へと響き渡っていったのだ。

「振り抜いた拳を引き戻して、寛治は一つ息を吐く。」

「まあ、こんな所だ。俺の体術の目標は、一撃必殺。そもそも、長引かせるような事は好きじゃねえし、仕留められるなら一発で仕留めるようにしてる」

「……私も、出来ますか?」

「さあ、な。できるかどうかは知らねえよ。でも、ある程度原理を教える位は出来る」

「お願いします」

「まず、この一発に重要なのは、脱力と緊張だ」

「言いながら、寛治は右手を肩の高さまで持ち上げ、そして緩く拳を握ってみせる。」

「握りは緩くていい。余分な力みは、攻撃に無駄を生む。立つときは、最低限の力。そうだな……頭のてっぺんから一本の紐に吊るされるイメージ。重心は両足の間、で関節は流れるように動かせ」

「流れるように?」

「人の関節は、一種の衝撃吸収機構みたいな面がある。この関節が、力

の流動を妨げるんだ。だから、なるべくロス無く、足で発生させたエネルギーを拳に伝える必要がある訳だ」

ゆっくりと動作を見せるように拳を振るう寛治を、小猫は目を皿のようにして舐めるように見つめる。

注視してみれば、頷ける。拳は突き出されて、対象にぶつかるところ瞬間だけ強く握られ、後は緩いまま。

一から十までガツチガチに力を込めても、意味はない。寧ろ、余分な力は体のガタツキを生み、動きの障害に繋がりがねない。

だからこそ、脱力だ。

「まあ、最初からできるもんじゃねえよ。インパクトの瞬間を見誤れば、握りの緩い拳で殴らなきゃならなくなる。威力が出ない上に、逆に手を傷めかねない」

「それじゃあ、どうすれば？」

「脱力の度合いを段階的に上げていくしかない。そもそも、大切だとは言ったが、慣れてないと脱力した体じゃ動く事すらままならねえだろうからな」

立つことに力は要らないと述べたが、しかし動くこと全てを完全な脱力状態で行う事は、まず不可能だ。

だからこそ、効率の良い体の動かし方を覚えなくてはならない。

「良いか、塔城。力は、流動するものだ。効率よく動かす事で、消耗少なく相手を打倒することだってできる」

「強くなれますか？」

「それはお前次第だな」

見上げてくる小猫の頭を撫でまわしながら、寛治は言葉を紡ぐ。

「どれだけ強くなりたいと願って鍛えても、それが自分に合ってなければどうしたって伸び悩む。今にしてもそうだ。俺が師匠の真似事みたいなことをしちやいるが、それが塔城。お前に合致しているかは分からない。だから塔城。視野は広く持てよ？」

小猫にはまだ、彼の言葉の意図は分からない。

ただ、自身のふわふわとした髪がかき混ぜられる感触だけは確かだった。

*

殺す気か。この二週間ほどが始まって、一誠は何度となくそう内心で叫んでいた。

「ほーら兵藤先輩。足が遅くなってますよー」

「あ、ちよ、待てアツー!?!」

緩い口調とは真逆の鋭い蹴りが、風を切つて一誠の尻を強かにぶつ叩く。

一抱え程もある岩を背負つてダツシユしているというのに、尻まで蹴られてしまえばすつころびそうなものだが、転んだ場合はもっと重いペナルティが待っている為、一誠は必死に耐えて、震える膝のままに駆け続ける。

ペナルティ。それは、最初に起きた。因みにその時は、岩を背負わずに走っていた。

速度が落ちてすつころんだ一誠は、全身に擦り傷を作りながら山中を転がり、漸く止まった、という所で後ろから追い立てていた寛治に蹴り起こされたのだ。

「ほらほら先輩ー。寝転がって休んでんじゃねえですよ。もう三十分追加っすね」

嘲るでも心配するでもなく、淡々と告げられた追加メニュー。しかも、転べば転ぶほどにその時間は増えていき、合計で三回も転んだ時には二時間と言われた。

そもそもメニュー内容が鬼だ。山中を、只管走り続けるというのも。それも整備されていたり、獣道のように最低限行動可能な道ではなく、道なき道を寛治に追い立てられるがままに走らされる。それも、最高速度から僅かにでも緩めば尻に蹴りだ。

何より恐ろしいのが、どれだけ必死こいて走り回っても、このダツシユの終了時刻ジャストに元の出発地点に戻ってくる点。

そして戻れば、各種筋トレを最低千回。途中で止まってしまおうと五百ずつ数字が上乘せされていき、体力が切れたとしてもアジアの神器で損傷した筋肉は元に戻され、そこから始まるのは地獄の組手。

祐斗と小猫を交えて始まる神器含めた何でもありの組手。

文字通り、ボコボコにされた。

擦り傷、打撲、内臓損傷、骨折その他諸々。胃の中を吐きつくして、胃液が出た事も片手じゃ足りない。

地獄も地獄。唯一の救いは、寛治が手足を引き千切るような事はせず、加えて人がどの程度で完全に壊れるのかを把握していた点か。

でなければ今頃、三つの肉塊がこの場に転がる事になっていただろう。

「うっし、今回は転ばなかったっすね。感心感心。イイ感じっすよ、先輩」

「ひゅー……ひゅー……げほっ、み、水……」

「はいどうぞ」

差し出されたボトルを震える手で受け取り、一誠は中身を呷る。

出鱈目な事ばかりを強いているが、寛治は決して止めようとはしなかった。この点に関しては、リアスが苦言を呈そうとしても握り潰すレベルで周りを排している点からも分かるだろう。

(強え……)

何度も面と向かって実感させられる現実。

自分の全力疾走に追走し、尚且つ全く同じ距離を時折一誠の尻を文字通り蹴り上げながら走ったというのに、寛治は殆ど息が切れていないのだ。

年齢で表せば、一年ほどしか変わらない。にも関わらず、その体に蓄積したあらゆる素養の密度の差を感じさせる。

そんな一誠からの一種の羨望のような感情を向けられているなど知る由も無い寛治は、ぶっ倒れたままの彼をアジアへと預けて祐斗の元へと足を向けていた。

「んじや、兵藤先輩が復活するまでタイムンの手合わせをしましょうかね、木場先輩」

「ああ、宜しくお願いするよ」

魔剣を両手に構える祐斗に対して、寛治は素手だ。

神器『魔剣創造』オリジナルの魔剣には劣るが、様々な属性の魔剣を創り出す事が可能でその手札の多さはかなりのものとなる。

祐斗としても頼りにしている力だ。しかし、ここ数日間での信頼も若干揺らぎかけていたりする。

理由は言わずもがな、目の前の後輩。

「多種多様な属性の魔剣。まあ、確かに凄いつすけど、脆いつすね」
手刀で量産型の魔剣を叩き砕いた寛治の言葉だ。

彼にとつて得物とは攻撃の手段であると同時に、信を置く防具でもある。そして、得物を気にして立ち回らなければならないというのは本末転倒でもあった。

祐斗自身も、魔剣の脆さは知っている。手刀で叩き折られた事は無かったが。

とにかく、露呈した弱点。そこを補うために祐斗が導入した方法と
いうのが、

「ほらほら、もつと創造のスピード上げないと、鎖骨叩き折りますよ」
「脅しが独特な上に、恐ろしい事を言うよね、君ッ！」

砕かれたそばから魔剣を創造し続けて、ひたすら物量で差を埋める
というもの。

振り切った魔剣が破壊された次の瞬間には、彼の手には更なる一振
りが握られている。この繰り返し。

欲を言うならば、常に属性を付与して更に攪乱を狙うという方法も
ある、のだが如何せん魔剣を連続で創りながら、尚且つ相手を攻め続
けるというのは正直神経を削る。

三分とかからずに、祐斗は汗だく。それでも剣を振るう腕を止めな
いのは、偏に目の前の後輩が先程の脅しを本気でやってくるから。

事実、この組手が始まった、最初の頃に祐斗は手刀で鎖骨を叩き折
られた。加減をされていた事で、粉碎されるような事こそ無かった

が、しかし激痛には変わりない。

だから彼も必死だ。そう何度も、お菓子のように骨を折られてはかなわない。

鬼気迫る表情で向かってくる祐斗の前に、しかし寛治は何の感慨も抱いてはいなかったりする。

そもそも、彼にしてみれば現在三人に課している鍛錬は、どれもこれも確りと加減をした上で、その上有情だと考えているからだ。

件の老人ならば、そもそも口を利く余裕はおろか、余分な思考を挟む瞬間すらも死に直結しかねない鍛錬を課される。一瞬でも思考が逸れて体が動かなければ、焼き殺されるか、切り殺されるか、殴り殺される事だろう。

だから、彼は内心で考えていたりする。もつと厳しくても良いだろうか、と。

もしも、この内心を口に出せばまず間違いなく言われるだろう。

「「鬼か／かな／ですか」」

近接組が地獄を見ていた頃。遠距離が専門の二人が地獄を見ていないかと問われれば、否であつたりする。

「俺は、魔力じゃなくて霊力つすけど、良いんですかね？」

「ええ。高威力の術は、それだけお手本として有能なもの」

肯定してきたリアスに、寛治は頭を搔いて、そして頷いた。

「……んじゃ、見せましょう。ただし、俺は指導みたいなのはできないつすからね」

一応の断りを入れて、寛治は斜め上の空へと向けて右手の平を向けた。

「——『破道の三十一 赤火砲』」

唱えると同時に、彼の空へと向けられた掌に人の頭ほどもある大きさの火の玉が現れ、ソレは空へと放たれる。

暫く進み、周囲の森からも十分に離れた所で、一気に膨張。

その光景は、いつぞやの夕方のように。

空にもう一つの太陽が現れたかのような光景をバックに、寛治はリアスたちへと向き直る。

「こいつが、俺が使う術の鬼道つす。その中でも破道と縛道に分かれるんすけど、コレは前者つすね」

「……コレ、あの時のものと同じ術かしら？」

「そつすよ。俺は、炎系の術が得意なんでこの威力つすけど、これでも抑えてる方つす」

「アレで!?!」

リアスと、そして朱乃が驚くのも無理はない。

彼の放った術は、遠くともその熱気が伝わりそうなレベルのものだった。

しかし、寛治としても自分の力をひけらかしたいからそんな事を言った訳では無い。寧ろ、事実であるから伝えなければならぬと思つたまでの事。

「鬼道は詠唱破棄っていう技術があるんすよ。まあ、他にもあるんで

すが、詠唱破棄は文字通り、詠唱を破棄するもの。威力は元の三分の一程度に落ちるんですけど、その分素早く撃てます」

「三分の一!?あの破壊力でですか!？」

「まあ、基本はつて奴です。さっきも言ったように、俺は炎系の術が得意なんでガツツリ落ち過ぎる、なんて事は無いはずですよ」

多分、と内心で寛治はつぶけた。

彼の鬼道の腕前は、威力重視で細かな調整を苦手としているタイプ。暴発などはしないが、威力を落とせない。だからこそ、鍛錬の手合わせなどではおいそれと相手に打つことが出来なかった。下手したら鍛える相手が消し飛びかねないから。

「……因みに、その詠唱、破棄?をしなかったらどうなのかしら」

「もうちよい強いのが撃てますね」

「……見せてもらえるかしら?」

神妙なりアスに、寛治は右の眉を上げるが、別段断る理由も無い。先程と同じように右手を斜め空へと向けた。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

詠唱が連ねられると同時に、先程以上の霊力が渦を巻き、寄り集まって、火球となる。

「——『破道の三十一 赤火砲』」

放たれる一発。それは、初弾よりも更に速かった。具体的には、風を切る音が聞こえる程。

そして、

「ツ……!」

離れていても感じる熱。

広がった火球自体の大きさは、一発目よりも一回り大きい程度だろう。しかし、今回はその中に込められた力の密度が違う。

「……つと、まあこんな感じっすね。そもそも、どれだけ攻撃範囲が広くても、中身スカスカの見掛け倒しじゃ意味が無いんすわ。特に、俺の霊力を使う術だとか、魔力の攻撃は、範囲以上にこの密度が大切だと思います」

「密度、ですか……」

「広範囲攻撃つてのは、派手つすからね。視界を封じる点もあって威圧感もある。ただ、その分威力がお粗末。壁にしても突破されれば、その範囲の広さから撃った側は息切れ必至。だからこそ、密度つす」
因みに、したり顔で語っている感じだが、件の老人は攻撃範囲と威力、密度の全てを満たした攻撃で包围して焼き尽くしてくる。

若干遠い目をする寛治の一方で、リアスと朱乃の二人は新たな視点を真剣に考えていた。

彼女らもまた、年若くとも才能に溢れるタイプだろう。伸びしろもあり、潜在能力も比較的高い。

だからこそ、先程の光景は驚き、そして脳裏に刻まれてもいた。

もしも仮に、寛治が敵対し、術勝負になった場合、十中八九二人は押し切られて、先程の火球の塵へと変えられることになるだろう。

指導は出来ない、と言いなながらも凶らずも道を示した寛治。

その成果を發揮できるかどうかは、彼女ら次第だった。

*

地獄は続くよ、何処までも。

そんな替え歌が聞こえてきそうな日々の中。

人というものは、疲労が酷すぎると、逆に眠りにくくなることがある。

その日、一誠は妙な眠りの浅さから目を覚ました。

「だりい……」

今までの人生の中でも感じた事が無いほどの、圧倒的な疲労感。それでもこうして身を起こして、尚且つ歩き回る余裕があるのは、自分が強くなっているからなのか、或いは師匠役の見極めが優れているか

らか。

肩を回せば、関節が鳴る。大きな欠伸が零れ、キツチンで何か飲もうとリビングの扉を開ければ、思わぬ相手がそこに居た。

「あれ？早いっすね、兵藤先輩。おはようございます」

「おう、おはよう……いつもこんな時間に起きてるのか、山本」

「こんな時間って……もう六時過ぎっすよ？」

ヘラリと笑った後輩。しかしその表情以上に、一誠の注意を引いたのはその両手。

いつも確りと巻かれていた包帯が緩んでいるのだ。

「なあ、山本のその両手って、怪我でもしているのか？」

「怪我……まあ、そっすね。一応、自前の包帯は持ってきてたんすけど、ちよつと足りなそうなんで」

「ほーん」

気の抜ける返事をしながら、冷蔵庫の方から水の入ったペットボトルを一本取った一誠は、そのまま後輩の近くに腰を下ろした。

思えば、彼はこの後輩の事をほとんど何も知らない。

学園のアイドルでもある、塔城小猫のクラスメイトで、自分よりも少し前にオカルト研究部に入った人間。

さらに言えば、鬼強い。それはもう、もしも戦えと言われたら土下座でお断りさせてもらいたいレベルで闘争心をへし折られてきた。

後は、存外フランク。一応の上下関係の為か、体育会系のような敬語擬きと先輩の敬称を付けるが、その実態はどちらかという友達寄り。

心のどこかでこの後輩は、傷つかない存在だと思っていた。天才なのだと思っていた。

だから、その光景に驚く。

「そ、の腕……」

外された包帯の下には、まだまだ真新しい火傷痕が残っていた。

痛々しい、なんて言葉では足りない。ズタズタだ。よく見れば、外された包帯にも血か或いは染み出た体液が染み込んでいる。

「ま、他言無用で頼みますよ、先輩」

「なっ……そ、そうだ！アーシアに治してもらえば」

「それじゃ、意味が無いんすよ」

血の気が引いたように顔を青くする一誠に、静かに寛治は語る。

「痛みは、教訓なんですよ。この火傷は、俺自身への戒め」

「戒め？」

「自分はまだまだ発展途上。道半ばで、言っちゃあ何ですが今回の指導だって出来る立場だとは一度も思っちゃいない。まあ、それを差し引いても調子に乗らねえようにって事っすね」

若干冗談めかしながら、軟膏を塗って手際よく寛治は包帯を巻いていく。

「まあ、気に病むような事じゃねえんで。日常生活にも問題ないですし、今日シバき回すのも問題なしですから」

「待ってっ!?!明らかにそんな雰囲気じゃなかっただろ!?!というか、似たようなやり取り前にもやったな!?!」

「先輩って弄りやすいっすからねえ」

ケラケラと笑う寛治に、一誠は噛み付いてみせながらも、同時に先程までのシリアスな雰囲気は払しょくされた事に若干肩の力を抜く事が出来た。

同時に、改めて気合も入った。

はるか先に行く後輩が、自分の事を発展途上だと称するのだ。そんな彼にボコボコにされ続ける自分などまだまだヘボのヘボ。

自身の夢実現のためにも、こんな所で止まっては行かない。

そう決意を新たに、一誠は水を一気に飲み干した。

ようやく終わった。その事実を認識する前に、一誠は泥濘となった地面にうつ伏せに倒れ込んでいた。

彼だけではない、祐斗も小猫も同じように、ぬかるみで汚れる事など知った事かと言わんばかりに、地面に転がっている。

そして、三人を見下ろすのは腕を組んだ寛治だ。

「お疲れ様でした、お三方。後は体力回復の余暇を挟んで、それから決戦つすね」

息も切らすことなく言い切る寛治に、しかし三人は言葉を返す余裕も無い。

泥のように眠りたい。彼らの欲求はそれに尽きる。

特訓後半戦の期間。寛治は、日を追うごとにその力を強めて、常に三人の強大な壁として立ちふさがり続けてきたのだ。

一番のシヨックは、いつの間にかギリギリ二桁の倍加が可能になっていた一誠の砲撃を真正面から握りつぶされてしまった時か。

彼曰く、密度が足りない。その苦言は、リアスたちに送ったアドバイスと同じもの。

それからも更に続いた手合わせは、より苛烈な物へと変化し続け、今こうして三人は限界を超えてぶっ倒れた。

「そっちは終わりがしらっ？」

「ええ、まあ。十全、とまではいかないっすけど、二週間前と比べれば少しはマシになってると思いますよ」

「少し、ね……」

「当たり前じゃないっすか。人間だろうと悪魔だろうと、地力は早々変わらない。短期間で変わるとするなら外付けパーツが要ります。少なくとも、俺がこれ以上突き回したところで、劇的には変わらない」
肩を竦めて、改めてくたばっている三人へと目を向ける寛治の瞳から、リアスはその感情を読み取る事は出来なかった。

スパルタ、と称するには余りにも激烈で苛烈だった彼の特訓という名の、一方的な虐殺のような手合わせ。

眷属を大切にする彼女としても、思う所が無かったわけではない。が、しかし目に見えて強くなつていく彼らを見れば、何も言えなかつた。

当人たちには、もしかすると自覚は無いかもしれない。それでも、確かに強くなつた。

「まあ、そもそも俺は人に教えるとか向いてねえんですよ」

ヘラリと肩を竦めて手を振つて、寛治は一誠と祐斗を重ねるように左肩に担ぎ上げ、そして右の小脇に小猫を抱えた。

「とりあえず、戻りましょう。治療とそれから、疲労抜き。本番で、疲れて力が出ませんでした、じゃ話にならないですし」

「そう、ね……それにしても、三人も抱えて、貴方は大丈夫なの？小猫を運ぶなら私が変わるわよ？」

「疲労抜きは、先輩も含まれてるんで大丈夫です」

それは貴方も、とはリアスは言えなかつた。

事実として、寛治に手合わせの疲労は殆ど無い。そも、肉体的にもほぼ疲れていないが、同時に精神的な余裕の差もその疲労の度合いの差を作っていた。

寛治にしてみれば、現状の一誠、祐斗、小猫の三人の攻撃は、相手が殺す気で向かつてきても大した脅威にならない。脅威にならないという事は、つまり精神的な圧迫感も無く、追い詰められる事が無い為常に一定の余裕を持てるという事。

一方で、三人はといえば、相手の打撃は掠めるだけでも骨に亀裂が走りかねないものばかり。肉体的な負荷もさることながら、精神的な負荷も洒落にならない。

余談ではあるが、この後小猫はお姉さま方に丁寧に風呂に入れられるのだが、野郎二人は適当に泥を落とした後に湯船に放り込まれて溺死しかけた事をここに記す。

*

時は流れて、決戦の日は訪れる。

「~~~~~っ！」

「先輩、少しは落ち着いたらどうっすかね」

部室の中をあちこちに歩き回る一誠に、寛治はそんな呆れた言葉を掛けた。

レーティングゲーム開始は、真夜中の十二時。新校舎側にライザー、旧校舎側をリアスとそれぞれ陣地としてゲームを始める。フィールドは異空間に作られた駒王学園のレプリカを用いる事になっている。

観客は、審判を兼ねるグレイファイア。そして、リアスの兄。

「だって、魔王様が見に来るとは思わねえだろ!」

「どっちかの家から代表で発言力のある人間が、見に来るのは当然じゃねえですか。大丈夫っすよ、先輩。戦い始めたら、そんな緊張忘れると思うんで」

「そう、か……?」

「だって先輩アホですし。猪突猛進のイノシシが並列思考なんて出来るはずないでしょう」

「それは……っつておい!誰がアホだよ!」

「まあ、余計な事考えない方が良いつて事っすよ」

ヘラヘラと一誠をからかう寛治だが、彼は彼である事を予めリアスに通していたりする。

「第一、今回俺が出るかどうかは先輩たちの頑張り次第なんすからね」

ソファに背を預ける彼は、そんな事を言う。

そう、今回寛治は初っ端から全開で大立ち回りをする——事は絶対ない。これに関しては、仕方がないという事情があった。

そもそも、今回のレーティングゲームは非公式であるとはいえ、その本題はグレモリー家並びにフェニックス家間の婚約破棄。要は悪魔の問題だ。

この問題を、一応の身内認定を受けているとはいえ、人間が解消する。これは、少々問題があった。

であるならば最初から彼の参加を認めるな、という話ではあるがそこをつつき始めるときりが無い為割愛。

とにかく、寛治が一から十まで蹂躪するのは意味が無いのだ。

そしてもう一つ。これは彼の内情。

要は、夢の中の老人が許可を出さなかった。

またかよ、と白けた目を向けた寛治だったが、今回は力を抑えるという事と、それから場所の問題があった。

結界で隔離すると言っても、どの程度まで隔離するのかが分からない。

仮に、結界そのものを燃やしてしまい、尚且つ異空間にまで影響を与えてしまった場合、取り返しがつかないのは明らか。

諸々の理由から、寛治はゲーム序盤は出て行かない。彼としても、出番が無いのならそれで良い。

そして、時は訪れる。

*

それは、怠慢と油断の産物だったのかもしれない。いやしかし、明確なまでの差があったのならば、先述のそれらも仕方がない、のかもしれない。

ライター・フェニックスは、フェニックス家の三男だ。既に成人し、公式のレーティングゲームも経験済み。更に、それらの戦績はほぼ全勝。負けたゲームも相手が得意先などで、接待を兼ねていたのだとか。

今回の非公式なゲームは、公式戦とは違い特殊ルールなどは設けられていない。

相手の王を落とす、ないしはギブアップさせればいい。実にシンプルな物。

実力差はどうあれ、経験の差はそう簡単には埋まらない。更に、間を開けたとはいえ、たった二週間ほどだ。二ヶ月もあればもつと違つたのかもしれないが、たったそれだけの期間でどうこう出来るはずもない。

普通なら。

「見誤っていた、か」

今まさにリタイアしていく、茶髪の彼を見下ろしながら、ライザーは苦みの走つた顔をする。

眷属の質の差は、殆ど五分だったはず。数に関してはフルメンバーであるライザーの側に分があつた。

しかし、蓋を開けてみればどうだろうか。

眷属の大半が、敗れた。信を置く女王も、相手の女王と相打ち。それ以上の被害を相手に与える事無くリタイアしてしまった。

王であるリアスと回復要員のアーシアを除けば、真面に戦つたのは三人のみ。

にもかかわらず、追い込まれた。ライザー側の戦略が甘く、相性が悪かつたというのもあるだろう。

それにしつて、回復用のフェニックスの涙まで使う羽目になつたのは完全に予想外。

「いったい、どんな手品を使ったんだ、リアス」

「手品？何の事かしら」

「惚けるなよ。ミラにも劣つていた小僧が、殺気を放つて向かつてきた。加えて、あの魔剣使いと戦車の小娘。明らかに、二週間前とは別物だろう」

鬼気迫る、とは正にあの表情を言うのだろう。

何より、相手からの攻撃に対する恐怖心とも称すべきものが、ほとんど感じられなかった。ライザーの炎の翼には確かに苦心しているようにも見えたが、それでも二の足を踏むようなことは無かつたのだ。

とはいえ、

「降伏しろ、リアス。お前には、もう戦える駒は居ないだろう?」

リアスもライザーも持ち駒ゼロ。非戦闘員ともいえるアーシアは、先にリタイアしたメンバーの看護に回してしまった。

どちらも上級悪魔で五分のようだが、その実再生が可能なライザーに分がある。

攻撃力が並ぼうとも、防御力がお粗末であるのなら、押し切られるのは当然の事だった。

「そうでもないわよ。ライザー、貴方忘れてるんじゃないの?」
「なに?」

「——今回限りのイレギュラーよ」

リアスが言うなり、この場にもう一人現れる。

「貴様か、小僧」

「どうも」

片手をあげた寛治に、ライザーは眉を顰める。

初対面の折には警戒をして、その上で傷ついたプライドから参加を認めた人間。

「今の今まで隠れていたのなら、最後までそうしていれば良かったんじゃないのか?」

「まあ、そうかもしんないですね。でも、こうして“出る”って予め言ったんだ。少しは働かないと」

「……ふんっ、ただの人間に何が出来る」

「さあて、ね」

ライザーから発せられる威圧感が増してくるが、しかし寛治は意に介する事無く、リアスの前まで歩き、そして改めて彼女とライザーの間で壁になる様に向き合った。

その背に、リアスの言葉が掛けられる。

「後は、任せて良いのね?」

「まあ、そのつもりで出てきましたし。というか、あっちに回復手段が無ければ、俺も出番は無かったんですけどね」

「……それは、想定していなかった私のミスよ」

「やっほ」

振り返る事無く、しかし落ち着いた背中。だが、何と評するべきか妙な雰囲気がある。

ライザーを前にして、寛治は落ち着いていた。そもそも、彼が焦るような事態など早々起きる事も、訪れる事も無いのだから。

良く言えば、落ち着いている。悪く言うなら、無味乾燥。

そんな風いだ感情で戦えるのかと問われれば、寛治は戦える。何故なら、彼の中で感情と戦場は切り離されているのだから。

「……チツ」

舌打ちを一つ吐き捨てて、ライザーは魔力を昂らせる。

得体のしれない雰囲気はある、がしかしだからといって恐れるほども無い。少なくとも、彼はそう判断した。

「火加減はしてやろう。だが、その体に消えない傷を刻んでやる!!」
「……」

猛る炎は、ある程度の距離があるというのに頬を撫でる風を熱く感じさせるほどの熱気を放つ。

自然と、足が一步下がってしまいそうな光景。

だが、彼の、山本寛治の足は、その逆。敢えて前へと踏み出される。相手の攻撃を潰すようなダッシュではない。恐怖を押し殺した弱

弱しい足取りではない。

ただ只管に淡々と、それこそ恐怖はおろかその目に何の感情を映すことなく彼はゆったりと距離を詰めていく。

舐めているのか、ライザーはそう判断し。脳がその判断を認識した瞬間、その蟀谷に青筋が浮かぶ。

「ッ、消えろオツ!!」

さっきの火加減発言は何だったのかと言わんばかりの、怒り混じりの炎が寛治を襲う。

瞬く間に、その姿は炎の壁に飲まれて消えた。

「ふんっ、他愛もないな」

警戒していた自分が馬鹿らしい、とライザーは目を細める。

呆気ない。所詮は人間であり、上級悪魔である自分の敵ではなかつ

た。そう考えれば、自然と納得の感情も浮かび、次の標的へと視線を合わせるのも当然の事。

それが、ライザー・フエニックス 彼 を二流足らしめている要因であることも知らず。

「——よお」

気付けば、声が聞こえた。気付けば、眼前に手が迫っていた。

混乱による意識の空白。ライザーの脳内は、一瞬ではあるが完全に真っ白となり、その体は思考が切れたせいで完全に動きを止めてしま

う。
焼き尽したはずの生意気な人間、山本寛治がライザーの目の前まで迫っていた。

炎に飲み込まれたはずのその体は、しかし驚くほどに損傷なく、熱気によって若干頬が赤くなって、熱によって発生した熱い上昇気流で髪が逆立っている位で特にダメージ無し。

そして、前に突き出されたのは手に平を空へと向けた右手。その中指が内に折られて親指で押さええられた、所謂ところのデコピンの構え。

「俺は、もっと熱い炎を知ってる」

「何を——」

「アンタの炎は、まだまだ温いつて事、さッ！」

最後の一文字と同時に、押さええられた中指が弾かれ、無防備なライザーの眉間へと打ち込まれる。

たかがデコピン。子供遊びの罰になる程度でしかない。ある程度練習すればかなり痛いものにもなるが、それでもやはり所詮はデコピン。

だが、

「ガッ——!?!」

まるで弾丸。ライザーの眉間が割れて血が噴き出し、その体は後方へと二度ほど回転しながら吹っ飛んで最後の戦場となっていた屋上の外へと飛び出していく。

その後を寛治も追い、屋上から空へと飛びあがった。

とるのは、ライザーの真上。構えるのは、左手。

「――『縛道の六十二 百歩欄干』」

やり投げの要領で投げつけられるのは六角形の霊力で編まれた光の棒。

一気に分裂し、先端が尖っていないにもかかわらずライザーの体にめり込むと、そのままその体をグラウンドへと勢いよく叩き付け、縫い止めた。

一方的。しかし、まだまだ寛治は手を緩めない。

両手を組んで息を吸う。

「鉄砂の壁 僧形の塔 灼鉄熒熒 湛然として終に音無し」

詠唱が紡がれ、組まれた両手の指の隙間より編まれた霊力が形を成す。

振り上げられる手。

「――『縛道の七十五 五柱鉄貫』ツ!!」

手が振り下ろされると同時に、編まれた霊力が形を成した。

五角形の形をして先端を鎖で繋がれた五つの鉄の柱。それら一本ずつが、それぞれライザーの両手足と、それから頭部へと叩き込まれる。

容赦の無い光景だ。粉塵の舞い上がるその様子は、両陣営もまたモニターで見ているのだが、フェニックスは別として、グレモリー眷属側は顔を青くしているものも居たり。

グラウンドへと危なげなく着地した寛治。同時に、鉄の柱の隙間から炎が覗く。

「う、ぐ、オオオオオオオオツツツ!!」

咆哮と共に鉄柱が僅かに揺らぎ、地面が炎によって大きく爆ぜた。

倒れる鉄柱。そして、眉間より流れた血の跡もそのままに、全身から僅かに炎を揺らめかせたライザーが僅かに膝を揺らしながら立ち上がる。

「ハア………ハア………まだ、終わっていないぞ、人間ツ!!」

「御託は要らねえ。さっさと来いよ」

「舐めるなツ!!」

全身の炎を更に燃え上がらせるライザー。心なしか、その火力は上がっているらしく、周囲の地面が僅かに炭化しているようにも見えた。

その勢いで突っ込んでくるライザーに対して、寛治は拳を握って待つ構え。

知った事かと突っ込むライザーの右拳が炎を上げて振り抜かれ、

「――『縛道の八 斥』」

合わせられた寛治の左手の甲に発生した霊圧の盾によって大きく弾き飛ばされる。

効果はそのまま。名の通り、相手の物理攻撃を弾くというものが、こと至近距離の戦闘に於いてこの術はかなり有用だった。

振り抜いた右腕を大きく弾かれたライザーは、自然と体の前が開くような格好となる。上級悪魔というのは鍛錬を基本しない為に、彼もまたこのように大きく姿勢を崩されるとそう簡単に立て直す事が出来ない。

そのがら空きの胴体に寛治の右手の指五本全てが押し付けられる。

「――『五指』 『破道の一 衝』」

術の内容としては、指先から衝撃波を放つというもの。威力に関しても、言っては何だが大したことは無い。

だがそれは、あくまでも既存の場合。

寛治の術の場合、五本の指先それぞれから衝撃波が出る。もつとも、ただそれだけならばやはりそこまでの脅威ではないだろう。

この術が脅威足りえる理由、それは密着状態から術を放つという点。

「ぐいっ……いっ……」

胃液が逆流し、ライザーは膝をつく。

要は、内臓を直接ぶん殴られたようなもの。衝撃が伝播するという特性を利用した技だ。

四つ足着いて、肩で息をするライザー。そして、そんな彼を、寛治は一切の感情が読み取れない目で見降ろしていた。

「ここで退くのなら、止めない。俺も、誰かを甚振るような趣味は無い

「からな」

「もう、勝ったつもりか、人間……！ツ、ハア……！この程度で！フェニックスたるこの俺を打倒したつもりか！」

「勝ったつもり？違うな。分かるだろう、ライザー・フェニックス。俺は既に勝ってる。それが分からないほど、アンタは蒙昧には見えないが？」

「ほぎけツ!!俺は、ライザー・フェニックス！アイツらの王であり！フェニックス家の悪魔だ！」

「……」

「——王として！主として！おめおめと尻尾を巻いて逃げる事など赦されん!!」

凄まじい気迫。膝をつき、一方的に叩きのめされながらも、それでも彼は立つことを選択した。

その目を正面から見返し、寛治は一つ息を吐き出す。

「……ハア……王の矜持、か」

彼には分からない覚悟だ。ただ、その重さだけは何となく察して余りある。

徐に、寛治は踵を返すと、無防備にもライザーに背を向けて数メートルその場から離れ、そして改めて向き直った。

「ライザー・フェニックス。燃え盛る炎の王、貴殿に敬意を表する」

雰囲気が変わった。

先程までの、力で優位に立っていた時の雰囲気から、もっと重く、そして深く、まるで底の無い深海を覗き込んだ時のような心許なさ。

周囲が息を呑む中、寛治は大きく息を吸い込んだ。

「ルキフグスさん！並びに、魔王閣下！この声が届いているのなら、結界の強化を願いたい！そして、グレモリー先輩！見るのは構いませんが、距離をとって自分の身を守る事を優先してください！」

叫び、そして開いた左手を腰の左側へと添える。

（爺、使うぞ。覚悟のある男に応える為にな）

一度開かれた左手が、虚空を掴むように動けばその手に現れるのは、一振りの日本刀。

左親指が鏢へと掛けられ鯉口が切られる。柄へと、右手が伸びその刃が外界へと晒され、

「『万象一切 灰燼と為せ』——『流刃若火』」
業火が景色を塗りつぶす。

その光景を前に、ライザーはその目を大きく見開いた。フェニックス家は、炎と共に在る家だ。不死鳥、或いは朱雀とも称される。ライザーの二つ上の兄などもレーティングゲームに於いて上位の成績を修める高い実力を有している。

特筆すべきは、その不死の再生能力とあらゆるものを焼き尽すとも言われる強力な炎。

悪魔の貴族としても、生まれながらの勝者と評されても間違いない、そんなスペックを有している。

だが、そんな家に生まれたライザーは、今この瞬間、その火を見た瞬間に心がへし折られてしまう様な、そんな感覚を味わっていた。火を、炎を、恐ろしいなど感じたのは生まれてこの方初めてだったのだから。

そしてそれは、この一方的な戦いともいえない状況を見つめる者たちにも同じ事がいえた。

「彼は、いったい……」

椅子を蹴り倒す勢いで立ち上がった紅蓮の魔王、サーゼクス・ルシファーはその炎を見ながら呆然ともとれる言葉を漏らしていた。その斜め後ろに控えていたグレイフィアもまた驚愕と言っても良いほどに目を見開き、その炎を見つめていた。

悪魔の突然変異とも称され、その実力は世界的に見ても上位に位置するサーゼクス。

そんな彼をして、その炎は無視できない。

焼き尽される。画面越しに見てもそう感じるのだから、相対するライザーに押し掛かるプレッシャーなど計り知れない。

「怖い、ライザー・フェニックス」

日輪を背負い、寛治は静かに問う。

燃え盛る爆炎を吐き出す刀身に反して、彼自身は実に静か。凧いで

いるようにも見えないほどに己の武器とは対照的な様子を晒していた。問われ、ライザーの喉が震える。初めて抱いた、炎に対する恐怖。自身が燃やされるかもしれない、という恐怖。

恐ろしい、逃げ出したい。不死身であるがゆえに早々には働かない生存本能が最大限の警鐘を鳴らしてこの場からの離脱を勧めてくる。果たして、その引き攣った喉から出るのは、

「……ッ、舐めるなよ、人間ッ……！」

プライドに支えられたなけなしの虚勢。

胸を張って立ち上がり、震える言葉尻を無理矢理に飲み込んで炎の翼を翻す。

「さつきも言っただろう……！俺は、王として退かないとッ!!」

「……そうか」

ライザーの言葉が虚勢である事は、相対する寛治がよく分かっている。

だが、彼は敬意を表すると言った。であるのならば、今この場でやっぱり止めた、何て選択肢を採る筈も無く。

「——なら、火加減は無しだ」

右手に握られた刀が掲げられる。

刀は、流刃若火は、ただその場にあるだけでも兵器と化す。吹き上がる炎を防ぐ手段など、早々無く。そもそも守りを許さない。

「オオオオオオオオオオオッッッ!!」

自ら退路を断ったライザーに出来る事など、もはや特攻しかない。

炎の翼だけではない。全身を炎に巻いて、その姿は宛ら家名の通り、火の鳥フェニックスのよう。

そして、寛治はただただ無造作にその右手を振り下ろした。

指向性を与えられた炎が、グラウンドを焦がし、空気を焼いて、破壊の奔流となって突き進む。

(ただ、振るうだけで、これか……！)

自分とは比べるべくもない。圧縮された時間の中で、ライザーは何度目かの己の無力をかみしめる。

上級悪魔として生まれ。ハーレムを築き、公式のゲームだって実質無敗だ。その力は、確かな物なのだろう。

だが、悪魔にありがちな、生まれに頼り切った強さというものは直ぐに限界が来る。

格上の相手には当然ながら己の力は決して通じず、鍛えていないのだから状況を打破するための術も持ち合わせることは無い。

(まずは、鍛えてみるか。ああ、そうだな。アイツらとも——)

思考はそこまで。ライザーの視界は朱に染まる。

決着。

まだまだ早い朝の時間。夏が近づいてくる時期ではあるが、しかしこの時間帯の空気は湿ってそして冷たい。

その空気の中、兵藤一誠は走っていた。

一定のペースで、全力疾走ではないが、それでも息が切れる程度には速さを保って。

あの合宿から暫く経った。

無事、と言うべきか、リアスの婚約は解消。ゲームに関してもオカルト研究部の勝利として幕を閉じた。

それぞれの胸の内に、苦みを残して。

「ツーはあ……ーはあ……ー！」

折り返し地点の公園に辿り着き、一誠は大きく息を吐く。

額を流れる汗をジャージの袖で拭って、空を見上げる。思い出すのは、件のレーティングゲームの日だ。

ライザーを追い込む事は出来た。それこそ、彼がフェニックスの涙を有していなかったならば、勝利を掴めていたかもしれないほどに。

だが、現実問題彼らは敗北しかけた。それを救ったのは、師匠ともいえる後輩。

彼は強かった。あれほど強いライザーをほぼ一方的に叩き伏せ、その上本人は何処からどこまでが本気であったのか底が分からない有様。

術の精度、体捌き、あらゆる要素が現状のグレモリー眷属よりも上。何より、最後に見せた爆炎を吐き出す刀。

アレはやばい。まだまだ素人に毛が生えた程度の経験しかない一誠をして、一目見ただけでも全身の産毛が逆立って鳥肌が立ってしまうほどの存在感があった。

それから、ライザーの在り方。

初対面の印象からして、あまり宜しくない。一誠の目指すハーレムを構築した上で、色々と見せつけられたから、というのもあるだろう。だがしかし、あの戦いとも呼べないかもしれない一方的な戦況で、

その矜持によつて最後まで折れなかつたその姿は、感じ入るものがあつた。

一誠もまた、王を目指す。その根底にあるのは、男の夢ハーレムの実現。

人によつては笑われる事だろう。蔑まれるかもしれないし、白い目で見られるかもしれない。

だがしかし、欲望に忠実な事は、実に悪魔らしいのではないだろうか。

例えそれがエロ根性だろうと、不純な感情による発露だろうと、強くなるためのモチベーションが高いという事なのだから。

そのモチベーションの為にここに居る。

「おはようございます、先輩」

「おう、おはよう山本。今日も頼むな」

公園にやつて来たのは、ジャージに身を包み、包帯に包まれた右手を挙げた寛治だ。

あの凡そ二週間で死ぬほど扱かれた相手に、師事する。それは、見る人が見れば自殺志願にも、或いはDMであると声高に宣言しているようにも見えるかもしれない。

その一方で、師事される当人、山本寛治自身はといえば当初はそこまで乗り気ではなかつた。

再三、当人も自覚している事ではあるが、彼自身優れた指導者という訳では無い。その道の天才がイコールとして、優れた導き手ではないように。

それでも良い。そう言われて、渋々彼は引き受けた。そして、引き受けたからには約束を破るような事はしない。

「とりあえず、神器は無しで。俺は、隠す系の結界張れないんで」

「おう、分かつてる」

「んじゃ、始めていきましよう」

言葉は少なく。一誠が正面から挑み、ソレを寛治が迎え撃つ形だ。

戦闘のド素人である彼は、付け加えて才能に劣る。

スポーツなどと同じく、戦いにおいても才能というのは実に大切

だ。いや、努力の方が大切だろう、と言う人も居る。

だがしかし、努力を実らせる事も才能だ。

その努力は経験となって、決して無駄にならないのかもしれない。しかし、きちんと実を結ぶかどうかはまた別問題。

努力とは、決して綺麗な物ではない。湖面を優雅に滑る水鳥が、水中では忙しく足を動かしているように。

この努力を綺麗な物として昇華させるのが、才能だ。

努力と言う不定形に確りとした形を与えて、成果という形で表に吐き出す。それが才能。

「腕を振り回さない。必要以上の大振りは必要ないっす。寧ろ、ソレは完全なロス。先輩の神器は力を倍加し続ける、なんて便利なもんですけど、現状限界がある。倍加が増せば体への負担も大きい。ロスは少ないに越したことはねえんですよ」

「く、そつ……い！」

左右の連撃が、緩い左手の手刀一本で捌かれる。

神器は使っていない。一誠の戦闘スタイルは、左腕を基本的に防御に用いた両手による体術。意外、という訳では無いが、あまり足は使わない。これは、寛治からの指摘で、下半身を鍛えていない一誠が足技に拘ると隙を晒すだけになる、と言われたから。

事実、一誠は両腕を振り回すだけで精いっぱいだ。その両腕に当たって簡単に寛治に払われているのだから思う所がある。

一方で寛治もまたこの状況を持って余していた。

彼の体術、白打は個人差が大きい。

例えば、肉体のしなやかさを存分に活かして鞭のような蹴りを放つたり、或いは速度で相手を潰す。

例えば、一撃必殺。肉体を石、或いは岩のように固めて放つ。

寛治の場合は、言わずもがな後者だ。しかし、その打撃は決して力一辺倒の脳筋染みたものではない。

小猫に合宿の折に語った様に、タイミングと筋肉の緊張と脱力が重要になってくる。

完全に、感覚の話だ。そして、寛治はこの己の感覚を正確に言葉に

して、尚且つ相手に理解させるだけの語彙を持ち合わせてはいなかった。

「んー……何というか、先輩は選択肢を持たない方が良いタイプですよね」

「ぜえ……ぜえ……そ、それって、良い、のか……?」

「良いか悪いか、で言えば良くはないです。採れる選択肢が少ないって事は、イコール対応策をとられやすいって事なんですから」

「それじゃあ——」

「でも、その一点を突き詰める事で、その対応策をぶち抜けば話は変わります」

肩で息をしている一誠を見下ろしながら、寛治は腕を下す。

「兵藤先輩の神器の売りは力押しです。譲渡の力がありますけど、それに関しては颯の最後っ屁になりかねないですよね」

「でも、ゲームでも使えただろ?」

「それは、相手が知らなかったからっすよ。知ってたら、譲渡と同時に先輩ぶちのめされてますからね」

「えっ!?!な、何で——」

「いや、先輩の場合は倍加してないと、クソ雑魚じゃないっすか」
「ぐふっ!」

「まあ、現状倍加しててもクソ雑魚ですけど」

「げはっ!」

「俺なら、最初の十秒経つ前に潰せてますね」

「おぼっ!」

言葉の刃三連撃に、一誠は胸を押さええて倒れた。

事実である。あるのだが、しかし真正面から言われてしまえば心のヒットポイントが減ってしまう。

一誠が泣きながらメンタルを抉られたのと時を同じくして、公園へと誰かがやって来る。

「おはよう、カンジ。イツセーはどうしたのかしら?また、貴方骨を折ったんじゃないでしょうね?」

「骨は折ってないっすよ。メンタルが折れかけたんじゃないっすか

ね」

「何したのよ……」

呆れたように息を吐くりアス。そして、彼女が乗ってきた自転車の荷台にクツションを巻いた即席の後部席から飛び降りるのはアシアだ。

彼女らが来たのは、監督の為。と、それから一誠のやる気を復活させるためだ。

甲斐甲斐しく世話をしてくるアシアと、それから男性垂涎ものの肢体をしたリアス。二人が居るだけで一誠は立ち上がれる。

「あっちも立ち上がってます?」

「お、おとおお男の性だろ!? 反応するだろ! 普通!」

「生憎と、俺は覚えが無いっすね」

「……お前、本当に男か?」

「風呂にまで一緒に入って、その上、同じ部屋で寝泊まりした拳句、ポッコボコにされた相手である俺が女に見えるのなら、脳ミソ取り換えの方が良いっすよ」

「辛辣……! わ、悪かったよ……」

タジタジと引き下がる一誠。

ぶっちゃけ、寛治は女に見える要素は完全にゼロだ。切れ味鋭い目つきに艶があれども同時に硬い黒髪。そして、服の上からでも分かる鍛えられた体つき。

仮にメイクを施して女装させたとしても、そこに現れるのはケバい顔したスカート履いたゴリラが一匹である。

そんな朝的一幕。何気ない日常の一部。

波乱はもう少し、先の御話。

駒王学園は、悪魔の拠点。領地の問題もあり、裏ではリアスが取り仕切っているのだが、表は表で影響力がある者が居た。

それが、学園の生徒会長。

「支取会長だっけか？」

「はい、そうです」

「その会長との顔合わせ……一応の理由とかって聞いているのか？」

「山本さんと、それから先輩方の顔合わせみたいです」

「間が空いたな」

「どうしても、時間をとるのが難しいからでしょうね」

昼休み、昼食を挟みながら寛治と小猫は放課後の予定について話しかつていた。

生徒会長、支取蒼那。そして彼女を長とした生徒会は彼女を主とした眷属の拠点でもあった。

その彼女と、本格的な顔合わせ。期間が空いたのは、両陣営共に色々ごたごたしていたせい。後の理由としては、悪魔としての長大な寿命故、と言うのもあるだろう。

丁度会話が切れて、二人の口が食べ物で塞がる。

もぐもぐと咀嚼する中、そういえば、と小猫の頭に話題、もとい質問が浮かんだ。

「んぐ……そういえば、山本さんは朝に兵藤先輩と組手してるんですよ？」

「ん？まあ、な」

「……どうですか？その……強く……」

「んー……」

おずおずと尋ねる小猫だが、しかし師匠役となっている寛治は渋い表情でパンを齧ると窓の外へと視線を向ける。

暫く咀嚼して口を噤んでいた彼だが、小猫は視線を外さない。

真つすぐに向けられる目に居心地が悪くなった所で口の中身を飲み込み、寛治は渋々口を開いた。

「微妙」

「微妙？」

「兵藤先輩には、才能が無い。元々一般人だから、当然戦闘勘なんか持ち合わせていないし、何かの格闘技をした訳でもない。根性と折れない精神面は及第点でも、圧倒的に肉体が付いてきてない。文字通り無い無い尽くしでな」

「……でも、先輩は神滅具の持ち主ですよね？」

「現状の先輩が何回倍加しても俺なら瞬殺だ。これから先、俺より強い相手なんて簡単に出てくるだろうし、そうなれば先輩も死ぬ事になるし」

（山本さんより強いのなら、私たちも恐らく勝てませんよ……）

小猫は喉元まで上がってきたそんな言葉を飲み込む。

彼女が思い出すのは、目の前の彼の戦闘能力。

体術、魔法のような術、そして業火を吐き出す刀。現状の知っているスペックだけでも、グレモリー眷属は何れも勝てない。

そんな彼が敵わない相手など、もはや悪夢そのもの。

彼女の脳裏で火を吐く化物が雄叫びを上げているが、寛治の話はまだ終わっていない。

「で、先輩には選択肢を持たない事を勧めた」

「選択肢を、持たない？」

「要は自分で手札を制限するって事だな。利点としては、迷わなくて済む。デメリットは、相手に対策をとられやすい」

「成程」

「まあ、神器の特性的にも色んな手札をもって器用貧乏以下になるのも無理じゃねえと思うがね」

「そうなんですか？」

「やり方は簡単だ。その道の三流程度、或いはそれ以下の実力だろうと、どれだけロスが発生していても、倍加しまくって出力を只管に高めればいい。アホなやり方だが、多分神器の使い方としては正攻法だろ」

俺は好きじゃないが、と寛治はパックのコーヒー牛乳を啜りなが

ら、背凭れへと体重を預けた。

神器としては正攻法かもしれない。しかし、この戦法は体への負荷が酷すぎる。下手をしなくとも、命を削る事になる。

「教えないんですか？」

「教えない。少なくとも、俺はそんな自分を鑢にかけるようなやり方はしてほしくない」

鍛えるのは得意じゃない、と言いつつも寛治が鍛えるのは強くなりたいと言われたから。そして、そんな彼を死なせない為でもある。

死なせないために鍛えているのに、その結果の戦闘手段が自分の命を削る物など笑い話にもならない。

「つつつても、手詰まり感はあるけどな」

「山本さんのあの技を、教えたりはしないんですか？」

「一骨、な。うーん……いや、擬きは出来るかもしれないけど。あの人、センスねえし。寧ろ、その辺りは塔城の方が可能性あると思う」

「私が、あの技を？」

「おう。基礎の基礎はあの合宿で教えたし。まあ、他を極めるならそれでもいいさ」

一誠に比べれば、小猫の体術は光るものがある、と寛治は思っている。

比較対象が悪いかもしれないが、とにかく小猫はまだマシ。

「なら、教えてください」

「体術か？」

「はい」

「得手じゃねえんだが……まあ、可能な範囲、な」

寛治が存外面倒見が良い事を小猫は学んでいたりする。

そんな昼休み的一幕。

*

放課後。グレモリー眷属とそして、支取蒼那をトップとするシトリー眷属の顔合わせが行われる事になった今日この日。

一応身内という事で隅つこの方に居た寛治ではあるが、彼の目から見て彼女らは五十歩百歩。強いて挙げれば、グレモリー眷属の方が、数は少ないが質は勝る感じか。

今も、蒼那の新人兵士が一誠に絡んでいる。

というか、

(悪魔の兵士は、何かしらの瑕疵が無いと成れないのか?)

壁に背を預けながら、そんな事を考える。

全員が全員ではないのだろうが、一誠に負けず劣らず、件の彼も魔力が少ない。それでも転生に兵士の駒を四つ使ったというのだから、神器というものは凄いな、と他人事のように思ったり。因みに、一誠は八つで転生した。

比較的和やかに場は進んでいる。女性が多い為か、祐斗へと一定の視線を送る女生徒が居るのはイケメンの有名税のような物だろうか。

「そういうえば、そちらの彼の紹介をしてもらっても良いでしょうか、リアス?」

「ええ、勿論。と言っても、彼は私の眷属じゃないわ。カンジ、自己紹介してくれるかしら?」

「山本寛治っす。まあ、オカルト研究部に所属するただの人間なんで、その辺は悪しからず」

ひらひらと手を振る寛治だが、グレモリー眷属の面々からはどの口が、と思われていたり。

そして蒼那もまた、彼の名前には覚えがあるらしい。

「貴方が……リアスから話は聞いていますよ。少し前に、墮天使を倒した、と」

「え?………ああ、まあ、アレって兵藤先輩が倒した墮天使の部下だったって話ですし。大したことはねえっすよ」

「それに、リアスの婚約でも活躍したらしいじゃないですか」

「先輩？」

思わぬ言葉に顔を向ければ、逸らされた。

少しの間、端正なその横顔を眺めていた寛治だったが、壁から背を離すとため息を吐きながら頭を掻く。

「はあ……まあ、別に口止めはしてないっすから良いんですけどね。折角非公式だったんだから、そう話すもんでもないと思いますけど？」

「ご、ごめんなさい。で、でも！ソーナは、誰彼構わず話すような性格じゃないもの！大丈夫よ！」

「今この場で、不特定多数に広がりましたが？」

「……ごめんなさい」

「だから、怒ってないですって。支取生徒会長も、あんまり触れ回らないでください。生徒会の方々も。俺は別に、絡まれようがどうしようがどうでも良いっすけど、それが理由でグレモリー先輩方に迷惑かけるのは嫌なんで」

「ふふつ、リアスのそこまで殊勝な態度は珍しいですね。眷属への勧誘はしなかったんですか？」

「断られたのよ。それに、今の私じゃ駒全てを使っても寛治を眷属には出来ないかもしれないし」

「そこまでのモノを……？」

「ないないないっすよ。単純に、俺が悪魔として長々生きていくのが嫌だって断っただけっす」

ひらひらと手を振る寛治だが、しかし蒼那の目は眼鏡の奥で薄く細められていた。

彼女はどちらかと言うとテクニカルなタイプだ。神算鬼謀、とまでは言わないがそれでも戦略を練り上げて、戦術を敷き、搦手をもって相手を封殺する。出力、攻撃力に劣る分、それが彼女の戦い方でもある。

そんな彼女だからこそ、目の前の相手を測りかねる。

グレモリー眷属の面々の様子から、強いのだろう、と当たりを付ける事は出来た。だが、その強さの度合いがどれほどのモノなのか分

からない。

とはいえ、今回は顔合わせ。出会った傍から互いを深く知る事など早々できはしない。

因みに、この顔合わせのお陰で、後々一同揃って場を好転させる切り札を得る事になるのだが、そんな事は、誰も知る由も無いのだった。

休日、寛治は一人町をぶらついてた。

一応の目的地はある。駒王町に幾つかあるドラッグストアの一つと、それから大手スーパー。

一人暮らしをする手前、仕送りを一から十まで全てつき込み続ける訳にはいかない。という訳で、彼はこうして週末に一週間分の食料や日用品その他をかうようにしていた。

「ええっと、包帯に軟膏……いい加減、完治させるか？……いや、ダメだな。下手に完治させすぎると、爺のしごきが増す可能性もあるし。まあ、絆創膏その他も買い足しとくか。それから——」

必要な物をリストアップしたメモを片手に、寛治は頭の中で算盤を弾いていく。

一週間の予算一万円前後。一日の予算凡そ千五百円弱としてやりくりしていけば、月の食費は四万程度。寛治自身は大食漢でもなければ、食後には絶対デザートが欲しいタイプでもない為、大抵の場合はここから更に一万五千ほど引いた額が月の食費となる。

もう少し安く抑えても良いと、彼としては考えているのだが、あまりにも食費などを使わない場合は親から心配のメッセージが送られてくるのだ。という訳で、仕方なしに少しばかり凝った料理を作つて、多くの食材を消費できるようにしている、という裏話があったり。そんなこんなでドラッグストア。包帯を幾つかと、それから愛用している漢方由来の軟膏。ティッシュに絆創膏に、食器用洗剤の詰め替え等々を購入。エコバッグ代わりの登山用リュックに中身を詰め込んだ。

やる気のない店員の挨拶を背中に、店を出た寛治。

「どうするか……」

頭を搔く彼は、左手に付けた腕時計に視線を落として、一つため息を吐き出した。

食材の買い出しに関しては、夕方に行われるタイムセールを狙う。日付の問題などもあるが、その辺りは冷凍保存すれば少しは誤魔化せ

る。

問題は、時間だ。タイムセールまで、まだ暫くかかる。その辺りも逆算して家を出たつもりであったのだが、予想以上に信号に引っかかるなかった事と、それから思った以上に自分の歩くスピードが速くなっていた為に、計算が狂ってしまったっていた。

早めに店へと向かって時間を潰す事も考えたが、寛治は予め買うものを決めた上で来店するタイプ。その滞在時間は最長でも三十分未満で、長々と居座れないタイプでもある。

どうしたものかと頭を捻り、不意に背後の気配にその足が止まる。別段油断しているとか、そういう事ではない。というか、どれだけ気が抜けているように見えても寛治に油断はあり得ない。そんなものしてしまえば、その日はおろか、翌日も起きられない。

そして振り返り、寛治は速攻で振り返った事に後悔する事になる。

「……俺に何か用事か？」

顔が引き攣るのが自分でも分かる。それほどに、寛治の左頬が引き攣った。

彼が相對したのは、かなりオブラートに包んで尚且つ遠回しに表現して、不審者だ。

フード付きの白い外套を纏った二人組。白昼堂々と過ぐすには、明らかに異質。話しかけるどころか、同じ空間に居る事すらも居心地の悪さを覚えるような、そんな姿だ。

現に、足を止めた寛治と、その不審者二人組に周囲からの視線が集まり始めていた。

「む、いや、少し道に迷つてな。道を聞きたかったんだ」

「(女:……?) 道、ねえ。そこの角曲がって暫く進めば、交番があるぞ？」

「交番……それはダメだ。日本の警察は、何故か私たちを見ると、詰め寄って来るからな」

「(日本の……外国人か。その割には、日本語上手いな) ハア……で? どこに行くんだ?」

「この町には、教会があるだろう?そこまでの道を教えてほしい」

呆れたように後頭部を搔きながら、寛治は目の前の二人の立場をある程度割り出していた。

外国人、もとい裏関係で、その上教会関係者。腕前に関しては、現状のグレモリー眷属の面々と五十歩百歩ではあるが、人間である分不利。少なくとも、寛治はそう見た。

同時に、この二人が来たという事は、相応の何かがこの町にある、という事も自然と理解してしまい、寛治は遠い目をする。

一誠が眷属に加入し、寛治がオカルト研究部に籍を置く事になった墮天使の件。それから暫くしての、リアスの婚約騒動。

そして今回、教会陣営がお忍び（）でやって来ている。

寛治自身、勢力間のごたごたには興味が無い。勝手にやってろ、というスタンスである。

だが、この立場も知り合いが巻き込まれるとなれば話は別だ。

(まあ、いざとなったら——潰すか)

内心でそう結論を付けて、不審者へと左の人差し指をたてて招く。

「まあ、案内ぐらいはしてやるよ」

暇つぶしについでに。そんな言葉が後に続いた。

*

週末明け。駒王学園ではイベントの一つ、球技大会が近づいてくる。

クラス代表で出るパターンと、部活並びに組織ごとに集まるパターン。

「よいしょっと」

軽い声と共に、寛治がバットを一振りすれば白いボールは空を飛ぶ。

その行方を目で追いながらリアスが叫ぶ。

「イツセー！そっちに飛んだわ！」

「オーライツ!!」

声を上げた一誠が落下地点に入って手を上げた。

その姿を遠目に、寛治はバットを肩に乗せるとその目を細める。

彼が参加するのは部活の方だ。正直な話、寛治にとってはスポーツは等しく手緩い。その道のプロなどからすればふざけるなど激怒されそうなものだが。

例えば、プロ野球選手の投球だろうと、寛治は何を投げられてもバットの芯でとらえてスタンドまで軽々運べる。

例えば、プロサッカー選手のシュート。どこに蹴ったのか見た後にキヤッチできる。

例えば、プロの格闘家。等しくワンパン。

水泳やスキーなど、技能の中でも更に特殊な部類ならまだ分からないが、少なくとも動体視力、反射神経を必要とするスポーツは等しく彼にとって障害足りえない。

そんなスポーツ自慢はここまでとして、寛治が気になるのが祐斗の事。

今もそうだが、妙に気が散っている。いや、何か別の事に気が割かれていて、と言うべきだろうか。

しかし、寛治は何もしない。彼はカウンセラーではないし、何より、踏み込んでほしくない領域というものは誰でも持っていると思うから。

何より、別の問題もある。

それは、家に帰った後の事。

夕飯の準備も終わり、さあ食べようとしたところで玄関のチャイムが鳴る。

時計を見て、夕飯を見て、炊飯器の中身残量を思い浮かべて寛治は一つため息とともに席を立つ。

「……………家は、食堂じゃないんだが？」

「すまない……………」

「ごめんなさい……」

げんなりとしたジト目で引き戸の玄関を開けた先に居た客人二人は、しょんぼりと謝りながら腹を撫でつつ視線を落とす。

教会の戦士、ゼノヴィア並びに、紫藤イリナ。とある任務で駒王町へとやって来た二人なのだが、どうにも彼女らへのバックアップ関連が途切れがち。

具体的には、資金面。この町の教会自体が機能不全を起こしている現状、有体に言って彼女らは金欠だった。

最初は、ちよつとした気紛れ。その日にタイムセールを勝ち切つて、色々と買い込めたからか機嫌が良かった為に、軽い気持ちで家に上げたのが始まり。

半ば集られている、のだが実のところ寛治にも小さいながらのメリットもあつたり。

「はあ……まあ、上がれよ」

「！ありがたい！」

「ありがとー」

後頭部を掻きながら玄関に引つ込んだ寛治を追つて、二人も家の中へと足を踏み入れる。

洗面所で手を洗い、通された居間には、湯気の立つ片手鍋がちやぶ台の中心に置かれていた。

「わあ、肉じゃが！寛治君つて、料理上手よね」

「まあ、一人暮らししてればこれ位は、な」

目を輝かせて喜びイリナに対して、馴染みのない料理に興味津々のゼノヴィア。

そして、そんな二人を見ながら寛治は頭を掻く。

食べる人間が増えたお陰で、こうして煮物などを作る口実が出来た。

カレーなどもそうなのだが、やはり煮込む系の料理はたっぷり作つて煮込んだ方が美味しく仕上がる。しかし、一人暮らしではそうもいかない。たっぷり作れば暫く同じものばかりを食べなければならず、単純に飽きる。

その点、こうして二人が食べにくると、色んな料理を作る事が出来て、尚且つ余って料理や食材を捨てる可能性を減らす事が出来る。

なにより、

「む、ニクジャガ、だったか。甘い味付けだが、ご飯が進むな」

「ご飯のお代わりは、二杯までな。お前、食いすぎ」

「やっぱり、寛治君の作るお味噌汁って美味しいわよね。出汁がよく利いてるもの」

こうして誰かと囲む夕飯というのは存外楽しいものであるのだから。美味しいと言ってくれるのなら、猶の事。

かくして夜は更けていく。

違うニオイがする。鼻を鳴らした小猫は首を傾げた。

ここ暫くは、祐斗がピリピリしているからか部活の空気が悪いのだが、だからこそ別の事が気になった。

寛治はいつも通りなのだ。いや、祐斗に関する関心が無い訳では無い、のだがその事を表に出すようなことは無い。

オカルト研究部の面々が大なり小なり気にする中で、その様子は浮く。

そして、小猫が気が付いたのは彼に仄かに感じられたニオイ。

包帯と軟膏のニオイに紛れるように。料理のニオイに紛れるように。それこそ、隣に座るぐらいしなければ気付けないほど微かなニオイ。

一度気付けば気になってしまうのが人の性。

さりげなく部室でも隣に座って鼻を研ぎ澄ませる。

(料理……お醤油？そういうえば、山本さんは一人暮らしで、煮物系はあんまり作らないって言ってたような……?)

前にそんな話になり、寛治も料理レパートリーが足りないと嘆いていた筈なのだ。

気になって更に近づけば、ふと彼の肩の辺りに一本の髪の毛が。

寛治の髪色は典型的な、黒。色彩豊かなオカルト研究部の面々の髪色の中では比較的普通で、その上手入れが悪いのか少しばかりごわついている。

だがしかし、今小猫が見つけたのは、青い髪の毛。

「……山本さん」

「ん？何だよ、塔城。というか、近——」

「この髪の毛、誰のですか？」

指でつまんだ髪の毛を片手に迫ってくる小猫。後に寛治は、夢の中外で一つの選択ミスで死ぬんじゃないかと思っただけのこの時が初めて、と語る。

そんな庄のある小猫に引きながらも、寛治は彼女の突き出してきた

モノを見た。

「……髪の毛?」

「そう言ってます。それで?これは誰のモノですか?」

「誰のって……客?」

いや、違うか?と心の中で続けながらも、寛治はそれを口には出さない。

小猫の見つけた髪の毛は、十中八九ゼノヴィアのもの。しかし、それが分かったからといってポロリと零せば確実に面倒な事になるだろう。

寛治としても、藪蛇は避けたい。故に、適当に言葉を濁す他なかった。

もつとも、

「そのお客さまに、料理を振舞うんですか?」

今回は相手が悪い。

ジツと見上げてくる黄金の瞳が居心地の悪さを助長してくる。心なしか、瞳に宿ったハイライトが消えて、澄んだ濁りと言える暗さを宿しているようにも見えた。

寛治には、この手の女性をいなす経験値も、技能も無い。そもそも、対人能力は人並みの域を出ておらず、落ち着いて見えるのは長年の鍛錬の結果心に波紋が起きにくくなっているから。

そんな彼だからこそ、どうしてここまで小猫が食いついてくるのか分からない。

「まあ、そういう客だったしな。俺としても、煮物とかを久しぶりに食べて得もあつたし」

「むう……女性ですか?」

「ああ」

「むう」

頷けば、更に若干むくれる小猫。

少女の機微を、しかし彼は汲めない。首を傾げるばかりだ。

「そんなに良いもんか?高々家庭料理レベルの腕だぞ?俺自身、料理が特別得手って訳でもない」

「……」

「なんだよ。それでも食いたいのか？」

「はい」

半ば食い気味に返事をする小猫に、寛治は片方の眉を上げて変な表情を浮かべた。

しかし、突っ込まない。料理程度ならば別に苦ではないし、一人分も二人分も料理によってはそう変わらない。

強いて挙げれば、ゼノヴィア達との接触を起こさないように調整する必要がある点か。

「んじゃ、都合のいい時に連絡すればいいか？」

「いえ、こちらのチラシを使いましょう」

「あ？悪魔家業の奴じゃねえか」

「私はいつでも、バッチこいです」

鼻息荒く目を輝かせる小猫は、若干キャラを迷走させながら、強引に寛治へとチラシを握らせた。

変な奴。内心で首を傾げながら、寛治は献立を考える。

このとき彼は、この穏やかな日常的一幕が直ぐにでも遠退く事になるなど、考えもしなかった。

*

日もとつぷりと暮れた夜陰の時。

「……今日は来ないもんだと思ってたがな？」

「すまん……」

夢の中でシバかれていた寛治は、喉の渇きと共にいつたん鍛錬を中止してもらい、水を飲みに起きていた。

そんな折に、鳴り響いたインターホン。出向いてみれば、何処か雰囲気の違うゼノヴィアと、それからイリナの二人が居た。

遅い時間の急な来訪。ともすれば、相手によつては激怒されるかも

しれないが、しかし寛治は頭を搔くと玄関の引き戸より僅かに横に避けた。

「まあ、上がれよ。茶ぐらいなら出してやる」

「……良いの？その……来てなんだけど、怒鳴って追い返されても仕方がないと思つてたんだけど」

「確かに、常識的な時間じゃねえわな。でも、俺は別に寝るのが好きな質でもねえし。ちようど起きてもいたんでな」

「そうして三人は、ここ最近よく囲んでいるちやぶ台のある居間へとやつて来る。」

それぞれの前に麦茶の入ったコップが置かれた。

「で？正直なところ、俺は別に話し上手でも聞き上手でもないからな。単刀直入に言ってもらつて良いか」

「そう、だな……」

「……」

胡坐をかいて、左肘を太ももの上について頬杖をついた寛治が促すが、しかしどうにも二人の歯切れは悪い。

彼としては、腹芸などしたくない。相手の考えを推し量つて、言葉を引き出すなど土台無理な話。

「……ねえ、寛治君」

「あ？」

「もしも、貴方が聞いていた話と、本人が違っていたら、どうする？」
「………つまり、なんだ。周りからの噂話に踊らされたって事か？」

「そう、なるのだろうか」

「まあ、どうあれ謝るほかねえだろ。勘違いの結果、相手を責めたんなら、な」

「……」

「なんだよ」

「……魔女だと、聞いていたんだ」

ポツリと、ゼノヴィアは呟く。

「教会を裏切った元聖女。悪魔へと堕ちた魔女。悪魔を癒した裏切者。そう、聞いていたんだ……」

「実物は違った、と？何で急にそんな、懺悔するほど追い込まれてるんだ？」

「目を、見たからだ」

「目？」

「泣きそうな、それでいて深く傷つきながらも誰にも当たらない、そんな目だ」

ゼノヴィアは、お世辞にも頭が良いとは言えない。どちらかと言うと脳筋であるし、直情傾向でもある。

だからこそ、直感的に読み取る面では優れているともいえるだろう。

とはいえ、彼女もその目を見て最初から罪悪感を覚えた訳では無い。ただ胸の内に靄が浮かんでしまった位で。

しかしそれも、時間経過で膨らんでいった。元々考える質ではない為に、溜まった胸の内を解消する方法もろくに知らず。様子がおかしかったことに突っ込まれ、イリナへと愚痴のように零せば彼女にも悩みの種を植えるような形となった。

頼れる者はいない。しかし、胸の内に靄が溜まる。だから二人は、ここに来た。

その一方で寛治もまた、ある程度察する。

二人の言う魔女と言うのは、アーシアの事で。彼女の悪魔に成った経緯もある程度は聞き及んでいたから。

ただ、二人が教会でアーシアに関する悪感情ともいえる情報を植え付けられていたのは、無理も無いかと欠伸を噛み殺しながら思っていたりもする。

寛治自身に組織運営のノウハウは無いが、しかし学校の授業などを受けていれば自然と分かるものもある。

その一つが、共通の敵をもつて団結を強めるというもの。敵の敵が居れば、自然と仲が悪くともその敵を潰すまでは結託できる。

つまりは、ある種の目的意識の共有。眼前に、明確にぶつける対象があると、人は自然と集まって叩くのだ。

寛治は頭を搔く。彼女らのモヤモヤに関しては簡単だ。罪悪感が

淀んでいるのだから。その解消となれば、それはもう相手に謝るしかない。許してもらおう、貰わない関係なく。

だがしかし、彼女らは年若くとも立場ある人間でもある。そんな人間がおいそれと表面上は停戦状態でも、裏ではバッチバチにやり合っている悪魔に頭を下げたと成れば、戻った後にどういう処遇を受けるかも分からない。

立場があると上で書いたが、ぶつちやけ二人は鉄砲玉のような扱いであるので。

とにかく、

「……まあ、まずは任務を終わらせろよ。ンで、身軽になった所で改めて話し合えばいいんじゃないかねえの？」

結構投槍ではあるが、しかし現状それしかない。ついでに、眠るのはそれほど好きではないと言いながらも、生理的欲求の眠気が再度襲ってきても居た。

そして、この日を境に運命はさらに加速する。

その日は雨が降る、少し肌寒い日だった。

「……」

木場祐斗は一人、雨の中で濡れる事も厭わずに町内を徘徊していた。

常ならば穏やかな微笑がうかがえるその表情は、宛ら手負いの獣のようで、しかしその心に渦巻く仄暗い黒い炎は瞳をギラギラと暗い色に輝かせる。

彼が木場祐斗としての名を得る前、そこは端的に言えば地獄だった。

個人と言う単位であっても、人と言うのは誰にも見せられない、或いは見せたくない部分というものがある。それが大きな組織ともなれば、そこは暗部と呼ばれ、表面上には決して現れる事のない面だろう。

そこで生まれた罪悪感を、彼は抱えて生きてきた。

たった一人生き残ってしまったという事実と、聖剣への憎悪を一緒にくたにして。

そして、今回。一誠宅にて聖剣の存在を掘り起こされ、その上で教会勢力との対談における手合わせの敗北。

精彩を欠いていた。本来なら、それこそフェニックスとのレーティングゲームの際の実力を発揮できたのなら、決して勝てない相手ではなかった。

それでも、敗北は敗北。同時に、自分の事が彼自身分からなくなつた。

当ても無く、ただ只管に歩き回る。

幽鬼のように、或いは亡者のように。

そんな猫背で道路ばかりを見つめて歩く祐斗の視界に靴が割り込んできた。同時に、濡れる感覚が途絶え、雨が遮られる音がする。

「どうも、木場先輩。濡れ鼠っすね」

「……山本君」

顔を上げれば、うなじを左手で撫でる後輩の姿があった。

「まあ、一旦濡れた服をどうにかしないと。風邪ひきますよ」

「……てくれ」

「はい？」

「……放っておいてくれないか」

「ああ、それは無理っすね」

静かに睨み上げるように囁く祐斗に対して、寛治はあつけられかんと言い切った。

そも、寛治とてこの雨の中祐斗を探していたのだ。放っておくと本人に言われて、はいそうですかと引き下がる訳にはいかない。

「先輩がどんな事情を抱えているのかは、知らねえっすよ。詳しくは聞かなかったんで。まあ、今のアンタが何かを成せるとは思いませんけど」

これまたアツサリと言い切った寛治。だが、今の祐斗にはその言葉を呑み下せるだけの余裕が無かった。

カツと視界が赤くなり、ほとんど反射的に目の前の胸ぐらを掴んで詰め寄っていた。同時に、寛治の持っていた傘も弾かれ、再び雨が襲ってくる。

「ッ、君に何が……！」

「だから知りませんって。ただ俺は、現状の先輩を見た上で自分の情報と照らし合わせてるだけです」

「……」

「はあ……先輩の強みは、速度と、それから神器の多様性じゃないっすか。これを活かすには、冷静な判断力が必須。でも、今の先輩はハッキリ言って目が曇ってる。頭も冷静じゃない。そんな状態じゃ、勝てる勝負を落とすのも寧ろしようがないんじゃないですかね？」

淡々と、寛治は自分の所見を語る。

彼は、祐斗の実力をよく知っている。ぶつくさ言いながらも、確りと師匠筋の人間としての役目を果たしていたから。

目を見て、真っすぐに言葉をぶつけられた祐斗は息を詰まらせる。

頭に血が上った人間を宥めるのに、淡々と事実をぶつける事も意外に効果的。ただし、その時にはちゃんと目を合わせて、相手が激昂しようとも決して逸らしてはいけない。

雨に濡れ続ける二人だが、胸ぐらを掴んでいた祐斗の手から若干力が抜けた。

「……僕は、聖剣への復讐のために生きてきた」
「……」

「オカルト研究部の皆と居るのは、楽しかったよ。それこそ、この復讐心を遠ざけるような感覚もあったから……でも」

祐斗にとつてみれば、ソレは複雑な心境だったのだろう。

たった一人生き残って、その復讐のために生きてきたつもりだった。

しかし、リアスと出会い、彼女の眷属となつて、そして今のオカルト研究部のメンバーと出会い深めてきた交流が彼の心を揺らす。

元来、優しい性格であった事もまた、その葛藤を生んでいたのだろう。

泣きそうな、迷子の子供のような表情になる祐斗に、寛治は頭を掻いた。

「まあ……まずは、その矛先を変えれば良いんじゃないっすかね」
「え……」

予想外の言葉に、祐斗の顔が上がる。

「聖剣への復讐。自分達を苦しめた元凶を恨むのは、まあ分かります。いや、経験はないんであくまでも想像の範囲でしかありませんけど。ただ、聖剣だなんだと持て囃されても、詰まる所の剣、要は道具ではない訳だ。ここまで、良いですか？」

「……」

「んで、道具を使うのは人間だ。先輩、アンタが恨むべきは聖剣じゃなかった。貴方が見据えるべきだったのは、自分たちを虐げた人間たちだ。そうであったのなら、もう少し冷静な対応が出来たんじゃないかと、俺は思いますけどね」

聖剣に対する復讐、ではなく聖剣に対する嫌悪感であったのなら祐

斗はここまで一人で突つ走る事は無かつただろう、と寛治は考える。彼にしてみれば、聖剣も魔剣も、それこそ名刀であろうと妖刀であろうとも、どんな伝説的な武器であっても、結局のところ道具でしかない。

そして、道具とは使うものだ。それ以上でも、以下でもなく。

寛治の言葉に、祐斗は目を見開く。しかし同時に、言われてみれば成程と頷けるものでもあった。

聖剣は担い手を選ぼうとも結局のところ、道具でしかない。そして、その性質含めて悪用しようとするのは、いつだって人間の方だった。

呆然と手を下した祐斗。とりあえず止まったかと判断して、寛治は飛んだ傘を回収しようとして、そこで気付く。

誰かが近づいてくる。この雨の中、確りとした足取りで、妙な物を携えて。

「おやおやおやあ？これはこれは、そこに居るのは悪魔くんじゃありませんかねえ？」

「フリード……」

「それからそっちは……ああ！あの、雑魚をぶっ殺した人間ちゃん！……キチガイか」

現れたのは、狂気を纏ったはぐれのエクソシスト。

フリード・セルゼン。過去には、アジアを狙った墮天使の下で悪魔狩りを行っていた。

そんな男が今、二人の前に居る。三振りの聖剣を携えて。

「いやー、旦那たちは何やら準備してるし、俺ちゃん暇な訳ヨ。で、色々と見て回ってただけどき。ちよーどしけこんじゃってるのが居るじゃん？みたいな？ツツー訳で遊ぼうぜ？」

ニヤニヤとフリードは、その右手にある天閃エクスカリバー！ラビッドリイの聖剣の切っ先を二人へと向けてくる。

聖剣エクスカリバー。恐らく、世界的に見ても最も有名ともいえるかもしれない聖剣の一振り。

しかし、現在残っているエクスカリバーは、過去の大戦において折

れてしまい、破片となってそれらを核として錬金術により七つに能力を分割したオリジナルには程遠いものとなっていた。

とはいえ、聖剣は聖剣。悪魔などの魔に類する存在に対しては特攻も同然であるし、現状の祐斗は好調どころか、絶不調も良いところ。という訳で、相手をするのは寛治になる。

「……俺としては、帰りたいんだが？」

「まあまあそう言うなって！死にたくなったら、やさしくぶっ殺してやるから、さっ！」

消えた。そう称せるほどの、踏み込みと速度。

天閃の聖剣。その効果は持ち主の速度を上げるといふシンプルな物。だが、シンプルな能力であるがゆえに癖が無く、使いやすいものでもあった。

雨の降る中、かすかに聞こえる風を切る音。騎士の駒によって速度に特化した祐斗には、フリードの姿は僅かにしか追えていない。

そして、その事をフリードも理解していた。

この聖剣を使っている状態の自分は、並大抵の相手には捉えられない。遊ぶとは言ったが、しかしだからと言って遊び相手が二人必要な訳では無いのだ。

（あつちの人間ちゃんをチョンパすれば、悪魔キユンも向かってくるだろうねえ）

脳内でそんな事を考えながら、フリードが狙うのは、寛治。

脳天から股下迄真っ二つにする勢いで聖剣が振り下ろされ、

「——んな、鈍らで切れる訳ねえだろ」

その刃を素手で受け止められていた。

寛治にしてみれば、祐斗の高速移動も、フリードの高速移動も、団栗の背比べ、或いは五十歩百歩でしかない。

そして、如何に聖剣だ何だと持て囃されていようとも、現状その実態は弱体化した二流品。

速度も見切れる、刃も霊圧を込めた素手で受け止められる。

このままへし折ってやろうか、とも考えたがゼノヴィア達の顔が脳裏を過ってこれをキャンセル。

あつた部分を通り抜ける。

「良い勘してるな。当たれば、首位はポーンと行つただけだ」

振り上げていた右足を戻しながら、あつけらかと寛治は語る。

鞭のような、と評せるような蹴り。その爪先を固く纏める事で、先端に重量を加えてその威力は人間一人蹴り殺して余りある。

兎にも角にも、二振りの聖剣が寛治の手に渡った。

その二振りを右手に纏めて逆手に持ち、道路へと突き立てる。

「さて、その腰の後ろのもう一振りを寄こすってんなら、命はとらないでやるよ」

傲慢な物言いだだが、寛治としては事がこれ以上荒立たないのならそれが一番良いのだ。好き好んで命を奪うのも趣味ではない、というのもある。

一方で、フリードもまた冷静にこの場を考えていた。

戦力を測り違えた、というのもあるがそれ以上に聖剣を奪い返されたのが不味い。ここでおめおめと三振り目を献上して逃げ帰ったとしても、殺されるのが落ち。

であるのなら、取り返す事がベスト。出来るかどうかは別として。

雨は、徐々に弱くなり始めている。空の雲は薄くなり、僅かに夜空の色が見え始めていた。

そして、黒い翼を背負うものが現れる。

「何を遊んでいる、フリード」

雨の収まった空に現れる、十の黒い翼を背負った一人の男。

だが、その出現よりも、その男が片手に握るものに対して、寛治はその目を細める。

「大ボス登場、か。とりあえず、紫藤を返してもらえるか？」

濡れた髪をかき上げながら、寛治は睨む。

現れた男の腕の中には、ボロボロになったイリナの姿があつた。

何があつたのか一目瞭然。辛うじて生きている事は分かるが、だからといって知り合いをボロカスにされて何も思わないほど寛治はドライではなかつた。

だが、翼の男はこれを見無視。

「さつさと戻るぞ。統合の式は既に終えている」
それだけを言い、彼はイリナをまるでゴミでも放る様に投げ捨てる。

咄嗟に寛治がキャッチするが、彼女の口からは僅かな呻き声が漏れただけで目を覚ます様子も無い。

分が悪い。翼の男含めて、倒せない訳では無いだろうが、しかし現状この場は住宅街。

周囲への配慮に加えて、戦えるかも怪しい祐斗とイリナを守りながら立ち回らなければならない。

少しの逡巡を挟んで、寛治はイリナを右肩に担ぎ上げ、同時に祐斗を左の小脇に抱え上げた。

そして、その姿は掻き消える。

聖剣をその場に残して。

「……ふう……こんな所か」

どうにか山を越えて、寛治は額に流れた汗を拭って息を吐き出した。

濡れた服から黒いジャージへと着替えた彼の前では、居間に敷かれた布団に寝かされるイリナの姿があった。

聖剣（C）よりも人の命を取った雨の時間。小脇に抱えた祐斗に関しては、探知能力で探したりアスの元へと送り届け、彼女らからの追及が始まる前に逃げ出していたりする。

その足で自宅へと戻り、びしょ濡れの体もそのままにまず最初に始めたのがイリナの治療。

幸い、体を欠損するような大怪我を負っていないかった為、彼の回道でもなんとか治療が可能であった事は救いだらうか。

ただ、問題は彼女の格好。

教会の戦士として鍛えられた肢体に加えて、女性でも羨むプロポーション。更に、身に纏うのはボディースーツのような戦闘服。破れたソレは、非常に目に毒だった。

とはいえ、その辺りの興味が薄い寛治としては、困ったのはこの戦闘服の脱がせ方。

四苦八苦して、傷を癒し、しかし完治できなかった場所には、薬と傷に張り付かないガーゼ、それから包帯を巻き、布団に寝かせて漸く一息。

後で謝ろう、何て考えながら寛治が思い出すのは、件の黒い羽根の男。

勝てるか勝てないか、で答えるなら十中八九勝てる。強い事には強いのだが、何とか中途半端な強さであったから。

一定のレベルには快勝。そして、格上には決して届かない。そんな、ある意味では頭打ちしてしまっているのであらう実力。

問題があるとすれば、その頭打ちした実力だろうとも彼の現状の知り合いでは敵わないであらう事が明らかかな点。

つまり、寛治が相手をしなければならぬ、のだが、

「俺が斬っても良いもんかね」

眠るイリナの傍らで胡坐をかいて座り、頬杖をついて呟く寛治。

物事には、道理というものがある。

今回の場合、かの墮天使を討伐、ないしは撃退すべきは教会の勢力だろう。彼らが喧嘩を売られた訳でもあるし。

なにより、

「目的が分からねえよ」

何のために聖剣を狙ったのか。そもそも、寛治には情報が無すぎ

る。
彼にとってみれば、分裂したエクスカリバーは二流品だ。しかし、教会などにとっては象徴として申し分なく、だからこそ奪われた故に聖剣使いの教会の戦士二人を送り込んだ。焼け石に水も良いところだが。

では、なぜ墮天使が聖剣を奪ったのか。

聖剣に興味があったから。傲慢な墮天使が誰かに頭を下げる事を良しとする筈も無い為、強奪が選択肢の頭に来るのはおかしくない。

聖剣を使いたかったから。しかし、聖剣は剣そのものが担い手を選ぶ。そして担い手でなければ扱えない。

そも、何故この駒王町に来たのかも謎。

この町に関していえば、悪魔が管理（）している土地。そして一応の管理者はリアスという事になっている。

「……あ……喧嘩売ってる、とかか。いやいや、無理だろ」

自分で答えを出して、それをまた否定する。

何故なら、かの墮天使は自分山本寛治よりも弱いものだから。感覚的な話だ

が、恐らくグレイフィアにも敗れる程度。それはつまり、彼女の夫であり王でもある、魔王にも勝てる見込みはほぼゼロである事に他ならない。

もしも仮に、聖剣を振るえる墮天使になったとしても、恐らくこの結果は変わらないと寛治は考える。精々がグレイフィアに勝って、そして魔王に瞬殺されるのが関の山。

しかし、だ。自分の答えを否定し、ついでに下がってきた瞼と格闘しながら、頭の隅で寛治は考える。

力の差だとか、組織の立場だとか、それら一切合切をかなぐり捨てても為したいことがあったとすればどうだろうか。

ぼんやりとした頭はそれ以上の思考を許してくれず、寛治の意識は闇に飲まれる。

*

—— 弛んでおるな

*

「ッ!？」

沈んでいた意識が一気に覚醒してくる。ついでに、浮かび上がった意識に引つ張られるようにして体が大きく跳ねた。

荒れる息と、時計の秒針が刻む一定のリズムが部屋に響く。

「……………くっそ爺が……………」

悪態を吐いて、額を拭えばじつとりとした脂汗が変えたばかりの包帯に染みを作った。時計を見れば、最後に見た時から三十分と経っていない。

その短時間で、胡蝶の夢と思える程度にぶつ飛ばされ、斬り飛ばされ、焼き尽され、そしてこうして夢から叩きだされての強制覚醒。

罵りたくもなるが、しかし割とザルな感知能力に反応があればその言葉も喉の奥にしまわなければならない。

「大きな戦闘、か?……………いや、虐殺か」

布団の中に手を突っ込んでイリナの手首に触れ脈を測った寛治は、その手を下すと徐に立ち上がる。

この町で大規模に行われる可能性がある戦闘など、現状一つしか思い浮かばないからだ。

最悪の可能性を頭から排しながら、寛治は玄関から出て空へと一足に飛び出していく。

戦場となっているのは、駒王学園。いや、その言葉は既に正しくないかもしれない。

「質は申し分ない……が、所詮は子供か。どれだけ得物が優れていようとも、使い手が未熟では話にならない」

自身の前に倒れ伏した者たちを睥睨し、堕天使幹部コカビエルは嘲笑う。

彼は、同族にすらも引かれる戦闘狂、或いは戦争狂だった。当人も堕天使の中では武闘派であり、十の黒い翼を持つ聖書にも記された存在。

その目的は、闘争の火種に油を注ぐ事。

現状、三大勢力と称される悪魔、天界、堕天使だが、過去に大きな戦争を経験している。その結果として、悪魔勢力は転生アイテムである悪魔の駒を造り、その駒がまた別の問題を呼び込んでいたりもするのだが、それは今は割愛。

コカビエルは、戦争狂だ。戦いたくて戦いたくて、仕方がない。

そして、現在の裏でバツバチであろうとも表立って争う事の出来ない平和な時間（仮）は受け入れられなかった。

だから、一計を案じた。

過去の大戦から、教会勢力における聖剣の存在価値を知っていた彼は、甘言で引き入れた部下を用いてそれらを強奪した。

当然、教会側は取り返そうと刺客を送り込むであろう事も想定済み。

それらとの戦闘も娯楽の一つではあったが、この町に来たのはもつと別の事。

「現魔王の妹。お前に恨みはない、がコレも俺の目的のためだ」

コカビエルの狙いは、リアス、或いは蒼那のどちらかであった。発言の通り、彼女らに恨みはない。無いが、しかし計画の為の歯車の一つとして見るならば、これ以上ないほどに便利な存在だった。

悪魔陣営に彼が自ら攻撃を仕掛けようとも、ソレは戦争の引鉄にはなりにくい。精々が、小競り合い程度で抑え込まれる可能性が高い。

だがしかし、悪魔側の現トップ。つまりは、魔王の大切な物を彼が手に掛けたならばどうだろうか。

コカビエルだけを滅するだろうか？否、人だろうと悪魔だろうと、恨み辛みというのはその矛先を大きく向ける。

それが、深い身内愛を持つグレモリー家出身の者ならば猶の事。怒りと憎しみで裏返った愛情が、墮天使という種族に対する殺意として向けられる可能性も低くはない。

そして、種族単位の絶滅に瀕するのならば、如何に戦争に消極的な者でも、応戦する。

その先に待つのは、最悪の戦争だ。憎しみの火はそう簡単に消えない為に、今度こそ種族毎の絶滅戦争になりかねない。

自身の計画が実を結び、戦争が始まる。

血沸き肉踊り、血と泥の二オイのが嗅覚を侵す戦場がもうじき訪れる。

考えるだけでも、コカビエルの口角は醜悪に歪んだ。

「さあ、幕引きと行こう。そして、大戦の口火としようか」

そう言っつて、コカビエルの右手が肩の高さまで持ち上げられ、空中を掴む様に動いた。直後、鈍い光と共に光によって構成された槍がその手に現れる。

天使の基本能力であると同時に、その天使より墮ちた存在である墮天使もまた扱える能力。

下級であろうとも、その光を扱う能力は悪魔にとって致命的だ。

それが墮天使幹部、それも戦闘に特化した物であるのなら、その破壊力は推して知るべし。

右腕が引き絞られ、破滅の一投が今まさに解き放たれ——

「ッ!？」

突然の地鳴りのような重圧と、肌が泡立つ感覚にコカビエルは襲われていた。

反射的に槍の投擲をキャンセル。手元へと引き戻して構え、その頬には滲む様に冷や汗が流れていく。

果たして、コカビエルの目の前、倒れた者達との間に誰かが下りてくる。

夜陰に紛れる黒いジャージ。前が開けられた上着の下には何も着ておらず、鍛え上げられた腹筋が陰影を刻んでいた。

「つと……まあ、セーフか？いや、アウトでも誰も死んでないのなら、まあ、うん」

緊迫していた筈の場に相応しくない、どこか抜けた様な声。

それでも、その背中を見た者たちの中で、彼の実力を知る者は自然と安堵の息を吐いていた。

乱入者、山本寛治は改めて、コカビエルと向かい合う。

「……貴様、人間か」

「ああ、人間だよ」

問い、答える。しかし、コカビエルはその言葉を到底受け入れる事は出来なかった。

先を感じた威圧感。それは、気のせいと捨て置くには余りにも濃密で、そして鮮明に刻み込まれていた。

しかし、その威圧感の主が人間。墮天使としての高いプライドを持つコカビエルにとって、そんな人間に冷や汗を掻かされたなど恥もいところだ。

時にプライドは恐怖を踏み潰す。震えを怒りのせいであると無理矢理にでも自分を納得させ、その手の槍を回転。逆手に穂先が小指の方に来るように握り、思いつき振り被る。

投て――

「――んな危ないもの、塔城たちの方に投げようとするんじゃないねえよ」

「なあっ……!?馬鹿な、素手で……!?」

振り被った腕が、槍を投擲する前に、寛治はコカビエルの眼前に居

た。

そして、今この瞬間にも投げられそうだった光の槍、その穂先を真正面から左手一本で掴んで止めているではないか。

無理矢理に押し留められた光が、ガラスをひっかくような甲高い音と、鈍く金属が軋み合う様な不協和音を立てて震える。

その光景にココビエルは目を見開き、同時に光を操る精度が若干鈍った。

瞬間、光の槍は握り潰される。同時に、握られた左拳が空を切り裂きココビエルの右の頬をフックの軌道で強かに捉え、その体を勢いよく殴り飛ばす。

グラウンドを数度跳ねて、体を汚しながら転がるココビエルを尻目に寛治はというと、槍を握り潰した左手を見ていた。

「ありや、さつき変えたんだけど……ちつと焦げたな。勿体ない」

彼の言葉通り、その掌は黒ずんでいる。それでも、包帯が焼け焦げて外れる様子も無く、その下の皮膚にまで光の破壊力が届いていない事を示していた。

この間に、ココビエルは膝をつくところまで姿勢を立て直している。

その顔にはくつきりと殴打の痕が残っており、口の中が切れたのか口角の辺りから血も流れていた。

(何が、起きた……)

口の端から流れる血を拭って、ココビエルの頭は混乱の中にある。

墮天使幹部である己を震え上がらせるような威圧に加えて、真正面から光の槍を素手で受け止め、尚且つ握り潰し、そして殴り飛ばされた。

ただの人間に。

「……ありえるものか……ッ！」

地の底から響くような低い声が、ココビエルの口から零れ落ちる。

人、でなくともプライドの高い者というのは、周りを受け入れる素地が無い場合がある。

これは、彼らの心が狭いとか、頭の柔軟性が足りないとかだけでは

なく、無意識の内の自己防衛反応が働いているから、という場合がある。

受け入れたら壊れてしまうから。どれだけ肉体が傷ついても立ち上がる者であっても、心がへし折れれば簡単に再起不能になったりする。

今のコカビエルの精神状態は、レーティングゲーム時のライザー・フェニックスに近いかもしれない。

尤も、後者の場合は、相手の力を受け入れ、自分の未熟さを受け入れ、それでも立ち向かうという結果を齎したが。因みに、ライザーが受け入れられたのは、彼の心の奥底に上二人の兄に対する劣等感のよな物を無意識の内に抱えていた為だろう。

現実逃避をするコカビエルを前にして、寛治は頭を掻いた。

というのも、寛治が先程の光の槍を態々接近して迄握り潰したのは、彼の後ろに小猫含めた知り合いたちが地に臥せていたからだ。回避は却下。迎撃しか選択肢が無かったのだが、不用意に弾いて別の場所を傷つけるのもNG。

という訳で一気に距離を詰めて握り潰した。仮に爆発しても、被害が出るのは自分と相手だけとするために。

なにより、この場が不味い。

駒王学園なのだ。大きく破壊する訳にもいかず、かといって今この場所を覆っている結果は、お世辞にも魔王クラスの力は無い。なんせ、寛治が上からすり抜けても特別反応しなかったのだから。

そんな場所で斬魄刀は使えない。封印状態でも不用意に傷を作りたいとも思わない。

という訳で、

「俺が、人間ごときに後れを取るも——」

「隙だらけだ——『一骨』」

アッパー気味のボディブローがコカビエルの胴へとめり込み、その体を軋ませる。

下から上への軌道で放たれた拳だ。当然ながら、食らった相手は上へと吹き飛ばされる事になるだろう。

例に漏れず、胃液を吐き出しながら斜め上の空中に吹き飛ばされるコカビエル。そこに、寛治は左手を彼へと向けた。

「――『縛道の三十七 吊星』」

掲げられた左手より走った編まれた霊力は、地面や結界の内側を支点として五つの線が伸びた蜘蛛の巣のような物へとその姿を変える。そこに、吹き飛んでいたコカビエルはぶつかつた。ハンモックのように揺れるソレは、衝撃という観点では欠片もダメージは無い事だろう。

半ば大の字で張り付けられるようにして、吊星に収まったコカビエル。とはいえ、拘束されている訳では無い為、直ぐにでも反撃しようと目を開け、

「――『縛道の三十 嘴突三閃』」

空中に立つ寛治が、霊力で編み上げられた三つの嘴を差し向けてくる瞬間を見ることになる。

両肩、そして胴。そこを嘴に留められ、コカビエルは、吊星に本当に磔にされる形となっていた。

だが、まだ終わりではない。左手で組んだ刀印を寛治は目標へと向けているのだから。

「――『縛道の六十三 鎖条鎖縛』」

人差し指と中指から飛び出すのは、霊力で編まれた鎖。それが磔のコカビエルへと伸びてその体をがんじがらめに縛りあげる。

「ぐっ、おお……こ、んなもの……!!!」

「ああ、無理だ無理。一つでもたぶん抜けられないのに、二つ重ねてんだ。アンタじや無理だ」

「ふざけるな……俺は、墮天使幹部だぞ!? 高々、人間ごときの術で、この俺を留められるものか!!!」

「……まあ、それでも良いさ。残念ながら解けないのが、現実で。アンタは抜け出せない」

空中を歩いて、唾を飛ばすコカビエルへと近づいた寛治は、額に手を当てて緩く首を振る。

血走った目が、激情に駆られた顔が、茹った頭が、冷静になる事を

許さない。明らかに冷静ではないのだから。

当然だ。今のコカビエルは、精神がへし折れる瀬戸際にあつた。そして、折れたくないからこそ、怒りによつて無理やりにも自分を鼓舞して啖呵を切るのだ。

しかしそれは、決して高尚なものではない。

言うなれば、逃げ。怯えによる恐怖と怒りの、錯誤。

ここまできると、言葉による説得は不可能だ。それも、追い込んでいる側ならば猶の事。

ため息を吐き、寛治は数歩距離を取った。

「殺しはしないさ。アンタは活かして、ゼノヴィア達に引き渡さなきゃならないからな。でも、グレモリー先輩に手を出したんだ。その庇護下の人間として、半殺し位なら許されるだろ」

掲げられるのは右手で組んだ刀印。

「『滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器 湧きあがり・否定し痺れ・瞬き 眠りを妨げる——』」

いつぞやの時にも行つた詠唱。しかし、今回はその長さが違う。

「——爬行する鉄の王女 絶えず自壊する泥の人形 結合せよ

反発せよ 地に満ち己の無力を知れ」

それは、練り上げられた力の余波か。まるで周囲の空間そのものが揺らいでいるような圧倒的なまでの圧力の奔流。

「まあ、何だ。威力はキツチリ調整してある。詠唱つてのは、威力を増すだけじゃなくて術の精度にも影響してるんでな——半殺し程度でおさめてやるよ」

ジロリと自分を見る黒い瞳に、ここで漸くコカビエルは現実を目の当たりにした。正確には、頭に上つていた血が、あまりの命の危機に血の気が引くのに合わせて下がったお陰で、確りと目の前の状況を見せつけられた、という所か。

しかし、もう遅い。そもそも、コカビエルの半殺しは、決定事項。

「——『破道の九十 黒棺』」

そして、術は起動する。

磔のコカビエルを中心として黒い直方体状の塊が、何処からともな

く幾つも現れ更に大きな箱を形成していく。

それは縦八メートル、横三メートル程の漆黒の棺桶のようにも見えた。

この棺桶の中では、出鱈目な超重力が渦巻いている。覆われればあらゆる全てが圧壊されてしまう、そんな代物。

とはいえ、先も言ったように寛治にコカビエルを殺すつもりはない。

術の範囲も威力も、完全詠唱でありながら最小限。ぶっちゃけ、本気でぶっ放せば学園諸共飲み込む範囲で黒棺に沈められるかもしれない。

十秒とかからず術の効力は消滅。同時に、ボロ雑巾のようになったコカビエルが重力の奔流で破壊された縛道の残骸と共に落ちていく。酷い有様だ。仰向けで地面に倒れるコカビエル。その両手足は原形を留めないレベルで圧壊されており、背負っていた翼も見るも無残な物。

呼吸にも血が混じり、一息吸うだけでも笛のような甲高いかすれた音がする。

それでも、コカビエルは確かに生きていた。

そこに歩み寄る寛治が、頭の方から覗き込む。

「気分はどうだ？ 堕天使幹部さん？」

「ヒュー……………なぜ、貴様のような存在が居る……………コレも、世界のバランスが……………崩れた、からか……………」

「あ？ 何の話だよ」

「ありえんのだ……………ただの人間が、神器も無しに……………この俺を、圧倒する、など……………」

「またその話かよ。どうしてこうも、人外ってのは人間を甘く見るんだか。現にこうやって負けてんだろ。世界のバランス云々の話じゃなくて、アンタが弱い。それだけさ」

「……………俺が弱い、か……………っふ……………ふはははははッ！ゲホッ！ッ、はあ……………笑わせてくれるな……………だが、バランスが崩壊しているのは、事実だ……………だからこそ、聖魔剣などというふざけたものが出来上がった」

「だから――」

「貴様は、神を信じるか……?」

「……新書の宗教勧誘なら、間に合ってるが? つか、何でいきなりそんな話を俺に聞かせんだよ」

「ふん……俺を打倒した奴が、そう簡単に潰れては詰まらないからな……それで、どうなんだ?」

「ああ? まあ、信じてはいねえよ。居ないとは思わねえけど」

「くくくつ……ああ、そうだ。神はこの世に実在する。だが、聖書の神は何処にもいない」

「……あ? 聖書って……教会の話か?」

「ああ、そうだ……過去の大戦で、既に死んでいるからだ。初代魔王と同じく、な」

「……で?」

「分からないか?……初代魔王も聖書の神も、それぞれが聖と魔を司る……所謂、均衡の象徴であったわけだ。その両者が消えると、どうなると思う……」

「だから、バランスが崩れたって? でも、それが俺に何の関係がある」
「先程、自分で言っただろう? 魔王の妹の庇護下、だと。お前にその意思が無くとも、三大勢力の一角に組み込まれた訳だ……ゴホッ……ハア……神と魔王を失い、力の衰えた三大勢力。外から狙われないと、本気で思うか……?」

血を吐きながら、コカビエルは嘲う。

彼が戦争を望んだように、世界には平穩無事を否とする者が存在する。

更に、三大勢力、ひいては聖書の神というのは存外他勢力からも少なくない恨みを買っている部分もあり、その辺りから攻め滅ぼされる可能性も少なくない。

そして、戦争となれば力のある者は自然と戦場へと向かう、或いはその者自身が戦場の中心になりかねない。

「精々……踊れ……」

それだけを言い残し、コカビエルは沈黙する。

元々半死半生のような状態で、寧ろここまでペラペラと話せたことの方が最早奇跡なのだ。

言うだけ言って黙った墮天使に、寛治は頭を掻く。

彼だつて分かっている。遅かれ早かれ戦いの場に放り込まれるであろう事位。それを見越してなのか、老人が過激になっている事も無関係ではないかもしれぬ。

もう一つ息を吐き出して、寛治はその場で体ごと振り返る。

「で？アンタは、見てるだけか？」

「気付いていたか」

寛治が声を掛ければ、返ってきた声と、そして目の前に落ちてきた何か。

粉塵が流れて視界が晴れたそこに居たのは、白銀の鎧をまとった誰か。その鎧の見た目は、何処か一誠の疑似的禁手に似ているようにも見える。

「そこまでジロジロ見られてたら、な。何の用だ？」

「そこに転がる男の回収さ……もつとも、今は君と戦いたい、と俺は考えているが」

「パス。アンタと戦う理由は俺には無い。こいつ連れて行くのなら、さっさとしろよ」

殺気すら乗っているのか錯覚する視線を、しかし寛治は受け取らない。

明らかに、コカビエルより強いのだ。そんな相手と、こんな薄紙のような結界の中で戦えば、まず間違いなく学園が倒壊する。それは彼の望むところではない。教会側への受け渡しの為に死守する事も思いついたが、以上の点を考慮して引き下がっていた。

鎧の男も、言いはしても戦える場ではない事を理解しているのか、それ以上の追及は無い。淡々と、気絶したコカビエルを肩に担ぎ上げている。

かくして、騒動は幕を下ろす。

だが、既に争乱への歯車は回り始めていた。

水面下で事は着々と進んでいる。

「ほれ、次じゃ。早う向かって来んか」

「ぜえ……ぜえ……こんの、クソ爺が……！」

荒れる息と疲労に震える足に鞭打って、刀を杖にどうにか立ち上がる。

今日も今日とて夢の中。今回は、斬魄刀の解放、白打、鬼道の何れも禁止した上での斬術オンリーでの鍛錬。

というのも、ここ最近の寛治の現実での戦いは、素手縛り、斬魄刀の解放後一振りのみ、術縛りと刀を抜く事はおろか、そもそも最初から持つて事に臨むことが少なかった。

要するに、鈍つてないだろうなテメエ、という確認作業。

「口ではなく、手を動かせ」

「言われなくても、分かってんよッ!!」

立つと同時に上体を軽く仰け反らせてから放つ、右手一本での突き。威力は、両手に劣るが、不意打ちと速度に関してはモーシヨンの少なさから両手に勝る。

瞬歩も交えた突きは、相手によっては貫かれるまで気付かれないかもしれない。が、老人は突きを切り上げて、返しの振り下ろしによる迎撃。

体勢は崩れた。普通はここで、回避と姿勢を整える為に退避するところなのだろう。

「ッ!!」

跳ね上げられた右腕が、傍から見ても分かるほどに力が籠められ柄が軋む。

食いしばられた歯と見開かれた目。上体が前へと倒れながらも、圧縮された時間を使って振り下ろしをダメージ最小限で躲せるであろう場所へと導いていく。

技もへつたくれも無い力任せの振り下ろし。だが、上へと跳ね上げられた刀を腕の筋肉のみならず、肩、胸、そして腰と全身をもって振り下ろしへと軌道を変えた為か、恐ろしい破壊力になっていた。

だが、

「なっ……!?!」

ズレた。振り下ろした寛治の一撃は、老人より僅かにそれてその左側を通って床を思いつきり叩き割る事になる。

一応、老人の振り下ろしも、服から薄皮一枚斬る程度でわずかに血が流れるがそれだけに収まった。

何が起きたのか。右わき腹を貫かれる刹那、寛治は理解する。

「いふっ……ぐっ、爺……振り下ろしに刀合わせて、逸らしやがったな……!」

無理矢理刺された刀を後ろに下がって引き抜き、距離を取った寛治は血を流しながら睨む。

僅かにだが、振り下ろしの際に刀が横に押されるような感覚があった。無論、気のせいと言われればそれまでなほどに僅かな感触だ。

だが、目の前の老人がそれが可能な相手であると寛治は知っている。

右わき腹を抑える左手で回道を施して血だけを止めて、両手で刀を構えなおす。

夢の中で傷を癒す必要があるのかという話だが、ここは特殊な場所だ。火傷も現実に影響しているし、そもそもこちらで鍛えれば鍛えるほどに現実の肉体にもフィードバックされている。

何より、痛みがあるのだから治してある程度の憂いを断つのは当然の事。

鍛錬は続く。目が覚めるその時まで。

*

夏が近づくこの季節。

「暑い……そして、イテエ……」

猫背になりながら、汗を気にしながら、寛治は右の脇腹を擦りつつ道を行く。

刺された傷はやはり深かったらしく、現実では出血こそしていないが、しかしその刺された部分には鬱血したような痕が現れてしまっていた。

押すと痛い、しかし擦る程度ならそこまで問題はない。一応、回道で痛みの緩和はしており、動く事にも支障はない、のだが内臓まで貫かれてトンネルぶち抜かれたせい、違和感が拭えていなかった。本当の所、家でのんびりした方が良いのだ。今日は休日でもあるので。

それでもこの夏日の元、左肩に荷物を提げて道に行くのは相応の理由がある訳で。

軽い足音と共に、白い髪が隣に並ぶ。

「おはようございます、山本さん」

「おはよう、塔城」

「……脇腹が痛いんですか？」

「あ？ああ、まあ、な。大した事ねえよ」

歯切れ悪く言葉を濁す寛治に、小猫はその目を細めた。

直近の戦闘といえば、戦闘ともいえないコカビエル戦。

(何も、出来なかった……)

小猫の脳裏に過るのは、その思い。

強くなったつもりだった。事実、コカビエルが喉けてきたケルベロス等も倒せたのだから。

だが、それだけだ。

どうしても、悪魔の駒としての特性と格闘技だけでは劇的に強くなることは無い。というか、小猫自身小柄である事も相まって下手をすると頭打ちが見えてきた気がしてしまう。

神器を持つ祐斗や一誠がうらやましく思えるのも仕方がない。

どちらも十全に神器を扱えているとは言えない状態であるし、ソレは裏を返せばまだまだ強くなるための余地が有り余っているという

事でもある。

チラリ、と隣を見る。

「……」

少し不機嫌そうに再び右わき腹を撫でる彼は、ハッキリ言つて強すぎた。

体術も、独自の術も、そして己の体に宿した得体のしれない炎を吐き出す刀も。

祐斗の宿した魔剣創造はおろか、一誠の神滅具である赤龍帝の籠手すらも凌駕するかもしれない圧倒的なまでの力。

憧れ――

「ツ―」

そこまで考えた所で、小猫は首を振つた。

強さに思う所があるのは、事実だ。だがしかし、忌まわしい記憶にある彼女と同じ道を辿る事だけは絶対に嫌だった。

振つた頭を戻して、改めて前を見れば今度は逆に不思議そうに寛治が覗き込んできていた。

「俺の心配も良いけどよ。塔城は大丈夫か？急に首振つたりして。虫でも居たか？」

「い、いえ、大丈夫です……」

「そうか？」

「……………私は、強くなりますか？」

本当は言うつもりは無かった言葉が口を吐く。悩んでいたからか、それとも心が弱っていたからか。

ポロリと零れた言葉に、寛治は眉を動かすと、覗き込んでいた上体を起こして前を見直した。

即答しない、というよりも何かを考えている様子だ。

彼も、小猫が伸び悩んでいる事は知っている。朝であれ放課後であれ、グレモリー眷属の鍛錬を監督しているのだから。特に近接戦闘ならば、猶の事。

その上で評価を下すなら、小猫にはもう一押し欲しいところ。

体格や筋力量などは、時間がある程度解決してくれる。しかし、潜

在能力などに関しては何だ。個人差はあれどもある程度初期値で決まってしまう。因みに、彼の知る中で才能その他の最低値は一誠だ。それでもある程度の強敵と戦える辺り、神滅具という存在のチートっぷりがよく分かる。

その上で、寛治は紡ぐ。

「さあ、な。それは、塔城の心持次第だろう。強くなりたいと思うのは、戦う場に居る奴なら自然と持つてるもんだ。ただ、な。どれだけ強くなりたいと願っても、祈っても、思うだけじゃ強くはならねえ。鍛えて、鍛えて、鍛えて、鍛えつくして。それでも自分の思う強さにまで手が届かないことだって珍しくないだろうしな。努力は裏切らない、何てのは綺麗事だ。周りに褒め称えられても、尊敬されても、結局のところ自分の思い浮かべる領域に手が届かないのなら空しくなるからな」

まあ、俺は別に戦い大好きじゃねえけど、と寛治は内心で自分の言葉をひっくり返す。

ここが小猫と寛治の違いだろう。

自発的に強くなりたい少女と、必要に駆られて結果強くなった少年。

どうしても、その立ち位置には、そして「強さ」という不定形で曖昧な物に対する憧れには、差が出てしまっていた。

この差が、後々にちよつとした騒動の火種となってしまうのだが、この時は寛治もそして小猫も知る由も無い。

そうこうしている間に、二人が辿り着くのは駒王学園。

休日であるこの日に態々来たのにも相応の理由がある。

「あつ、来たわね小猫、カンジ」

「おはようございます、部長」

「どうもつす、先輩」

出迎えたりアス。二人が辿り着いたのは、部室、ではなく駒王学園のプールである。

「にしても、オカ研だけでプール掃除はどうなんですかね？使用可能とはいえ」

「二応、建前としては合宿の時の補填よ。申請したとはいっても、二週間も空けたんだもの……まあ、私が原因の手前、強くは言えないのだけれど」

「あ……ああ、いや、それは気にしてないっす。本当に」

藪蛇だった、と寛治は頭を掻き、そんな彼の脇腹を小猫は小突いた。実際問題、リアスの婚約者問題に対して文句のあるオカ研メンバーは居ない。眷属たちは当然として、寛治自身もソレは同じく。

だからといって、リアスが気にしていない訳では無い。彼女は優しい少女であるので。

若干沈んだ空気に、参ったと頭を掻く寛治。何か流れを変えようと話題を探すが、元来会話大好きなタイプでもない彼に話題などすぐさま浮かびはしない。

しびれを切らした小猫が口を開く——といった所で、不意に背後に気配が。

「楽しそうだな、カンジ」

「うおっ……ゼノヴィア？」

後ろから首元に抱き着くようにして細い腕が回される。固い背中、柔らかな双丘が形を変えるものの、押し付けられた彼の表情に変化はない。

その事に若干の不満を覚えながらも、ゼノヴィアは離れない。

彼女は、悪魔となった。その経緯は、殆ど事故の様なものだが。

発端はコカビエルの一件。寛治に敗れた、彼の発言を断片的にだが、彼女は聞いてしまい、居ても立っても居られずに上層部への疑問として聞いてしまい、そして破門となった。

彼女自身には、瑕疵はない。猪突猛進な嫌いがあるうとも、敬虔な信徒だったのだから。だからこそ、“神の不在”を質さねば納得できなかつた。

この折に、イリナと半ば喧嘩別れの様な形になってしまったのだが、今日にいたるまで話し合いの目途はたっていない。

そんな彼女は今、駒王学園の二年生として籍を置いている。年齢的なものもあつての転入なのだが、その折の拠点は、何と寛治の家、の

直ぐ近く。流石に、同棲とはいかなかった。彼女は、厄介になる気だったようだ。

「もう少し動揺しても良いのではないか？」

「何だ？襲えっつてか？」

「それも、良いな。私は、強い者が欲しい」

「オープンにし過ぎだろ……」

今までの禁欲生活から一転、悪魔に成ったせいかわ女は実に欲望をオープンに曝け出すようになった。その矛先は、彼女の目の前で強大な力を行使した寛治に向く。

寛治としては、そんな彼女を邪険に扱うことは無い。が、だからといって実際に手を出すような事もしない。これに関しては彼自身の興味の問題。

しかし、当人が気にしていないと言っても、周りがそういう訳では無い。

「……ん？」

不意に、服の裾が引かれる。

視線を動かせば、そっぽ向いた小猫が服の裾を掴まんでいた。

彼女から見て、ゼノヴィアと寛治はかなり気安い関係に見える。事実、顔見知りの年上の内、ため口で彼が話すのはゼノヴィアとイリナ位のもの。敵対関係の相手に関しては、割愛。

更に、ゼノヴィアは悪魔に成ってからも、何かと寛治の家にお世話になっている。具体的には、夕飯など。

その他にも、一誠の鍛錬に彼女も付いて行って、鍛錬もしている。要するに、嫉妬。

「塔城？」

「……何ですか？」

「いや……まあ、良いか」

寛治は、人の機微に鈍い。そもそも、色恋沙汰に関して興味が無いのだから、相手からの矢印に関しても、気付かない。

気付かないが、今回は何となく必要以上に言葉を連ねるのは止めた方が良いでしょう、とその口を閉じていた。

暑さの増す、そんな日。
波乱は着々と迫っている。

「ふう……こんな所、か？」

水の滴るデッキブラシを肩に担いで、寛治は一つ息を吐く。

プール掃除は重労働と言えども、だからといってこの程度で音を上げる程温い鍛え方はしていない。

少し離れた所では、一誠がデッキブラシを手に爆走していた。その目に炎を宿して。

「うおおおおおおおッ!!」

彼が全力なのは、ご褒美の為。

火事場の馬鹿力を発揮しているからか、身体的に勝っているはずの寛治よりもより広い範囲を掃除し、磨き上げている辺りエロ根性もなかなか馬鹿にできないものだ。

程なくして、掃除も終わり。水を溜めれば、そこからは自由時間だ。掃除用具を直して、寛治はふと右わき腹へと手を添えた。

痣を消そうと思えば、消せるだろう。ただ、この場で回道を使えば目立って突っ込まれかねない。かといって見咎められてアジアに治療してもらえば、ソレはソレで突っ込まれるだろう。

寛治のポリシーとしても、痛みは教訓であるためそう易々と消す訳にはいかない。

という訳で、

「ん？山本は、上着るんだな。ラッシュユガード、だっけ？」

「まあ、そつすね。近頃の日焼けは怖いっすから。先輩も、皮を剥きたくなけりや、確り準備しとくんすね」

黒のパーカータイプのラッシュユガードを持参した。ついでに両腕の包帯は、外し済み。

昨晩は、斬魄刀解放を行っていない為、赤くはなっているがそれ以外の痕は無い為特に目立たないから。

日差しごときに屈するほどへボではない寛治だが、しかし適当な理由をでっちあげれば、無理矢理脱がせようとする者は、この場には居ない。

女性陣と比べて手早く着替えを済ませた男性陣はプールサイドに向かう。

「……」

「なにソワソワしてるんすか。もう少し落ち着いてくださいよ、兵藤先輩」

「うえっ?! い、いや、落ち着いてる! 落ち着いてるぞ俺は!」

「鼻の下伸ばして何言ってるんすか」

じつとりとした視線を向けられるが、しかし一誠は落ち着かない。

彼はこの瞬間の為に、頑張ったのだから。

説得は無理だと思ったのか寛治は、頭を掻くと祐斗へと水を向ける。

「木場先輩。先輩の同級生つすよ。何とかしてください」

「あはは……無理かな? それに、君の先輩でもあるよ、山本君」

「脂肪に顔埋めて、くたばっちゃまえば治りますかね?」

中々物騒な事を言う後輩に、一誠は背筋を震わせる。

彼としては、理想的な死に方かもしれないが、しかし情けなさという点で言えば相当なものとなるだろう。

「おおい!? だって、おっぱいだぞ!? 男の夢だろ!」

「夢だろうが何だろうが、結局行きつくところは脂肪つすよ。ぶっちゃけ、おっさんの腹と変わらな——」

「それ以上言うなッ!! おっぱいには……! おっぱいには、夢と希望とエロスが詰まってんだよ!!」

熱弁する一誠だが、彼と後の二人の間には埋めようのない溝があった。いや、決別とかそういう訳では無いが、しかしエロ坊主とある程度の良識のある者では仕方がない隙間だ。

舌鋒鋭く、如何にそれらが素晴らしいのかを語る一誠。流されているのはいつも通りと言って良いのか。

程なくして、寛治がふとプールの入口の方へと顔を向ける。

「来ましたよ、兵藤先輩。お待ちかねの方々が」

「親指で示す先に居たのは、男の欲望をこれでもかと言えど詰め込んだかのような、花園。」

元々、オカルト研究部のメンバーである女性陣は、様々なタイプの美少女揃い。それこそ、見本市の様に。

一誠の視線は、その内二人の胸元に吸い込まれて離れない。実際、リアスと朱乃はデカイ。それはもう、服を着ていたとしても、下着を付けても揺れるほどにデカイ。

ただ、見るのは一誠ばかりだ。後の二人、祐斗と寛治は片や苦笑いを浮かべ、片や額に手をやってため息を吐きながら首を振る。

そんな彼の元へ、白い少女が近づいてきた。

「……山本さん」

「おう、塔城……なんだ、浮かない顔だな？」

「いえ、その……」

歯切れの悪い小猫は、水のたまったプールと寛治を交互に見る。

早く跳び込みたいのか、とも彼は考えるが、何やら違うとプールにぶん投げるような暴挙は一旦停止。

首を傾げて次の言葉を待つが、しかし小猫の方も言いづらい事なのかもごもごと唇が動くばかりで、その後が続かない。

平行線。この状況を打破したのが、リアスだった。

「カンジ、少しお願いがあるんだけど、良いかしら？」

「何です？」

「小猫に泳ぎ方を教えてあげて頂戴。というか、貴方は泳げるわよね？」

「まあ……塔城、泳げないのか」

「むう……」

「これから先の事も考えれば、泳げた方が何かと都合が良いもの。頼めるかしら？」

「良いっすよ。んじや、ちやっちやと始めようか、塔城」

「……はい……」

「声、ちっさ」

*

塔城小猫は、水が苦手だ。それは、彼女の抱える理由から仕方がない事ではある。

「ほれ、顔浸けろ。手は放さねえから、ゆっくりいこうや」

「はぶっ……………ぶはっ！」

「バタ足忘れるなー、足が沈んでるぞ」

両手を握ってへらへらと笑いかけてくるクラスメイトに、しかし小猫は言葉を返す余裕は無い。

学園のプールは結構深いのだ。それこそ、小柄な彼女はそこに足をつくと沈みかねない程度には。因みに寛治は足をついても溺れない。そもそも着衣泳でも余裕で泳ぎ切れる体力があるのだから、水場はそれ程怖くないのだ。

ゆつたりと水泳の授業に勤しむ二人。

そんな二人を、リアスは眺めながらプールサイドに置いた椅子に寝そべり、日焼け止めを一誠に塗らせていたりする。

「良い感じね。小猫もこれで、少しは水に対する苦手意識が薄くなっ
てくれると良いけど」

「ふへへ……………つと、そういうえば部長。小猫ちゃんって泳げないんですか
かね？」

「そうね。あの子は金づちよ。どうにも、水がダメなの。ただ、これから先レーティングゲームにも参加していく事になれば、様々なフィールドで戦う事にもな
って来るわ。それだけじゃなくとも、弱点は一つでも少ない方が良いものね」

荒療治ではあるが、しかしリアスとしてもモチベーションが上がる理由がある内に事を済ませたいと考えての強行でもあった。

小猫は、踏み出せてはいないが憎からず寛治を思っている事は、リアスの目から見て明らか。

しかしここで問題となるのが、二人の種族差。

人間と悪魔。この両者の間にある、寿命という壁はどうやっても崩せないだろう。

ベストは、このままなし崩しであろうとも、彼を悪魔の陣営に引き入れる、ないしはリアスの眷属として手元に置きたいというのが正直なところ。

もつとも、前者は兎も角、後者は現状無理。寛治の実力が、リアスを大きく超えてしまっている為、彼女が強くならねばこの選択肢は取れない。

そんな主の腹の内など知らない小猫は、必死に手を握りながら練習に勤しんでいる。

「んじゃ、そろそろ手放してみようか」

「ッ!？」

「いや、そこまで絶望的な顔されてもな……いつまでも俺が手を引くばかりじゃ、練習も進まねえだろ?」

手の握りを緩める寛治だが、その力が緩むほどに、小猫はその手を掴む。ついでに、顔を左右に振って絶望しきったような顔をするのだから、最後の一步が踏み出せない。

どうしたものかと考えて、彼はプールに下りる為の梯子へと進路を変える。

「んじゃ、ビート板でも持ってくるでしょう。アレに掴まれば、少しは泳げるだろ」

先に小猫を上らせて、その後にくるように寛治はプールの底を蹴って、一息にプールサイドへと跳び上がる。

割と出鱈目な事をアツサリとやってのける彼だが、プールの底も無傷であるのだから説明する気も無い。

「とりあえず、ビート板とって来るから……少し息整えてな」

「は、はい……」

明らかに戦う以上に消耗している小猫に無理強いなど出来ず、その頭を一撫でして寛治は用具室へと足を向けた。

そこは、プール用のレーンを区切るためのロープや、水はけの良いマットなどと一緒に、ビート板などの水泳の授業で使える道具が一通

り用意されている。

そこから一枚、綺麗なビート板を選んで、振り返った所で青が目の前に迫っていた。

「漸くだ。私は待たされるのは、いや焦らされるのは、あまり好きではないんだがな？」

「何の話だよ……というか、退け。まだ塔城の練習が——」

「今、お前の目の前に居るのは、私だ。こつちを見ろ」

レモンイエローの瞳が、怪しく光る。戦士として鍛えながらも、白魚の様な手が寛治の顔を両頬で挟むように捉えた。

水着と、ラッシュガードという私服や制服以上に体が密着する格好のままに、ゼノヴィアは真正面からその鍛え上げた艶めかしい肢体を押し付ける。

「私は、お前の子種が欲しい。強い者との子が欲しいからな。だが、だからといって強ければ誰彼構わずでは無いんだ。私は、カンジ。お前だからこそ、子が欲しいと思う」

「……はあ……少し落ち着けよ、ゼノヴィア。どうにも、今のお前は猪突猛進の嫌いが過ぎるぞ？」

真つすぐに瞳を見返して、寛治は息を吐く。彼に動揺のどの字も見られない。

「何に焦ってるのか知らねえがな。悪魔に成ろうが、別のもんだろうが、お前はお前だ。それ以上でも以下でもなく、ゼノヴィアって言う一個人には何の瑕疵も無い。まあ、何だ……宗教家っていうのはそこに信仰もアイデンティティに必要なものかもしれないけどな？だからって、その穴埋めを急ぐことはねえだろ」

「……そう、だろうか……？」

「そうさ。お前には、これから山の様に時間がある。だろ？」

焦り。それは確かに、ゼノヴィアの胸の内にあつたのだろう。

敬虔な信徒であつた時は、聖書の神という継る対象があつた。神はそのままに、彼女の行動指針、その基盤となりここまで突っ走る事が出来た原動力でもある。

それが突然失われた。神に祈れば、頭痛がする。

彼女自身、猪突猛進を地で行くタイプ。周りにも、悪魔に成って欲望のタガが外れたのだろう、程度にしか見られない為分らない。

というか、ゼノヴィア自身吹っ切れただけだと思っていたのだから、割とこの気質は質が悪いのではなからうか。

寛治の両頬から手が放される。だが、体は離れない。

「確かに、私には時間が山ほどあるだろう。それこそ、人としてなら有り余るほどに」

「まあ、な」

「……だが！今この瞬間、滾る思いは、この場にしかないとは思わないか？」

ゼノヴィアの胸が、寛治の胸板に押し付けられ息がぶつかるほどの距離にまで顔が更に近づく。

「おい」

「確かに私は、この胸に開いた穴を埋めたいがために求めているのかもしれない。だがな、異性としてお前の事を求めている事もまた事実なんだぞ、カンジ」

「待て、近い」

「当然だ。接吻は、子作りの初手だろう？」

迫ってくるゼノヴィア。

突き飛ばすべきなのだろう。だが、その行動に移るには、寛治は彼女との交友を深め過ぎていた。仮に突き飛ばせば、水着で用具室の床を転がる事になるそれで怪我をさせるなど、その可能性に思い当たった時点で行動には移せない。

だが、

「——何を、しているんですか？」

ヒヤリとする声横合いから響き、ゼノヴィアが止まった。

声の主は、用具室の入り口で逆光を背に仁王立ちする小柄な少女。

「あまりにも遅いので来てみれば……ゼノヴィアさん？」

「そう邪険にしてくれるな。コレも、新入部員としてのスキンシップ、という奴さ」

「だからといって、そこまで近づく必要は無いのでは？」

チリチリと二人の視線が火花を散らす。
女の勝負に、男は混じつてはいけない。しかし、得てして火花の原
因は、野郎にあるのが世の常というもの。
唐変木は気付かない。

日も僅かに落ちて、しかし涼しくなるかと思えばそうでもない。アスファルトが昼間に溜めた熱気を放出する夜は、自然と熱帯夜となるものだ。

「冷たいものばかりつてのもの……」

プール掃除から、周りより一足先に許可をもらって帰路に就いた寛治は、その足で少し離れたスーパーへと向かっていった。もう少し詳しく言うと、荒れそうだった場から逃げ出した、というのもある。

鈍い彼だが、それでも場の空気がある程度読むことはできる、筈だから。余談だが、彼が帰った後のプールは若干ギスつていた事をここに記す。

暑いからこそ、バランスのいい食事を。夏バテの主な要因は、冷房による外と中の寒暖差に体が疲れる事と、それから暑いからと真面に食事をとらない事。

「……冷やし中華……いや、この前素麺だったしな……井で行くか」
卵やトマト、鶏肉なんかを買い物かごに放り込みながら考える。

一週間分を考えて買うとはいえ、必ずしも毎回一週間を乗り越えられる訳では無い。今回の場合なら、味噌の買い足しを忘れていた為、そのついでの買い物だった。

一通りの買い物を終えて、帰路に就く。

ちよつとした暇潰しに繁華街を通り抜けながら、寛治はぼんやりと立ち並ぶ店を流し見していく。

(人外、人外……こういう場所は欲の坩堝だからな。まあ、それ以上の事をしてる雰囲気も無いし)

日本人離れたプロポーションを誇る、美人なキャストを尻目にそんな事を彼は考えていた。因みに、客が尻の毛まで抜かれて素寒貧になろうとも、助けるような事はしない。

流石に命がとられそうな事態ならば別だが、美女に鼻の下を伸ばしてうつつを抜き、家庭を疎かにする様な者に差し伸べられる手など、寛治は持ち合わせてはいないのだ。

そんな色のある道で、寛治はふと考える。

というのも、彼はそういう感情が分からない。もつと言うなら、鈍い。

美人は美人であると思うし、一誠が叫ぶ性欲の塊のような発言に關しても分からない訳では無い、筈なのだ。

ただ、惹かれないだけで。

惹かれない。普通ならば、男の視線を集めてやまない様な絶世の美女であろうとも、蠱惑的なキャストであろうとも。

枯れているというか、壊れているというか。

何より、

「……………あ、？」

性欲よりも別の意識が勝る。

寛治が気付いたのは、妙に大きな力の波動について。

その場に立ち止まって周りを見渡し、そして気が付く。

彼が見つけたのは、チャライちよい悪風の男性。同時に、周囲の空間にも変化が起きる。

あれだけ騒がしかった通りから人の気配が消え、人が消えるのだから自然と音も減っていくというもの。

明らかに相手のフィールドへと引きずり込まれた。だが、寛治には焦りはなかった。

強者故の慢心。それも確かにあるのだろう。

しかし、事実として彼は強い。それこそ、傷つけられる可能性などほぼゼロ。寧ろ、彼が傷を負った上で全力全開で戦わねばならない相手が現れれば、この町はおろか下手すれば国が半壊しかねない。

果たして、現れるのは中華風の格好に身を包んだ青年。

一応、一人だ。しかし、寛治の感知では周囲に数人が隠れている事にも気が付いた。出てくる気配はないが。

「こうして顔を合わせるのは、初めてだな。俺は——」

「待った」

青年の言葉を遮って、寛治は左手の平を彼へと向ける。

「話があるのは、分かった。お前が戦う気が無い事も。だがな、俺は今

買い物帰りだ。べらべらと話し込んで食材を無駄にするわけにはいかねえのさ」

そう言つて、寛治は右手の買い物袋を掲げてみせる。

周囲を囲われて何を悠長な、という話なのだがしかし彼にとつてみれば食材を無駄にするという事はその食材を買うために使つた金を捨てる事も同然。

家計を預かっている現状、そんな事を容認できるはずもない。

一方で青年の方も、まさか買い物袋片手にそんな事を言われるとは思ひもしない。

キョトンとした虚を突かれた表情をし、次いで破顔一笑。

「ふっ……はっはっはっはっはっ！成程、確かに俺としても食べ物粗末にすることには抵抗がある。良いだろう。まずは、その鮮度を守つてからだ」

一頻り笑つた青年が手を上げれば、それが合図になつたのか周囲に活気と人々が戻ってくる。

寛治が歩きだせば、青年はすりと道を開ける。かといつて、そのまま見送るかと思えば、数メートル離れてゆつたりとついてきた。

自宅まで帰るのは不用心にも思える。しかし、冷蔵庫は家の台所にしかないのだから帰るしかない。

何より、寛治は件の青年がある程度自分の事を知つた上で接触を図つたのだろうと、何となく予想していた。

身のこなしが、強者のソレである事。少なくとも、現状のグレモリー眷属では相手にならないだろう。

人間であることは分かるが、だからこそその立ち振る舞いが出るほどに鍛えているというのは、最早称賛に価するというもの。

会話は無い。ただ、二人の周囲を囲む誰か達は確実にいつてきている。

暫くして、家に到着。客、ではないため青年を家に上げるような事はしない。

冷蔵庫に食材を収めながら、寛治は考える。

（何が目的か……戦い、じゃねえよな。大っぴらに暴れたくないって

事なら分からなくもねえけど。そもそも、アイツ人間だよな？」

最後に牛乳のパックを直して、扉を閉める寛治。この間、凡そ三分。考えては見たものの、打開策は無し。というか、問題の渦中にある癖に、その当人がそろそろ考えるのが面倒くさくなってきていたのだ。

(まあ、いざとなったら実力行使で)

買い物袋を直して、再び外へ。

瞬間、世界が一変し、その場に居るのは件の青年とそれから、寛治だけとなる。

「待たせたな。まあ、何の連絡も無く接触してきたんだ。仕方ないよな？」

「ああ、ソレは構わん。こちらとしても、なるべく早く接触したかったんだが……如何せん、追われる身で、な？」

「それよりも、俺に関する情報収集じゃねえのか？家の事も、知ってたんだろ？」

「さて……だが、今回はこちらも事を構える為に来たわけじゃない。ちよつとした提案をしに来たんだ」

「周り囲んで、か？つーか、ここまでやれば流石に気付かれるんじゃないのか？」

「それにしては心配無用。もともと戦闘を想定してはいないからな。隠蔽に特化し、魔王だろうとこの結界は見つけられないさ」

「そーかい」

話をしながら、めんどくさい相手だと寛治は目の前の相手を表す。

脳筋じゃない、寧ろ、計画を張り巡らせて、相手の力を削ぎ、その上で自分の土俵へと引き摺り下ろして、搦手だろうと厭わない。そんなタイプ。

相手をするに際して、明確に力技で潰しに来ない分、この手の輩が面倒であることを寛治は良く知っていた。というか、水面下で潜行するように進む相手というのは、須らく厄介。

「さて、それでは改めて。俺は、曹操。禍の団にて英雄派を率いてい

る」

「禍の団?……聞くからに、真面な集団じゃなさそうなんだが?」

「だろうな。俗な言い方をするのなら、テロリスト、といった所だからな」

「……で?そのテロリストが、態々危険を冒してまでここに来た。目的は、勧誘か?」

「ああ。山本寛治。英雄の魂を継いではいないが、英雄として名を刻む事を約束された人間。その力を、俺達と共に振るわないか?」

真つすぐに、曹操は寛治の目を見返す。

本当ならば、色々と言葉を連ねるところなのだが、目の前の相手が長々と言葉を連ねた所で「それが?」といった風に返してくるであろう人種だと感じ取ったからだろうか。

真つすぐな視線を受け止めていた寛治は、少し間を開けて頭を掻いた。

「まあ、断る。態々、俺はテロリストなんかに、成るつもりはない」

「そうか、残念だ……なら、一つ聞かせてくれ山本寛治」

「あ?」

「お前は、何のために悪魔に与する?」

「何の話だ?」

「リアス・グレモリー。悪魔の貴族であり、現魔王の妹だ。随分と手を貸しているらしいじゃないか」

「本当に色々調べてんだな……で、なんだ。先輩に手を貸す理由か?んなもん、俺がオカ研の部員だからだ」

「だがそれも、自分で望んで入ったものではないだろう?発端は、お前が力を見せつけたからだ。違うか?」

「だとしても、だ。第一、俺は先輩含めた関係ある人に手を貸したに過ぎねえ。悪魔全員助ける、何て馬鹿げた事は言わねえし、やらねえよ」

寛治のスタンスは、あくまでも知り合いへの助力。これに尽きる。

リアスに手を貸したのも、彼女が知り合いの先輩であったから。オカルト研究部に籍を置くのも最初は成り行きだったが、今では気に入ってもいる。

何より、

「だいたい、俺は英雄？とやらになりたいとは思わねえよ。俺が助けるのは、あくまでも俺が助けたいと思う相手だけだ。不特定多数がどうなるうが、知らねえな」

山本寛治は決して英不特定多数を救う者雄には、ならない。頼まれば暴れるかもしれないが、ソレはあくまでも頼まれたからという前提条件があつてこそ。

要するに、彼は曹操含めた英雄派とは相いれない。そも、最初の段階でそれこそ、リアスたちよりも先に接触を果たしていたのならまだ分からないが。

分が悪い。ここまで言われれば、曹操としても引き下がらざるを得ない。

一応、事を構える為の今回の接触ではないと明言しているし、仮に戦いとなった場合は自分達がどうなるか分からない。

一つ息を吐き出す。

「はあ………どうやら、勧誘は失敗らしい。今回はここで退かせてもらおう」

「俺が周りに、お前の事をチクるとは思わないのか？」

「やっても、メリットが無いだろう？何より、色々俺達はお前の事を知っているからな」

「……成程。だが、まあ……そっちも手を出すつてんなら、相応の覚悟をして来いよ？加減はしねえからな」

そこで、今回の接触は終わりだと宣言するように、結界は消え、曹操の姿は霧に包まれて掻き消える。

完全に周り含めて気配が消えた所で、寛治は一つ息を吐いた。

仕留めるべきだったかもしれない。そう思えども、後の祭り。

互いが互いに牽制し合った対面は、火種を燻らせたままに次へと回される事になる。

キナ臭い気配。曹操の襲来から、どうにも嫌な予感が拭えない寛治ではあるが、今日も今日とて学校へ。

この日は、学生時代における少しばかり気恥ずかしいイベントが行われていた。

「大変だな」

屋上の手すりに頬杖をついて、眼下を眺める寛治は他人事の様にく。

今日の駒王学園では授業参観が行われていた。肉親がやって来る、というだけで生徒たちは自然とソワソワしてしまうもの。

しかし、寛治は違う。彼の両親は、仕事先だ。両親以外の肉親は近くに住んでおらず、彼の懸念材料は今回存在しない。

だから他人事。寂しいか、と問われれば彼は肩を竦めて首を振るだろう。

不意に、背後の扉が開く音がする。

「あの人は、全く……」

眼鏡に黒髪。真面目そうな雰囲気を纏った女生徒。

手すりを背凭れにするように振り返った寛治は、そんな彼女に見覚えがあり首を傾げた。

「支取生徒会長じゃないっすか。何やってるんです?」

「ツ……ああ、確か山本寛治君、ですね」

「うっす。で、何やってるんで? まだ、参観に参加した人たちは帰ってないと思いますけど」

「それは………はあ………その、少し疲れてしまっ」

「ふーん……」

ため息を吐く蒼那に、寛治はそれ以上の追及を止める。別段親しい相手でもないし、寛治自身カウンセラーの様に話を聞いて精神的な不調を緩和するようなスキルは持ち合わせていないので。

対して蒼那は蒼那で、若干困っていた。

彼女が屋上にやって来たのは逃げてきたから。その対象は、実の

姉。

何と言うべきか、姉はキャラが濃い。それはもう、気疲れしてしまうほどに。

蒼那自身、姉を嫌っている訳ではない。ないのだが、しかし誰しも嫌いでなくてもその一部が苦手である、という相手は居るといふもの。それは肉親であろうとも例外ではない。

そうして逃げた先で出会ったのが、殆ど関わりのない顔と名前を知る後輩。

一応、簡単な説明は受けているし、何よりつい最近のコカビエルの一件では彼が居なければ、場合によっては壊滅的な被害を被っていたかもしれない。

だが、ソレはソレ。直接的な繋がりほとんどない蒼那には、話題も無い。

しかし、屋上からまた動くわけにはいかない。少なくとも、ほとぼりが冷めるまでは人混みから離れていたい。

という訳で、寛治から微妙に距離を取って手すりへと寄り掛かった。

沈黙。蒼那は別として、寛治は別に見ず知らずの他人であっても同じ空間に居る事が苦にならないタイプである為、のんびりと空を見上げてゆつたりと息を吐いていた。

だからこそ、自然とこの空気に終止符を打つのは、蒼那の方。

「……あの、山本君」

「はい？」

「その、貴方はここで何を？」

「俺っすか？……まあ、暇つぶしです。魔王やら何やらバタバタしてるんで。俺としては、顔？ぎあんまりする気無いんすよ」

「そうなんですか？」

「そうなんです。別に、悪魔が嫌いとかは無いつすよ？ただ、お偉いさんに顔を覚えられるとそのまま政争に巻き込まれたりするんで」

万夫不当の英雄であろうとも容易く殺すのが、政治というもの。そして権力の恐ろしさだった。

寛治自身そこまで詳しく知る訳では無い、が過去に夢の中の老人からのありがたお説教の中でそういう話があった為に避けているだけ。蒼那としても領ける理由ではあった。確かに、政争は面倒くさい、と。

彼女自身、婚約者が居たが撃退した経歴を持ち合わせている。コレもまた、貴族としての家柄も交えた政治の結果。

「それでは、今日の授業参観にご両親はいらしていないんですか？」

「うちは、どっちも共働きで今は出張中つすね。まあ、昔からなんで」「それは……」

「何です？」

首を傾げる寛治に、蒼那は何も言えなかつた。

当人がどう感じているのか。それはこの際関係が無い。

学校のイベントに来ない親と言うのは、まあまあ居る。それは仕事の関係であつたり、或いは子供の方から情報を遮断していたり。理由としては幾つか考えられる。

蒼那自身、そういう家庭環境というものを知識的には知っている。しかし改めてそう言うタイプと対面すると大なり小なりのシヨックというものがあつた。

「二度も、ですか？」

「？まあ、そつすね。と言つても、珍しい話じゃないと思えますよ？仕事人間なんて、今の世の中ありふれてますし」

あつけらかんと言い切つた彼の言葉は、確かに現代社会的的を射ているものだろう。

しかし、その一種の当り前が彼を、山本寛治という一人の少年を歪に形成してしまつた一つの要因であることは明らかだつた。

彼は十五年生きてきて、廃人になることは無かつた。

文字通り、毎晩毎晩何度も何度も死ぬ目に遭いながら、それでもその精神が死に絶えて、生きた屍になることは無かつた。

夢の中の老人が手加減したのか？否、それこそ幼児ともいえる年齢の際には加減をしていたかもしれないが、木刀がある程度振れる様になればその腕をへし折られ、ぶつ飛ばされてきた。

彼の精神が何者よりも強靱であったのか？否、常人よりは精神的に優れているようにも、何千何万と死に続けていれば摩耗して、やがて擦り切れる。

ならばなぜ、今も彼はこうして生きているのか。

その一助となつたのが、生存本能。

生物が須らく持ち合わせる、【生きようとする意志】

この本能が、擦り切れていく精神を補強し、繋ぎ止め、そして統合した。

誰も助けしてくれないのだから、自分の身を自分で守るしかない。その結果として、誕生したのが今の精神性。

感情の振れ幅が小さい代わりに、命の危機に瀕した際に感情を爆発させて、発憤、ないしは状況に押し潰されない精神性へと昇華する。

勿論、この事を知る者は誰も居ない。何せ、本人も自覚しないままにその状態で安定、定着してしまつたから。もう直しようもない。

長々と連ねたが、この精神性を獲得するにあたつて、両親が彼に対してあまり干渉しなかつた事もまた一因である。

もしも夢が恐ろしいのだと泣き付けるような相手だったならば、何かが変わったかもしれない。

だが、そうはならなかつた。

両親はいつだって忙しく。泣きながら目覚めた彼に気付くことなく仕事へと出向く事が珍しくない。

人によつては、子供を持つべきではない親、と称されるかもしれない。実際の所、二人としては寛治を蔑ろにしていたつもりは無かつたが、しかし自分たちの息子は手のかからない子だった。

気付かないままに成立した、関係性。

蒼那はここまで気付いたわけではない。ないが、しかし今ここで放つておいて良い相手じゃないと、何故だか思つてしまう。

「あの、山本君」

「ん？何すか」

「……少し近付いても？」

「え？……どうぞっ？」

何でそんなこと聞くの？と彼の顔は語っているが、そんな事は蒼那には関係なし。

手を伸ばせば触れられるほどの距離まで近づき、手すりに背を預ける。

「勉強には、ちゃんとついていきますか？」

「へ？……ええっと、まあ、大丈夫っすけど」

「一年生の範囲は、中学校の基礎が役立つとはいえ、この先の学校生活でも必要な基礎固めの時ですからね。蔑ろにしないように」

「お、おっす……？」

「それから、もしも分からないのなら、直ぐに先生に聞く事。若しくは、リアスたちに頼る様に。勿論、生徒会室に来るのなら、私でも構いません」

「は、はあ……というか、急になんです？勉強って……」

「顔見知り程度とはいえ、留年して苦労するような目に遭ってほしいとは思いませんから。何より、勉強の事なら、私でも貴方を手助けできるでしょう？」

「??そっすね？」

何も理解できていないが、年功序列というのもあって寛治は頷く。

実際の所、蒼那は頭がいい。それは勉学的なものもあるが、同時に戦闘スタイルにも表れている。

更に言うなら、彼女は存外面倒見がいい。厳格なところもあるが、その性根は善良であるし、大らか。情も深い。

そんな彼女が、顔見知りの後輩の淀みを見つけて無視できるはずも無かった。

余談ではあるが、この対面から時々二人が屋上で交流を深める姿が見られたとか。

この頃は、どうにもよく絡まれる。

隣をチラリと盗み見て、寛治は一つため息を吐いた。

発端は、夜。今日はゼノヴィアも夕飯を集りに来るのが無く、ゆったりとした時間を過ごす事が出来ていた。

だが、その穏やかな時間は、チャイムの音と共に崩れ去った。

居留守、をしようにも時間が夜であるのだから当然電気を付けている。カーテンが厚手であろうともその隙間からの光を完全に阻む事など出来ず、外にも僅かに漏れてしまっていた。

諦めて、僅かな警戒と共に玄関へと向かった寛治。因みに、この家にはドアモニターは設置されていない。

僅かに開けた玄関。その先に居たのは、チョイ悪親父。

墮天使総督アザゼル。男はそう名乗った。

この自己紹介を受けて寛治は眉根を寄せた。

コカビエルの一件然り、その前のアーシアが眷属加入の折に起きた事件然り。墮天使に対する悪印象は十分すぎるほどに植え付けられていたのだから。

だが、アザゼルも今回は敵対するために顔を見せた訳では無い。だからこそ、冒頭に繋がるのだから。

野郎二人、夜の繁華街に行く。

「悪かったな。俺としてもなるべく早く、お前とは顔？ぎをしておきたかったんだが……あの赤龍帝がなかなか面白い奴だな」

「その件でグレモリー先輩はお怒りだけだな。私の眷属に手を出すなんて、だと」

「それに関しては、ま、お茶目って事にしといてくれ。神滅具は神器の中でも取り分け特殊、ワンオフ品だ。研究してる身としては、見れる時に見ておきたい」

「さいで」

「何より、俺としてはお前の力にも興味津々って訳だ」

横から視線を僅かに向けてくるアザゼルに、猫背になりながら寛治

は目を逸らした。

彼としては、態々出向いたアザゼルを出迎えて持て成す必要性は、本来は無い。ないが、しかし万が一何かしらの計画を持ち合わせていた場合に速攻で制圧しようと考え、こうして交流を行っていた。

誤算があるとすれば、夜の繁華街に連れ出された点か。いつぞやの曹操と出会った時よりも更に遅い時間である為、周りは時間帯固有の騒がしさに彩られている。

「どこまでいくんだよ」

「もう直ぐさ。俺としても、お前と事を構える気はない。が、だからつて周りにゴチャゴチャ居る状態で話をするような内容でもないんだな」

「補導されたら、アンタを警察に突き出すからな？」

「ハハハッ！そりゃ困る……つと、見えたぜ、あの店だ」

アザゼルが指さす先。

そこは煌びやかなクラブ、ではなく地下へと潜る階段があった。掛かっている看板も目立たない良く言えば大人びた、悪く言えば地味な物。決して人目を引ける見た目ではない。

階段を下って、木製の扉を開ければ、その先に広がっていたのはシックな内装のダイニングバー。

八席あるカウンター席には数名の客が座り、カウンター内では初老の男性がグラスを拭きつつ、時折客へと酒をサーブしていく。

アザゼルは男性に片手を上げると、そのまま真つすぐに店の奥へと歩を進めた。

その背中を追いながら、寛治は今まで見た事のない大人の店といった様子の内装に視線は移りに移る。

しかし、アザゼルからこの店に対する言及はなかった。あくまでも、話し合いの場であり、飲みに来た訳では無いからだろう。

その足は緩むことなく、店最奥の木製扉の前まで辿り着き、押し開かれる。

中は、ボックス席の様になっていた。それこそ、秘密の会談をするにはちようどいい内装で。

アザゼルが奥の席に腰掛け、テーブルを挟んで寛治も仕立ての良い革張りのソファへと腰を落ち着けた。

「さて、改めて名乗るとしようか。俺は、アザゼル。墮天使総督なんてやらせてもらっちゃいるが……まあ、俺自身似合わねえ事してると思ってる」

「その墮天使総督様が、一介の人間に接触するのは如何なもんかね?」
「はっはっは! 少なくとも、お前を一介の人間だなんて俺は思っちゃいねえよ。赤龍帝が見つかった案件然り、そしてコカビエルの件然り。神器を持たない人間が、聖書に書かれた墮天使幹部を叩き潰すなんて、ほぼあり得ねえ。仮に神器を持っていたとしても、最低でも禁手化を果たしてなけりや、まず敵わねえだろうさ。それだけ、コカビエルは戦闘特化の墮天使だった。分かるか? お前さん、結構な注目株だぜ?」

「なら、引き入れか? 言っとくけど、俺からしたら墮天使の印象最悪だからな? 兵藤先輩とかの一件で墮天使に絡まれてから、毎度のように巻き込まれてんだよ、俺は。で、あのコカビエル? の一件だ。仕事しろよ総督様」

「だから、向いてねえんだよそう言うの。俺は、根っからの研究職側だ。だってのに、押し付けられてな。ま、確かに墮天使の行動が目立ってるのは事実だ。言い訳にはなっちゃまうが、理由があつての行動だ」

「コカビエルもか?」

「アレは、あのバカが突っ走った結果だな。俺が言いたいののは、お前が墮天使に絡まれた件だ。お前、神器使いを見て、いや、神器を見てどう思った」

「あ?」

真つすぐ見据えてくるアザゼルに、寛治は首を傾げるが、言われた通りに自分の知る者たちを思い出す。

ぶっちゃけ、一誠も祐斗もアシアもチート染みている。

理論上、半永久的に倍加し続ける力。その高めた力を他人へと譲渡可能。

オリジナルには劣るものの、様々な属性の魔剣を創り出し、尚且つその大きさなども自由自在。

欠損などは治せないが、それ以外の傷をほぼノーリスクで完治可能な回復力。

「……出鱈目だな、とは思う。持ち主の技量次第に加えて、一芸特化と言えども、アレは破格過ぎるだろう」

「分かっているじゃねえか。神の不在は聞いてるか？」
「流れて」

「昔から、大なり小なり神器の暴走は起きてんだ。特に、神滅具クラスになると猶更な。かといって、神器を引き剥がせば、持ち主は死んじまう。この辺りは、魂の分野になるな」

「……で？その神器の話で、俺が何で絡まれる」

「さつきも言った通り、神器は暴走する可能性を秘めている。勿論、全部が全部そうじゃない。寧ろ、自分が神器を持つてる事に気付かず一生を終えることだって珍しくないからな。しかし暴走すれば洒落にならない。山本寛治、お前ならどうする。爆発するかは分からないが、爆発すれば周囲数十キロが焦土と化す爆弾が目の前にあったのなら、お前はどうか対処する？」

「そんなの……そういう事か。つまり、何か。お前ら墮天使は、神器保有者を殺して回るのも偏に、転ばぬ先の杖って事か」

「勿論、ただ殺しまわってる訳じゃねえさ。予め保護して、神器の扱いを学ばせる場合もある。神滅具とかな」

「……まあ、言ってる事は分かるけども」

「お前が襲われたのも、その一環だ。保護にしても、一から十まで全員を保護できる訳じゃない。こっちにもリソースの限界があるからな。だったら、間引くしかない」

あんまりな物言いだったが、しかし寛治としても納得するところはある。

彼も神器ではないが、人智を超えた力を持ち。もしも暴走してしまえば辺り一帯が焦土と化してしまう事だろう。

そうなる前に、危険な目を摘み取る事はある種の平和維持活動とも

言えた。というか、コストなども顧みれば態々相手を保護するよりも消してしまつた方が容易い。

神滅具の使い手を保護するにしても、ワンオフともいえる神滅具の在処を把握する上では必須の事。

非情な判断と後ろ手を指されるかもしれない。しかし、もし仮に、暴走などが起こってしまえばいったいどれだけの被害が出るかわからない。

優しさだけでは、世界は、政治は、回らないのだ。

寛治としても、狙われた理由は分かった。それが納得できるかどうかは別として。

「でも、俺の力は神器じゃないって話だけだな」

「……それ、誰に聞いた？」

「爺さん」

「その爺さんは、お前の中に居るのか？」

「中……中か？というか、信じるんだな。てつきり、鼻で笑われると思つてただけでも」

「神器は幾つかの種類に分けられる。その一つに、封印系つてのがあつてな。神器の中に何か封印されて、そのお陰で力を発揮できる。で、その何かが目覚めてる場合が……いや、待て、そうじゃねえな。悪い、神器の話になるとどうにも。とにかく、そういうタイプが居るからな。お前の話にしても、真つ向から否定する気にはならねえな」

ぼろりと口が滑つただけなのだが、存外真面目に捉えられて、寛治は眉を上げた。

因みに、封印系には一誠の赤龍帝の籠手などが該当する。

このまま相談しようかとも寛治は考えるが、そこで頭を過つたのが先程のアザゼルの発言。

(研究者つて言つたよな)

偏見ともいえるが、得体の知れないもの 神器を研究している研究者など何をやらかしているか分かつたものではない。

そも、今回のアザゼルの接触到關しても、神器を持たないにもかか

わらず、神器の様な力を有した人間に興味が湧いたから。

内心に呼応してか、寛治の視線もジツトリとしたモノへと変化していく。

これにギョツとするのは、アザゼルの方。急にジト目を向けられて、うろたえる。

「おい、何だよその目は」

「別に。そもそも、今回の目的は何なんだ？謝罪、じゃないんだろ？」
「謝罪に関しても、勿論考えてはいる。顔？ぎも、な。だがまあ、確かにもう一つの要件もある。近々、悪魔側から言われるだろうが、この町で、三大勢力の和平会談を行う事になった。その場に、お前にも同席してもらいたい」

「はあ？……悪魔側として、か？」

「あつちはそう思ってるだろうな。ただ、俺としては今後の事も考えて強力な戦士と交流を深めておきたいと思っている」

「今後……？」

そこでふと、寛治が思い出したのは曹操の事。

彼は、自身の事をテロリストと語っていた。そして、明らかに裏関係のテロリストがテロを起こす相手など、決まっているという訳で。

（断つちまったもんなあ……いやいや、今更テロリストって）

改めて考えても、その選択肢は無い。

そも、寛治は戦闘狂でもなければ、戦争狂でもない。只管に強いが、しかし出来る事ならば闘いたくないと考えるタイプ。

そんな人間が、不特定多数に喧嘩を売って敵対されるテロリズムに興じるかと問われれば、否だ。

「それで？返答を聞かせてもらおうか」

「返事も何も、選択肢ないんじゃないか？ここで断つても、結局先輩たちに誘われるし」

「断らねえのか。律儀な奴だ」

「断つて必要以上に敵増やしてどうするんだよ……それにしても、和平か……ぶっちゃけ、出来るのか？コカビエルの件だってアイツ戦争目的じゃなかったか？」

「その辺を詰める為の会議だ。といつても、確かにどの勢力も一枚岩じゃない。俺達は比較的纏まっていてる方だが……天界は、神が死んでからシステムの維持で手一杯。加えて、神が居ないから純粋な天使も生まれなくなった。数的な危機にもあるな。それは墮天使俺達もなんだが。悪魔の方も、上が下を御しきれてない。あそこは貴族的な風習が強すぎるからな」

「あー……」

「他にも色々山積みだが……そうも言ってもらんねえのさ」

聖書陣営、もとい三大勢力と銘打つてもそれぞれの陣営自体の力は、単体では他神話勢力に劣るものでしかない。

加えて、聖書の神と初代魔王が消え、その勢力は弱体化中。最早、内輪揉めが続いている場合ではない。

会談は、数日としないうちに行われる事になる。

余談ではあるが、その開催時間が深夜と聞き、寛治は白目を？く事になるのだが、この時の彼はそんな事を知る由もない。

剣鬼というものは、こういう事を言うのだろう。迫りくる木刀をギリギリで受け止め、しかし押し切られながら、ゼノヴィアはそんな事を考えていた。

この日は、一誠を連れて、朱乃とリアスが不在。部活は無かったのだが、だからこそ日頃の活動では出来ない事をしよう、という流れになった。

そこで始まったのが、自分たちの戦力強化、もとい鍛錬。

「力任せにぶん回してんじゃねえよ、ゼノヴィア！刃筋、もつと意識しろ！」

寛治からの厳しい指摘と共に突きが飛び、彼女の体は大きく吹き飛ばされる。

彼女だけではなく、今回は祐斗と小猫も参加している、のだがゼノヴィアの前に吹っ飛ばされて地面を転がり、アジアに治療してもらっている所だ。

木刀を肩に担ぎ、寛治は目を細める。

欲を言えば、神器や聖剣を振るって鍛錬したい所なのだが、如何せん前者は兎も角後者は少々問題があった。

ゼノヴィアが担い手となった聖剣。

英雄ローランが用いた、不滅の刃。その名には多くの意味が込められているが、総じて永遠に通じるようなものが多数を占める。

聖剣デュランダル。切れ味は、既存の聖剣を遥かに上回り、使いこなせたならば、ありとあらゆる万物の両断すらも可能とされる。

しかし、その性質は尋常ではないじゃや馬。使い手のいう事も聞かず、必要以上に周囲への破壊すらも齎してしまう。

未だ半人前なゼノヴィアは、担い手として選ばれたものの、その能力を十全に扱い熟せている訳では無い。そして、この場に残る者たちは目隠しの結界などを張れるほど器用ではなく、仮に張れてもデュランダルに切り壊されるのが落ちだった。

そんな諸々の理由から始まった、基礎固め。もとい、地獄組手。

肩を木刀の峰で叩く寛治を見やり、ゼノヴィアは苦笑いを浮かべる。

「尋常じゃないな……ッ、ハア……あの男に出来ない事はあるのか？」

「……少なくとも、体術も相当ですね……」

「術に關しても。現状、オカルト研究部で、彼に勝てるヒトは居ないんじゃないかな」

祐斗も小猫も、寛治の強さは良く知っている。どれだけボコボコにされてきたと思うのか。

だからと言って、おんぶに抱っこではいけないとも考えている。だからこそ、地面に転がされまくっても強者へと挑み続けるのだ。

寛治としても、今回の鍛錬に否はない。彼ら彼女らが強くなれば、死ぬ可能性もある程度は減るだろうし、不穩な相手にもある程度は対応できるだろうと考えるから。

「ほら、来いよ。時間は有限。最低でも、こっちの木刀へし折れるぐらいにはなってくれねえと」

「……その割には、その木刀、強すぎませんか？」

「そりゃ、靈力を薄く纏わせてるからな。ただな、塔城。それは、お前らだって出来る事だ」

「靈力じゃなく、魔力の話かな？」

「それだけじゃないっすよ。木場先輩も塔城もゼノヴィアも、力“”つてものを特別視しすぎてる」

「……？」

首を傾げる彼らに、寛治は頭を掻いた。

「神器だろうと、魔力だろうと、駒の力だろうと、結局突き詰めればどれもが、当人の力でしかない。自分の力だ。認識しろ、使えて当然である、と。意識せずとも呼吸できるように、真っ直ぐ立つことに余分な力は必要ないように」

言い聞かせるように、染み込ませるように、寛治は語る。

彼の観点は独特だ。言い換えれば、受け入れる素地が広いともいえる。もつと突き詰めるなら、歪んだ精神性が、必要以上に疑問を持つことを拒否している、とも表せるかもしれない。

誰しも他人と違う部分があれば、大なり小なり悩む事だろう。

山本寛治は、それが殆ど無い。悩むことなく、それもまた自分の力だと受け入れた。

その根本はどうであれ、受け入れる。事は非常に大切だ。

「……」

祐斗とゼノヴィアが自分なりに言葉をかみ砕いて受け入れようとしている中で、小猫は己の握った拳を見下ろす。

現状、自分が一番劣っていると、彼女自身考えている。そして、今のままならばこの自己評価は覆ることは無いだろう。

直ぐには、変わらない。だからこそ、足掻くのだ。

「……お願いします」

「おう、来な」

今できる事を、する。幸いと言うべきか、教師役である寛治は技を教える事に対しても否は無い。出来るか出来ないかに関しては割とシビアで努力は裏切らない、何て綺麗事を言わない男ではあるが。それでも習いたいと言えば懇切丁寧に教えてくれるだろう。分かりやすいかは別として。

小猫が突っ込み、その後をゼノヴィアと祐斗が続く。

寛治は、待ちの姿勢を崩さない。舐めているとか、そういう話ではない。これは単純な実力差がそこに横たわっているから。

無論、そこで油断して掠り傷でも負えば、まず間違いなく夢の中で百回は確実に殺される事になるだろうが。

(塔城の踏み込みは悪くない。若干捨て鉢になつてる事は否めないけども……そして、塔城を目晦ましに木場先輩が後ろから、ゼノヴィアは正面から)

的確に、三人の狙いを看破しながら、そこで寛治は常とは違う動きをしてみようと思いつ。

彼の剣は、剛剣だ。力こそパワーとでも言うべき、剛力の元に成立する。無論、技も優れているが、対戦相手はまず最初に、彼の人間離れした破壊力に目を剥く事だろう。

しかし、

「ッ！……え」

最初に驚いたのは、小猫。

振り抜いた左の縦拳は、しかし受け止められる事も迎撃される事も無かった。

ただ、まるで風に揺れる柳の葉でも殴り抜いたかのような、圧倒的な手応えの無さ。同時に体がつんのめって、いつの間にか寛治の後ろへと転がっていた。

そしてそれは残りの二人もだ。

寛治に劣るとはいえ、剛剣のゼノヴィアも、逆に速度と技に優れた祐斗の剣技も、その悉くがまるで空中に舞った灰でも切りつけたかのように手応えなく、その体は地面を転がった。

「え、なん……」

「な、何が起きた……？」

「こういう戦い方もあるって事だ。実戦なら、カウンターで切り捨てるか、焼き捨てるんだが……まあ、今回は手合わせだからな」

肩を疎める寛治に三人は起き上がって首を傾げる。

何というか、らしくない様に思えたからだ。これは、付き合いがまだ短いゼノヴィアも感じた事であるらしく、説明を求める様に寛治を見上げていた。

「まあ、あくまでも俺の理論だが……戦い方には比率があると思ってる」

「比率？」

「ああ。分配は、力と技。俺は基本的に前者七割、後者三割って所だな」

（アレで七割……）「それじゃあ、今回はどうなんだい？」

「技九割って所っすかね。正直、俺は得意じゃないから極めたとは言えないんで。因みに極めれば、力0で相手を制圧できます」

事も無げに言うが、その極致へと至ったならば、生きながらにして武神の領域に足を踏み込んだも同然だったりする。

何せ、彼の言う力0、技10と言うのは、恐怖などで疎んだ際に起きる僅かな“力み”すらもカウントするから。

因みに、逆のパターンであっても、ソレはソレで人知を超えたものとなる。

そもそも技術と言うのは、長い年月をかけて最適化していくために歴史と共に数多の強者によって練磨されてきたものだ。

最適化とは、威力軽減につながるロスを削るといふもの。

ここまでくれば分かるが、どれだけ力を籠めようとも、技がついてこなければその破壊力はどうしたって削れてしまう。しまうが、それでも相手に命中、致命傷を与える、と書けばどれだけ異常な事か。

「……教えてもらえますか？」

「あー、これに関しちや、マジで専門じゃないんだ。感覚的な部分が強くてな……」

詰め寄る小猫に、寛治は頭を搔く。

まず、彼がこの受け流しの奥義のような技術を体得したのは、老人との死に物狂いの手合わせと言う名の決闘中の事。

その時は、まだまだ体が出来上がっておらず、力に関しても霊力のバフがあつても現状の六割から七割ほどの出力しか出せなかった。

何度も殺されるのは御免被る寛治は、無意識の内に生き残る術を求めた。

そして、夢と言うのは無意識の領域だ。当人に意識があるかどうかは抜きにして。

無意識を通じて体に染み込んだ力加減。人間が己の感覚というものを言葉で表現する事が難しいのと同じ事。

それでも、寛治は考える。らしくないと言われても、彼は存外小猫を、グレモリー眷属を気に入っているのだから。

暫く考えて、徐に彼は木刀を地面へと突き立て、両手を小猫へと向けた。

「塔城」

「……？」

「手え出せ、手。手押し相撲をやるぞ」

突然の申し出。それも遊びともなれば、疑問も一入。

しかし、そこは今までの流れとは言え、師弟関係を結んできた彼ら。

小猫は素直に寛治の前に立って両手を出した。後の二人は少し離れる。

「ルールは分かるな？」

「はい」

「んじや、始めようか」

言うなり、ゆっくりと寛治は両手を前に差し出してくる。

手押し相撲の形としては、かなりの舐めプ。

小猫は怪訝な表情を浮かべ、しかし隙があるのなら突くのみ。それこそ、常人では視認できない様なスピードで両手を突き出し、

「ッ!」

「はい、残念」

手が触れた瞬間、まるで空箱でも押したかのような感覚を覚えて、突き出した両手の力は行き場を失っていた。

勢いよく突き出した腕に引っ張られるようにして体が前へとつんのめり、小猫はそのまま固い胸板へとダイブ。寛治はその小さな白髪頭を掻き撫でる。

「っと、まあ、コレが受け流しの基礎だ。まあ、俺の感覚的な話なんだけどな？」

「あわわわ……」

「前提として、相手の向かってくる力に歯向かわない事。基本は、相手の力の矢印の向きに体を動かす。良い方法としては、回転だな。相手の攻撃を見切る目が必要にはなるが……カウンターまで一気に極めようと思うのなら手段としては、良いはずだ」

「にや、にやう……」

「ただ、受け流しにも限界がある。当然無敵の技でもなければ、限界を超えた一発つてのは流せずにダメージになる。この辺りはもつと難しいんだが……聞いているか？」

「ふにや……」

首を傾げる寛治だが、一方で情報過多となった小猫には余裕がない。

耳まで真っ赤にして、その目はグルグルと渦を巻く。

だが、これに面白くないと思うのが、青髪の騎士。

「カンジ！私にも教えてくれ！」

「お前はまず、武器を真面に振れるようになってからだ。というか、お前の場合は技極めるよりも、破壊力に特化させた方が良い。アホだし」

「……そこまで酷いか？」

「酷い……とは、ちと違うな。お前の場合は、理想は力100の技0で一撃必殺を狙う事。その一振りに全身全霊を込められるようになれば、まあ、化けるだろうな」

雑ではあるが、彼女にとっては真理ともいえる指摘。

理想としては、上から下に振り下ろすだけで、どんな相手も一刀両断にするというもの。

試しにゼノヴィアは、木刀を上から下へと振ってみる。同時に、違うと首を傾げた。

風を切る音は鋭く、その先端は容易く地面を砕けるだろう。

だが違うのだ。彼女が知ってしまった、はるか先に行く剣の先達の一振りは。

風を切る、のではなく空を割る。地を砕く、のではなく地を割く。

改めてその技量を目の当たりにし、ゼノヴィアは輝かせた目を寛治へと向けた。隣では、同じく祐斗が木刀を振って、何かに気付いたのか頷いていたが。

まだまだ未熟な彼らだが、それでも着実に一歩進む今日この頃。

そして、運命の和平会談が訪れる。

深夜の駒王学園。

本来ならば立ち入りは禁止されているのだが、この日はまた別の理由で立ち入りが禁止されていた。

「……暇だ」

手で表面を払った階段に腰掛けて、寛治はため息を吐く。

今回行われる三大勢力による和平会談。その発端、もとい契機となったコカビエルの一件を終息させたとして彼は参加を余儀なくされたのだが、その立ち位置はゲストと言って良い。

自然、ゲストが運営側の手伝いをするというのは、後者の外間が悪くなってしまう。ただでさえ、今回の会談は強行であるのだから、猶更。

結果的に、リアスたちからもそれとなく外れておくよう伝えられ、寛治はこうして暇を持て余している所。

時間帯からの眠気は特にならない。というか、起きていようと寝ていようと、体は休まっても精神的に休まる事は無いのだからこの辺りはあまり関係ない。

頬杖をついて、考えるのはこれからの事。

(先輩たちの手助けなら、良い。でもな……)

再三再四とはなるが、寛治がリアスたちに手を貸すのは彼女らの事を気に入っているからだ。そこに種族としての垣根は存在せず、彼女らが彼女らであるからこそ、手を貸している。

裏を返せば、どれだけ悪魔が、天界が、墮天使が危機に陥ろうとも知った事ではない、という事でもある。

そも、義理立ても何もない。勿論、リアスたちに頼まれたならば、動くだろうが。

面倒な事になったと階下を見下ろしていると、不意に彼の無意識の探知範囲の中に圧が割り込んでくる。

(まあまあ強いな。誰だ?)

寛治の感知は、そこまで優れていない。が、それでも一定以上の実

力者であるのなら判別できる程度の精度の精度は持ち合わせていた。

直近だと、アザゼルや曹操がこれに該当する。脅威になるかどうかは別として。

果たして、階下より上がってきたのは、銀髪の青年。

「ここに居たか、山本寛治」

「アンタは………ああ、あの時の白い鎧の奴か」

「俺は、ヴァーリ。今代の白龍皇だ」

「白龍……？兵藤先輩の関係者か？」

「彼は一応俺のライバルという事になるんだが……今の興味対象は君だ」

言うなり、ヴァーリの全身から威圧感が溢れる。

殺気ではない。彼が求めるのは、あくまでも血沸き肉躍る闘争の間であるのだから。それが結果的に殺し合いへと発展する事はあれども、最初から殺傷目的に暴れることは無い。

壁に亀裂が走るほどの圧。だが、その圧を向けられる寛治はと言うと、気の抜けた表情のまま頬杖について、階段から立ち上がる様子もない。

ヴァーリと、寛治は、互いに強大な力をその身に宿している。しかし、持ち合わせた気質に関しては全くの別物だった。

「そうか。俺は、アンタに興味は湧かねえけどな」

元々戦闘狂の嫌いも無く、戦わずに済むならばそれに越した事がない寛治は空いた方の手を振る。

「そうか………なら、君は理由があれば戦うのか？」

「そりゃ、必要に駆られれば火の粉を払うぐらいするだろ」

互いの視線がかち合う。

この場でどれだけ挑発しようとも、寛治は乗ってこない。ヴァーリはその事を理解する。

理解した上で、一時間も経たずに戦う事になるだろう、とも。

その時を思い、知らずの内にヴァーリの口角が僅かに上がる。

この世界に於いて、力有る者は自動的に闘争へと巻き込まれていく。

当人が、望む望まないに関わらず。

*

駒王学園会議室。

和平会談の場として設けられたここでは、各陣営の有力者が顔を合
わせていた。

悪魔側からは、魔王サーゼクス・ルシファー、セラフォル・レヴィ
アタン。

墮天使側からは、総督アザゼル。

天界側からは、天使長ミカエル。

錚々たるメンツであるし、サーゼクスに至っては本気を出せば世界
でも一桁に割り込める実力者だ。

「……」

「?どうかしたんですか?」

「……いや?」

壁に背を預けて腕を組んだ寛治は、問いかけてくる小猫にぞんざい
に返しながらその眉間に皺を寄せていた。

視線。それを向けてくるのは、墮天使側。アザゼルではない、
ヴァーリの方だ。

階段的一幕で、適当にあしらったつもりだった。ヴァーリの方も、
ある程度の立場をもつてこの場に臨んでいるのだから向かつてはこ
ない。

そう分かっているにも嫌な予感というものが拭えな
かった。

(どこが纏まってるんだよ……)

内心で、いつぞやのアザゼルの言葉に、寛治は毒づく。

実際に見て、よく分かる。彼は戦闘狂というものを理解していな
い、と。

戦闘狂のみならず、何処か狂っている者を一般的な価値観を持つ者が理解する事は非常に難しい。

狂人には狂人の理がある。それは、一般的な善悪の範疇を超え、規範やルールの守るべき一線などが介在する余地もない。

だからこそ、アザゼルはコカビエルを御しきれなかった。彼は戦闘狂で戦争狂であったから。平和はおろか、周囲の闘争からの足抜けすらも理解できない。

ヴァーリも、これに近い。彼自身は決して根っからの悪という訳では無く、虐殺などを望んでいる訳でもないが。

彼の闘争欲求は、自己形成の根幹にも根差したもの。

先に、ヴァーリと寛治は同じく強大な力を有していると述べたが、その実その始まりは全く違う。

だからこそ、寛治は彼を、ヴァーリという存在を理解する事は出来ない。戦闘など起きてほしくないと思ってしまう時点で相容れない。会談は、予定調和に進んでいく。

悪魔も天使も墮天使も、既に限界であるのだ。もう意地を張り通して突き抜けるような時間は過ぎていくのだ。

それこそ、このまま進めば後数百年と持たずに、陣営そのものが瓦解しかねないほどに。

だからこそその予定調和だ。この場の代表者たちは、これ以上の闘争を望まない。

この場の代表者たち、は。

「……あ？」

コカビエルの件で少し意見を求められ、後は石ころとなっていた寛治は、突然の事態に眉根を上げた。

世界が止まる。チラチラと盗み見てきた小猫含めて止まっていた。周囲を見渡せば、この場で動けるのは相応の実力者のみ。

「お前は動けるか」

「アザゼル……何が起きてる？」

「さっきも言ったろ。禍の団の襲撃だ」

「対応は？」

「この時間停止は、そのリアス・グレモリーの眷属が持つてる神器によるものらしい。そつちに、リアスたちを行かせて、残りは防衛と攻勢に分かれる事になった。防衛は、サーゼクス、ミカエル、セラフオルーが校舎に防御の結界を張って保護する。攻勢には俺とヴァーリ、それからお前に出来れば出てほしい」

「……はあああ……」

重苦しいため息を吐く寛治。

やる義理は無い、がしかしその分け方には分かるものもある。

問題は、銀髪の美丈夫。

彼はこの状況で欠片も焦っていないなかった。それどころか、先程まで向けてきていた視線がより強まった様に思える。

(明らかに、やらかす気だろ……でもなあ)

リアスたちが動く中で、自分一人動かないというのは寢覚めが悪い。かといって、彼女らの方について行っても無駄に戦力を増やすだけで、寧ろ寛治としては動きにくいというのが正直なところ。ついでに、結界関係も得意でない為、防衛側に残っても役立たず^トまったなしである。

再度ため息を吐いて、寛治は頭を搔く。

彼に選択の余地は無かった。

*

禍の団による会談襲撃。

主犯は、現状禍の団内における最大派閥である、旧魔王派。そこに属する三首領の一人、カテレア・レヴィアタン。

こちらはアザゼルが抑え込み、残りの学園に結界を張って包囲し乗り込んでくるはぐれの魔術師やら、悪魔、その他諸々禍の団構成員を

ヴァーリ、そして嫌々ながらも寛治が相手取る。

「派手だな」

空を見上げて、寛治は眉をひそめていた。その右手には薄く血の汚れが付いた未開放の斬魄刀。腰の左側に鞘を差して左手は目元の庇としていた。

彼の周囲では切り裂かれて絶命した構成員たちの亡骸が幾つも転がっている。

本来ならば鬼道などで広範囲を焼き払う方が手軽なのだろう。

しかし、今のところは共闘だ。無駄に広い範囲を焼けば、自然と空で構成員を相手取っているヴァーリにも被害が及ぶ場合がある。

そして、仮に彼が被害を被れば、ソレを口実として嬉々として襲い掛かって来るだろう。

寛治としては、態々相手に大義名分を与える気も無い。

相当にやる気のない寛治だが、その一方で禍の団構成員から見れば絶望そのものともいえる相手だったりする。

妙な気配のする刀を携え、周囲からの魔法の攻撃も切り裂き、不意打ち気味の後方からの攻撃も見もせず回避した上で、カウンターとして切り裂いてくる。

腕自慢が何度か挑んだが、その都度一合と持たずに切り捨てられてきた。

正しく、化物。或いは、厄災。或いは、絶望。

構成員たちは、若干の後悔を滲ませる。

白龍皇に挑むよりはマシだと考えていたのだ。相手は、ただの人間である。その油断が、今回の命取りに繋がった。

「ば、化けも——ッ!?!」

「いや、人外がそれを言うか?」

刀身に着いた血を払い、寛治は周りを睥む。

彼に戦闘の美学などは特にないが、テロリストとして戦いの場を作った以上、怖気づくなよ、とは思ってしまう。

この辺りは、ドライだ。例え、どんな思想があろうとも、過去があろうとも、敵対した時点で寛治の手心はまず期待できない。

一方的すぎる戦況。いや、これは最早戦いではない。

「終わったか」

見上げた寛治の視線の先では、アザゼルが左腕と引き換えにカテレアを粉碎した所だ。

そして、同時にソレも飛来する。

「——時を改めたぞ、山本寛治。さあ、始めようか」

「……戦闘狂が」

上空からの白銀の鎧による強襲を刀で捌き、距離を取って吐き捨てる。

厳しい表情を浮かべる寛治と相對するのは、白銀に蒼の宝玉が輝く鎧。

ヴァーリの宿した神滅具【白龍皇の光翼】。その禁手化である、【白龍皇の鎧】を纏った姿。

世界的に見てもそうはいない実力者が、今ここに相對する。

チリチリと空気が鋭く研がれていく。まるで、刃の様に。

「ヴァーリ……その闘争の道は、茨なんてもんじゃねえんだぞ？」

失った左腕の処置もそのままに、アザゼルは呟く。

口ではこう言いながらも、心のどこかではこうなるのではないかと彼は何となく分かっていたのかもしれない。

なら止めろよ、と言う話だが、そもそもヴァーリは言葉で止まるよなものではなく、かといって実力行使に出ようものなら、逆に嬉々として戦闘に臨む事だろう。

そして、墮天使勢力で一気に挑んでも、確実に勝てるとは言えないのが、歴代最強の白龍皇という存在だった。

「アザゼル、何故山本君と彼が向かい合っているんだい？」

「見りや分かるだろ、サーゼクス。うちからのもう一人の裏切者って事だ」

合流したサーゼクスに御座なりに返すアザゼル。だが、彼を糾弾する声は他にもある。

「あの鎧は……アザゼル！彼は貴方の部下じゃないの!？」

「部下……そうだな。今回は大人しくするってんで連れてきたんだが……」

「だったら止めなさいよ！」

「言葉で止まるような奴なら、俺だってここで静観なんざしてねえさ。何より、奥の手を切っちゃまった後の俺じゃあ、アイツには敵わねえ。それこそ、サーゼクス位だろう。真面に戦える奴なんざ」

「それほどなのかい？確かに、神滅具を禁手化にまで至らせていることとは分かるが……」

「ヴァーリの立ち位置は、サーゼクスお前に似てんだよ」

ガリガリと右手で頭を搔いて、アザゼルはため息を一つ吐き出した。

「アイツは、ヴァーリ。本名を、ヴァーリ・ルシファー。先代魔王の血を引く男だ。加えて、見りや分かるが人間の血が混じってる。その状

態で神滅具である白龍皇の光翼を引き当てた。過去現在未来に於いて最強の白龍皇だ」

「それは……」

さしものサーゼクスも絶句する。

彼は元々グレモリー家の悪魔であり、襲名と言う形でルシファアの名を継いだにすぎないのだ。だからこそ、ファミリーネームとして名乗る魔王の名は、それだけ重い。

ギャラリーが騒めく一方で、寛治とヴァーリは未だに睨み合っている。

「なんだって、裏切ったんだ。俺と戦うためか？」

「アースガルズとの戦争を提案されてな。かの北欧の神々と矛を交えるのなら、と勧誘を了承した。勿論、君と戦える可能性を高める、と言う理由もあったが」

「……何でもこうも、戦こんなもんいが好きな奴が多いんだか」

頭を搔いて、寛治は肩に入っていた力を抜くと、霞に構えていた刀を下して無形となる。

「死んでも良いってか？」

「勿論、死ぬ気は毛頭ないさ……が、鬪争の果ての結果なら、甘んじて受け止めよう。無論、死ぬその瞬間にまで俺は戦いを止めるつもりはないが」

「そうかよ……ハア、階段でも話したけども、兵藤先輩は良いのか？ 終生のライバルなんだろ？」

「彼か……あまりにも弱すぎるからな。ライバル、と言っても所詮は下級悪魔。コカビエルにも勝てず、禁手化にも至れていない。俺は、一方的な虐殺は趣味ではないんだ」

ヴァーリのいう事も、分かると寛治は内心ではあるが頷けてしま

う。
今の一誠では、逆立ちしてもヴァーリには勝てない。いや、神器の特性上見込みはあるかもしれないが、ソレはある程度先の話。少なくとも、今この瞬間ではない。

寛治は頭を搔いた。

一誠が仮に戦った場合、この場でならサーゼクスが居る為、助けてもらえるかもしれない。腕の一本や二本犠牲にする可能性はあるが。尊敬などはしていないが、それでも顔馴染みの先輩がそんな目に遭う事を許容できるほど、寛治は人でなしではない。

改めて息を吐き、両手で刀の柄を握る。

「手足の一本や二本、切り落とされても文句言うなよ」

「気にすることは無い。本気で——」

来い、と言おうとした瞬間、ヴァーリの眼前に鋭い切っ先が迫っていた。

鉄仮面の下で目を見開き、同時に能力が発動する。

『Divide』

「ッ！」

高速歩法、瞬歩による接敵からの突きを放っていた寛治は、突然の脱力感に目を見開く。

普通はそのまま膝砕けになっている所なのだが、そこは文字通り死ぬ気で鍛えてきた男。無理矢理にでも踏み込んだ右足を強く踏み締め、突きを継続。

だが、脱力の瞬間に僅かなラグが生まれており、これによってヴァーリの体は空へと逃れていた。

その後を、間髪を容れずに寛治は追う。

地面を蹴って切り上げを放ちながらの追撃だ。

本当ならば、警戒して攻め手を一度緩めるべきなのだが、寛治はその定石を無視していた。

「シッ！」

「凄まじい力だな……い」『Divide』

再び力が抜ける感覚を覚えながら振り抜かれる切り上げと、振り下ろされた右足。

甲高い金属音と共に、大きな火花が散り二人は擦れ違う。

場所が入れ替わり、振り上げた刀を持ち換えて大上段に構えた寛治はそのまま宙を蹴って、蹴りの勢いそのまままで下降するヴァーリへと襲い掛かっていく。

迫る寛治を仮面越しに、ヴァーリは歓喜していた。

まず間違いない、今までで最強の敵。

白龍皇の光翼の特性は、半減と吸収。赤龍帝の籠手と対を成すような能力だ。そして、禁手化する事によって半減の力で相手を急速に弱体化させ、その上で半減した力を吸収、自分の力として余剰分を光の翼より排出する。

ヴァーリ自身のポテンシャルも相まって実に破格の能力だろう。

既に、寛治は二度の半減を受けている。にも拘らず、二度交差した鎧には決して小さくも浅くもない裂傷が刻まれていた。

修復は終わっている。だが、半減を受けた上で神滅具の禁手化による鎧を切り裂くのだ。仮に、半減が間に合っていなければ、まず間違いない鎧ごとその中の肉体諸共両断されかねない。

「面白いッ!!」

突き出す左腕に魔力が走り、雷霆が空へと向けて撃ち放たれた。

迫る青白い光に一瞬の内に寛治の姿は掻き消える。雷霆は目標を飲み込むだけに留まらず蛇行しながら、結界の天井へとぶつかり大きく弾けて消えた。

だが、

(……ッ!?下だと!?)

ヴァーリが気付いた時には、既に寛治は溜を終えていた。

左手で刀身の峰を掴み、腰ために構えた状態から放たれる、デコピンの要領による高速の横一闪。

(ッ!) 『Divide』

ギリギリで半減が間に合う。

だが、

「ッ!?な、に……?!」

防御とした右腕。そこに振るわれた刃は、その鎧の防御を完全には抜けない筈だった。

だが、今。白刃は白銀の装甲を割り、その中身である腕の中ほどまでその刃を食い込ませていた。

「チツ……刃筋がブレたな」

舌打ちをし吐き捨てる寛治は、すぐさま体の後方にあつた左手を掌底の形にして突き出してくる。

狙うのは、ヴァーリの右前腕の中ほどにまで食い込んだ刀身。

腕を切断される。気付いた瞬間、ヴァーリは全身から魔力を放出していた。

咄嗟に下がって躲す寛治。刀に付いた血を払う。

「ツ、鎧を抜けるか……！」

「あ？お前の神器は、相手の力を奪うか何かしてるんだろ？二回も受ければ一回に抜ける力の量も感覚で分かる。なら、力が抜ける前提で動けばいい」

いやその理屈はおかしい、と神器に造詣の深いアザゼルならば言うだろう。

白龍皇の光翼は、神滅具だ。神をも滅ぼせるというのは伊達ではない。それだけ破格の性能を有しており、禁手化ともなれば並大抵のものでは耐えられる筈もない。

とはいえ、膠着状態だ。先ほどの鎧を断った一撃も、若干の溜が必要。要するに攻撃に移るまでの助走が要る。

チラリと周りに視線を走らせれば、少なくとも観戦者たちの距離は遠い。

巻きこむ事も無いだろう。何より、解放すれば嫌でも気づいて警戒してくれるだろう。

そして、その雰囲気の変化をヴァーリは感じ取っていた。

鎧を斬られるなど思いもしない。それどころかその下の腕を切り落とされかけるなんて、思案の外だ。

だからこそ、その心は熱く猛っている。

果たして、

「『万象一切 灰燼と為せ』——『流刃若火』」

業火は解放される。

その光景を目の当たりにして、無意識の内にヴァーリは息を呑む。炎が質量を持って荒れ狂っている。しかも、ある程度の距離があるというのに鎧越しですら汗がにじむほどの熱気が周囲を揺らめかせ

なる。

まず、大型のタンクローリーでも突っ込んできたかのような衝撃。次いで、鎧の上からでも分かる高温。

美しいともいえる装甲は、まるで熱せられたチーズの様に泡立ち、あまりの高温に宝玉は原形を留める事無く溶けていく。

地面を転がるヴァーリに、ゆったりとした足取りで近付いていく寛治。

この間に、どうにか魔力で燃え移った炎を払ったヴァーリだったが、その姿は実に無惨なものだ。

「ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……何故だ、半減が……」

「お前、迫ってくる太陽を半減にしたからって、被害と威力が半分になる訳じゃねえだろう？」

うずくまるヴァーリを見下ろす寛治の目には、一切の感情が読み取れない。

「さあ、チェックだ。言つとくが、もう火加減はしない。次は、本当に焼死、いや灰も残さずに消し飛ばす」

「……ふっ……君は随分と、慈悲深いな……ぐっ！」

呻きながら、ヴァーリは立ち上がる。

半壊した鎧。その下の本体もまた火傷による酷いダメージが見て取れる。

しかし、その目だけは爛々と輝き闘争心には一切の陰りが無い事を表していた。

折れない心に呼応するように、その鎧も元の姿へと修復される。

目を見返し、寛治はため息を吐く。コレだから戦闘狂は、と。

ここから何度も打ち据えたとしても、目の前の男は折れないだろう。言われずとも、寛治はその事を察していた。

であるならば、どうするか。選べる選択肢などそう多くはなく、そして山本寛治と言う少年は決して器用ではない。

「——死んでも、化けて出るなよ？」

ため息を吐いて前髪を掻き上げた寛治は、温度を乗せずに言い放つ。

そして、答えは聞かない。

寛治の姿は、唐突にヴァーリの前から消えたのだ。

次に現れるのは、空中。右手に握られた刀が掲げられ、その刀身より溢れていた炎が渦を巻いて集束していく。

熱風が吹き荒れ、周囲の空気が急速に乾燥していく。

仮面の下、乾燥によって切れた唇から血が流れた事にも気付かずに、ヴァーリはその光景にこの日何度目かの驚きをもって相対していた。

「凄まじいな、山本寛治……！」

彼の見上げる先。そこにあるのは、言うなればもう一つの太陽。

寛治の掲げた刀の燃え盛る切っ先の先に、直径凡そ十メートルに迫ろうかという火球が浮かんでいた。

恐ろしいのは、未だに刀身から炎がラインの様に伸びて、火球へとそのエネルギーを供給し続けているにもかかわらず、火球がブクブクと膨らんでいかない点だろう。

火加減をして、神滅具の禁手化による鎧を焼き溶かす業火が、圧縮されてそこにある。それがどれほど恐ろしい事なのか。

「……………ふっ……………ははは……………はっはっは……………はーっはっはっはっは!!!」

ヴァーリは笑う。仮面の下で歯を剥いて、笑う。

気でも違えたのか。否、この男の精神性は己の死程度では揺らぎようもない。

ならば、何故笑うのか。

ソレは偏に、楽しいからだ。この命の危機が、ピリピリとその身を焦がす緊張感が。じくじくと全身を蝕み、今この瞬間を生きているのだと実感させる痛みが。

味わう事の無かった本当の死線が今、目の前にある。その事実が、どうしようもなくヴァーリの心を昂らせて仕方がなかった。

故に、手札が切られる。

「我、目覚めるは 覇の理に全てを奪われし二天龍なり 無限を妬み、夢幻を想う 我、白き龍の覇道を極め 汝を無垢の極限へと誘お

う———
覇 龍 “———
ジャガーノート・ドレイフ

一気に溢れる龍ドラゴンのオーラ。同時に、その体は蒼白の光に包まれ、人の形から逸脱したモノへと変化する。

「……………」

対象の変化を見下ろしながら、寛治は目を細めた。

今のヴァーリは、言うなれば人の形を辛うじて留めたかのようなドラゴンへとその姿を変えているのだ。それも、ただの見掛け倒しではなく、威圧感、溢れるオーラ、昂る魔力等々。禁手化を超えた存在とも言うべきか。

覇龍。封印系の神器の中でも、ドラゴンを封じた神器の禁じ手。その力は、神にすら届くとされるが、その一方で発動には大きなリスクが伴う。

命を落とす可能性、そしてその命を落とすまでの僅かな時間での暴走。

理論上は、制御不可能とされており、そもそも発動した時点で自身と周囲を破滅させる、言うなれば自爆技同然。

だがヴァーリは、この内の命を落とすリスクを短時間であるのなら無視できる。その恵まれた生まれによって獲得した膨大な魔力を生命力の肩代わりとする事によって。

とはいえ、暴走のリスクは当然ある。神器に宿る白龍皇アルビオンとの対話を続けたヴァーリであったとしても、この面は排除できない。

何より、今の彼は消耗しすぎている。覇龍によるデメリットを無視できるのは、通常時以下だろう。

それでも、ヴァーリは強行した。知った事か、と。

白銀の龍が地を蹴る。太陽を破壊せんと。

そして、

「焰星えんせい」

刀が振り下ろされ、それに続いて火球もまた落ちてくる。

この火球に、真正面から突っ込むヴァーリ。

その鼻先が触れた瞬間に神器は起動し――

『D i v』

瞬間、熱波と衝撃、そして極光が結界内を染め上げる。

ワールドクラスの実力者。これは各陣営においても、相当に希少な存在だ。

そしてそれが、人間ともなれば更に話題を呼ぶ。

「いや、熱烈」

学園の屋上でフェンスに凭れかかりながら、ひらひらと手を振ってカードを握り潰す寛治。

和平会談の折から、こうして昼夜問わずに彼の元には熱烈なラブコールが後を絶たない。

無理矢理連れて行こうとしない辺り、まだ救いはあるのかもしれない、がそれでも割と迷惑している事は確か。

だがしかし、今の寛治を悩ませるのはこのラブコールではなかったりもする。

「……………ハア……………」

思い出すのは、件の会談。より正確に言うのなら、ヴァーリ戦。

あの瞬間、火加減などはしていなかった。いや、周囲に必要な被害が出ないように、焼却範囲に関してだけ制限を掛けたが、火力自体は鎧ごとヴァーリを焼き尽して余りあるものだった。

だがあの瞬間、炎の揺らめきの中で、寛治は確かに見た。

ヴァーリの背後。空間が砕けて、そこから薄い青い壁の様なモノが現れ、ヴァーリを保護。その覇龍と化した巨体を砕けた空間の中へと引きずり込んで、加え炎を阻んでみせた。

全てを焼き尽すような業火の竜巻が目晦ましとなり、その一連の出来事に気が付いた者は、あの場において状況を冷静に俯瞰していた寛治にしか分からなかっただろう。

(流刃若火を解放した状態で防がれる、か……………爺ならともかく、アレは……………)

寛治の脳裏にこびりつく、薄く青い壁。

傍から見れば、薄紙同然だろう。だが、事実としてその壁は流刃若火の炎を阻んだ。簡単だったかどうかは、この際問題ではない。

問題なのは、寛治の攻撃を防げるだけの存在が敵方に居るという点。ここで、生き残ったであろうヴァーリの事が出てこない辺り、彼の中での警戒心のレベルの差が分かる。

考え込む寛治。ただ、その内心は本人も気づいていない、小さな高ぶりの種火が灯っていたりする。

というのも、明確な「敵」と言う存在と彼は相對した事が無かったから。

オカ研に入る契機となった墮天使も、ライザー・フェニックスも、コカビエルも、ヴァーリも、等しく彼の敵足りえたことは無い。

そんな中での、刀剣解放状態の自分の攻撃を防いだ相手。

警戒心だけでなく、純粹な戦う者としての好奇心も刺激されつつあった。

「……ん？」

どんな相手なのか。そもそも禍の団に所属しているのか、それともヴァーリ自身の個人的な伝手なのか。

どうであれ、自分と知らない誰かは戦う事になるだろうと妙な確信を得ていると、不意に彼の耳が金属の擦れる音を拾い上げた。

顔を上げれば、美しい紅の髪が風に揺れる。

「ここに居たのね、カンジ。少し探しちゃったわよ」

「どうも、グレモリー先輩。俺に何か用ですかね」

片手を挙げて挨拶してくる寛治の隣へとリアスは進むと、彼と同じようにフェンスへと背中を預けた。

そして取り出すのは、一通の封筒。

「今回は私は、メッセンジャーよ。送れないことは無いんでしょうけど、確実性を考慮したみたいね」

「誰からです？」

「それは、読んでみてから、ね。送り主は貴方も知ってる相手よ」

それ以上は語る気は無いのか、リアスは封筒を突きつけるばかり。

大人しく受け取った寛治は、その紙の質感から上等な代物であると判断。ついでに、先程握り潰したカードと似た様な雰囲気を感じて、眉根を寄せた。

が、しかし、隣に封筒を渡してきた相手がいる為に無視するわけにもいかない。

仕方なしに封筒を開き、中に納まっていた手紙を抜き出す。

「……………こいつは……………」

「夏休みに、ちようど私たちも冥界へと向かうつもりなの。この話を受けるのなら、貴方も一緒にどうかしら？」

「うーん……………」

リアスの申し出に、しかし寛治の反応は芳しくない。

手紙の差出人に関してろくに知っている訳では無いが、しかし悪意を持ってこういう事をするタイプではない事は知っていた。無論、寛治の主観が多分に含まれている為、ソレが幻想である可能性も否定する事は出来ないが。

渋るのは、それら可能性を加味しているから、ではない。

別に相手が想定以上の悪人であろうと、自分を呼びつけて罠に嵌め倒そうとしているとしても、それら一切合切を踏み越えられるだけの力を、寛治は有しているし、その自負もある。

問題は、相手が悪魔御貴族であろうという事。

「何でまあ、ライザー・フェニックスが出てくるんだっての」

「今の彼は、あの時とは違うみたいよ。レーティングゲームもアレから何度か勝ってるみたいだもの。ライザー自身の昇格はまだだけど、眷属は何人か昇進の打診が出てたはずだわ」

「……………そのお礼参り、っすかねえ」

「そう書いてあったの？」

「いや？こいつは招待状でした。それから、一度見てもらいたいものもある、とか」

ヒラリと手に持った手紙を振る寛治。

サブコール
スカウトではない。ないが、しかし現地に赴けばそういう話にもなるだろう。

面倒だと思う。思うが、夏休み暇している事もまた事実。

それに、冥界自体にも興味があつたり。情動が平坦であろうとも、それでも彼は高校生。未知に対する好奇心まで死滅してはいなかつ

た。

「……いざとなったら、先輩のご実家に行きますね」

「フフツ、勿論歓迎するわよ」

肩を竦める後輩に、リアスは笑う。

会談の際に見た光景には、心の底から震えた。しかし、それと同時に彼は自身の後輩であるのだ。これに関しては覆しようがない。

彼女は、無意識の内ではあったが、正解を選び取ったのだ。

腫物の様に扱うのでもなく、手籠めにしようかと勧誘するのでもなく、危険であると排斥しようとするのでもなく。

今まで通りに、いつもの様に、あるがままを受け入れる。

即ち、山本寛治という一個人を見て、ソレを受け入れる。

重要な事はそれだけだった。

*

放課後。この日もまた、グレモリー眷属一同は、揃って訓練、訓練。

一応、悪魔家業の方で席を外すものも居るが、存外彼らは勤勉だったりする。

「うっ、ぐっ……！」

「背筋を曲げるな、伸ばせ。腕は確りと振り切れ。得物の性能に頼り切ってんじゃねえぞ」

淡々と指摘しながら、白刃を振るう寛治を前にゼノヴィアは苦悶の声を漏らすしかない。

二人の手には、それぞれの己の得物、つまりは寛治の手には未解放の斬魄刀、ゼノヴィアの手には聖剣デュランダルがそれぞれ握られている。

発端は、というかゼノヴィアが望んだことだ。

彼女は現在進行形で、デュランダルを扱い切れていない。元々じやじや馬であることも理由の一つではあるが、根本的な部分は彼女自身

の未熟さにある。

「意識を研ぎ澄ませ。でもな、考える事を止めろって意味じゃねえんだぞ?」

「どういう事だ!?!」

「そのままだ。お前は、戦いに対して無駄に頭を回してる。ぶつちやけ、ゼノヴィア。お前に知的な戦いは、無理だ。兵藤先輩と同じく」「私がイツセーと同じか!?!」

「同じ……いや、少なくとも才能とかその辺りはお前が上じゃねえかな。あの人本当に、才能ねえから」

振り下ろされた聖剣を真正面から切り上げて弾き、がら空きとなった胴体へと掌底を入れて寛治はそう評する。

実際の所、ゼノヴィアは才能があるだろう。聖剣に選ばれる事もまた才能、もとい生まれながらの素質が多分に影響している事もあり。

咳き込みながら立ち上がるゼノヴィア。

木刀を使った勝負ですら完敗だったが、本来の得物を持った目の前の男は、最早力を測る事すらも馬鹿らしいと思えるほどの差があった。

「……どう、すれば良い……」

「あ?」

「私には、コレ聖剣しかない。お前を見ていると痛烈に思う。私の持ち合わせた剣技は、兎戯に等しいと。だが、悠長にはしていられない」

お前ははるか先を行くのだから、とその言葉を口に出す事無く呑み込んでゼノヴィアは手元の聖剣へと視線を落とした。

天然物の聖剣使いにして、同時に新たな所有者として見染められた彼女は、相応の鍛錬を積んできたつもりだ。目の前の相手は、鍛錬の密度が違ったが。

聖剣にしても、神器に劣ることは無い。寧ろ、並大抵のモノならば一太刀で切り伏せる。

しかし、それでは足りなかった。いや、グレモリー眷属となって、自分よりもはるかに強い剣士と刃を交えて、その思いは芽生え、育っていた。

それを明確に自覚したのは、会談の折。

彼女は別の露払いへと向かったため、見たのは最後の火焰だったのだが。それでも、その力の波動は感じ取って余りある。

だが、置いて行かれる事だけを是とすればそれは、単なる寄生、或いは利用でしかない。

苦悶の表情を浮かべるゼノヴィアに、寛治は眉を上げる。

別段、彼は答えを提示できるわけではない。語るのは、あくまでも彼自身の理であり、それ以上でも以下でもないのだから。

「お前の振るつてるモノは何だ、ゼノヴィア」

「え？」

「その手に、握ってるモノだ」

「そ、それは……聖剣デユラノダルだ……」

「違うな。まず、その認識の時点で間違ってる」

「は……？」

思わぬ言葉に、ゼノヴィアの目が点となる。いや、そもそも彼女は何を言われたのかを理解できていない。

しかし、そんな事は彼には関係ないらしい。

「お前の握っているものは、剣。つまりは、武器、道具だ。総じてそれらは、担い手が居てこそ初めて効力を発揮する。どんなに名刀だろうと使い手が居なくて床の間に飾られれば、それは単なる置物だ。それが、銃だろうと、ミサイルだろうと、何だろうと。使い手が明確な意思をもって扱うからこそ、武器は初めて武器として機能する。忘れない、ゼノヴィア。どれだけその剣が特別で、意思を持っていようが、振るうのはお前だ。お前の、武器だ、得物だ。人が剣を振るう事があっても、剣に人が振るわれるのはあっちゃやらねえ」

「武器……」

「まあ、偉そうな事言っちゃったが、俺もまだまだ半人前だ。斬魄刀こいっの真価を発揮できてるか聞かれれば、否定する他ねえからな」

「ッ、アレでもか？」

「おう。やろうと思えば、この街一つ消し炭にだって出来るだろうさ。だが、その程度じゃねえんだよ。この刀は、な」

驚愕するゼノヴィアだが、寛治の脳裏を過るのは獄炎を携えた老人の姿。

自分はまだあの領域に立ててはいないと、寛治は考えている。そしてその考えは、毎夜の鍛錬地獄が証明してしまっていた。

だからこそその、半人前。まだまだ道半ばどころか、三分の一も進めてはいないかもしれない。

寛治の言葉を受けて、ゼノヴィアは改めて手元の聖剣を見下ろした。

彼女自身の信教などからも考えて、その手にある剣は、ただの剣以上に宗教的な象徴としての役割も有していた。

だが、改めて考える。

「聖剣……剣は、剣……」

象徴であろうとも、何だろうと結局のところ振るわれなければ、剣は剣としての役目を果たせず、その本来の価値は死んだも同然のモノとなるだろう。

彼女は岐路に立っている。その先に至れるかどうかは、その選択次第だった。